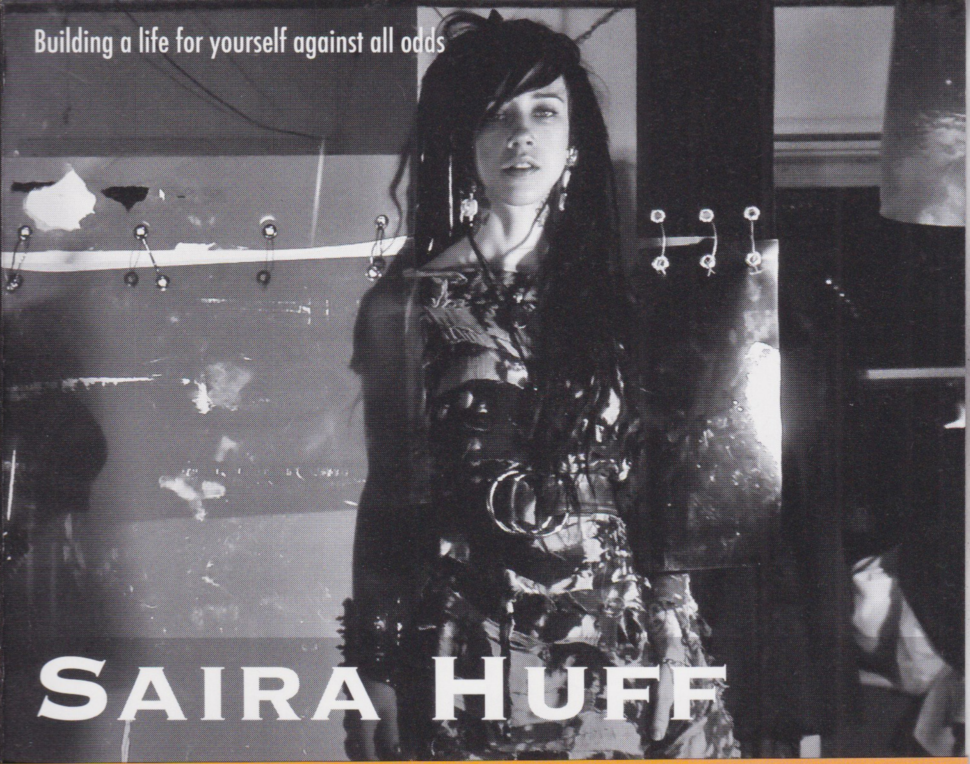
Building a life for yourself against all odds



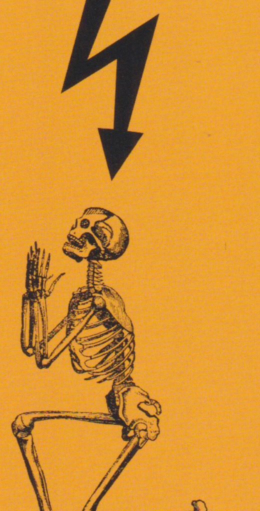
SAIRA HUFF

EX DETESTATION ETC

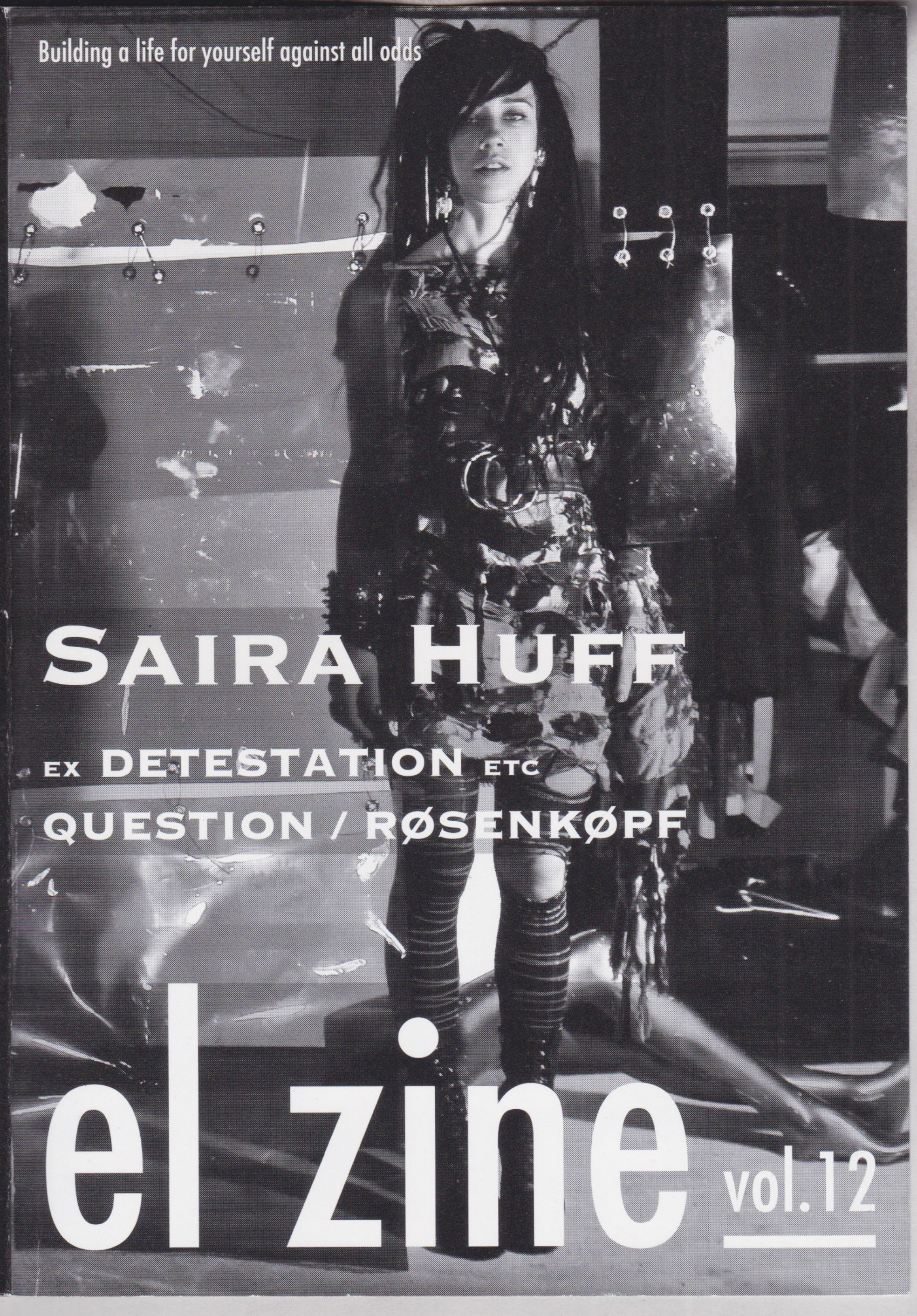
QUESTION / RØSENKØPF

el zine vol.12





Building a life for yourself against all odds



SAIRA HUFF

ex DETESTATION etc

QUESTION / RØSENKØPF

el zine

vol.12



never mind the bollocks & kults

contents vol.12



Photo by Nikki Sneakers

SAIRA HUFF

EX DETESTATION ETC
QUESTION / RØSENKØPF

久々の、そして小さくなったel　zineのトップを飾るのはアメリカ人女性ミュージシャン/アーティストのSaira Huffです。
彼女のキャリアの中で本誌的に最も有名なのはダントツで、90's　PDXハードコアを代表するバンド、DETESTATIONだと思いますが、他にも彼女が関わったバンド/プロジェクトをズラッと並べると、SHRAPNEL　DEATH、EPIDEMIA、ATROCIOUS　MADNESS、A　MESS、RESOLVE、FAGGOTに、今も活動中のQUESTIONと多種多様。そして現在のメイン・バンドであるダーク・ゴシック・インダストリアル・バンドのRØSENKØPFではベースを弾き、更にはLAグラインダーのBLOODY　PHOENIXではゲスト・ヴォーカルを務め(今度リリースされる彼らの4 WAY SPLIT LPに5曲収録されているそうです)、更に更には「私もBLOODY PHOENIXとして年内に来日するかも!」とのこと。
また、オッサン・クラスティーはDETESTATION時代から一転したQUESTIONでのSairaのド派手ファッションに大層驚かされたと思いますが、実は彼女、ニューヨークでファッション・デザイナーとしても活躍中!と、バンドに限らずメチャクチャ精力的に動きまくっているのです。
そんなわけで、幼少期から現在に至るまでの彼女のバンド遍歴と"人生"を辿るべく、話しを伺いました。ポジティヴな発言が多くて元気をもらえます!

INTRO:SAIRA WORKS

インタヴューに入る前に、「Sairaって誰?」という方のため、彼女の主立ったバンドの簡単な紹介をさせて頂きます。

DETESTATION



Sairaが本格的にヴォーカルを務めた初めてのバンド。悲痛なシャウトにDEFIANCE等々でお馴染みのKellyの動きまくるベースラインがあわさった、完成度の高いメタリック・ダーク・クラストで日本でも非常に人気がありました。残した音源も多数。

RESOLVE



DETESTATION解散後、EPIDEMIA〜A MESSと渡り歩いたSairaによって結成されたミネアポリス拠点のバンド。歌唱は変わらずカッコイイ。しかしサウンドが平凡なUSクラストで、正直もう一捻り欲しかった。スプリット7"を一枚リリースして解散。

QUESTION



しばらく鳴りを潜めていたように感じられましたが、このバンドで前線復帰。過去を吹っ切るかのクラスト云々を越境した原初的ピュア・ハードコアでヴォーカル・スタイルもよりパワフルに。今年に入りBLOODY PHOENIXとのスプリットをリリースしました。

FAGGOT



禁忌を嘲笑い倫理を破壊する素晴らしきオカマたち+Sairaによる、野趣溢れるロックンロール・バンド。Sairaはベースを担当。レコードのアートワークも、「よく印刷所がOKしたな…」と感動すら覚える猥雑レベル。解散が惜しまれる程にサイテーでサイコー。

RØSENKØPF



ニューヨークでTHRILLERやDAWN OF HUMANSといったハードコア・バンドをやってきたSoren、そしてSairaによって2年前に結成されたバンド。「遊びで他ジャンルに手を出してみました」という類いを殲滅する、スペーシーな浮遊感と神経剥き出しの緊迫感が融合した本気のインダストリアル・サウンド。

■まずは子供の頃の話しを聞かせて下さい。また、最初に聴いたパンク・バンドは何でしたか?

「オレゴン州のポートランドで生まれ育ったわ。とても苦痛に充ちた、不安定で、精神的外傷を受けた幼少期を過ごしたの。私の母は情緒障害のドラッグ中毒者で、私が4歳の頃に刑務所に入った。それからの私は、乱暴で口汚い酔っぱらいの父と暮らすことになった。

13歳のときに私は家出をして路上で生活するようになった。このときね、私が初めてパンクスと知り合ったのは。父が、私を家に連れ戻すことは決してなかった。だから、パンクスが私の新しい家族になったの。最初に聴いたパンク・バンドって何だろう、CRASSかしら???それともSEX PISTOLS???思いつくのはこんなところ………」

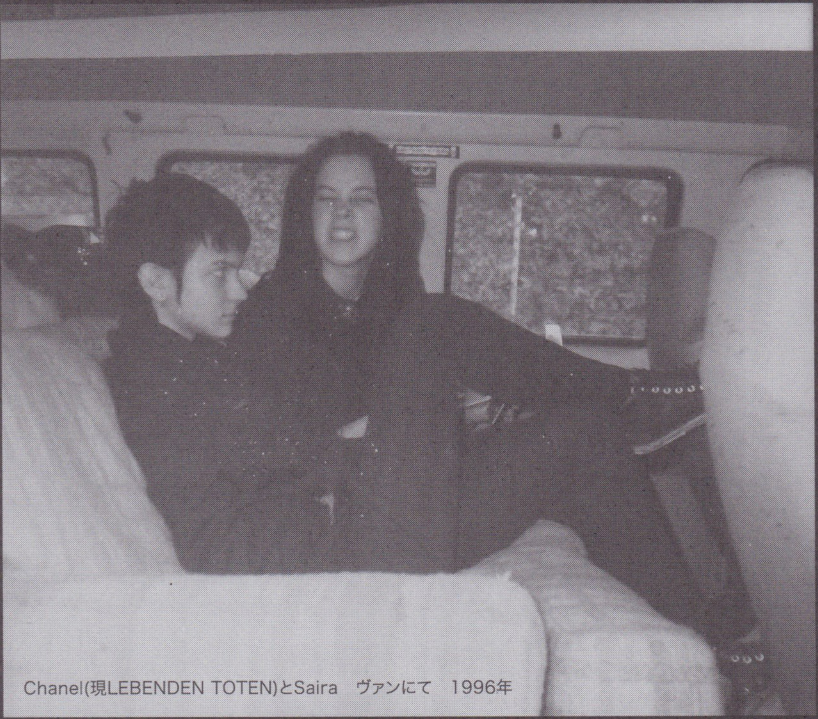
■DETESTATIONが始動したのは95年?DETESTATION以前にバンドはやっていましたか?どのようにしてDETESTATIONは結成されたのでしょうか?

「DETESTATIONが始まったのは95年。私が最初のドラマーだったTy(RIP)と始めたのよ。彼はポートランドの他のバンド、RESISTとGODLESSでも叩いていた。それ以前にも、私はいくつかプロジェクトを友達とやってはいたけど、どうということもないものだったわ。

SHRAPNEL DEATH(MASSKONTROLL/DEATHCHARGEのヴォーカル、Adam Jordanによるプロジェクト・バンド)でヴォーカルをやったこともあるけど、彼がMASSKONTROLLで忙しすぎたみたいだし、私はフル・タイムのバンドをやりたかった。本当、ヴォーカルをやりたくてね、叫んで叫んで叫びまくることって、私にとって治療でもあったから……。DETESTATIONは、Brian HopperとAdam



小さい頃のSairaさん



Chanel(現LEBENDEN TOTEN)とSaira　ヴァンにて　1996年

LuckyがオリジナルのギタリストでI、その頃は2人とも他のバンド、STARVED AND DELIRIOUSでTyと一緒にプレイしていたのよね。Kellyは当初、ツアーだけ参加するはずだったんだけど、加入して欲しいって私たちが頼んだの。
実際は、最初の練習と西海岸をくだるSTARVED AND DELIRIOUSとの一緒のツアーでは、友人のTodがベースを弾いたんだけどね。このラインナップは最初のデモでしか残っていないわ。その後にTyとAdamが辞めて、Tyの代りにAndyがドラムになって、彼はミッドウエスト・ツアーとLPのレコーディング時まで在籍してくれた。Andyが辞めてからは、Dominicが入ってくれて、バンドが終わりを迎えるまで在籍してくれた」

■答えたくなければこの質問は飛ばして下さい。えーと、DETESTATIONが解散したのは、あなたとKellyが別れたからですか?

「ハハハ、それはいくつもある理由のうちの一つでしかないわ。私たち全員の関係がギ

DETESTATION　1 in 12 club　1998年



クシャクしていたの。10週間にも及ぶヨーロッパ・ツアーをして(長過ぎたわ!!!!)、毎日お互いに喧嘩して、全然仲良くできなかった。ツアーが終わり、バンドが地元に戻るとき、私とKellyは別れた。バンドとしてこれ以上一緒にやっていけるとは思えなかったから。うまくやっていけない人たちと一緒にクリエイティヴなことをやるって、楽しくないからね、だから解散したのは自然なことだったと思うわ」

■DETESTATIONの後、あなたはRESOLVEをすぐ始めた感じですか?RESOLVEはCONSUMEとのスプリット7"しかリリースしていないと思うのですが、合ってますか?

「DETESTATIONの後は、一年ほどベルリンに住んでいて、EPIDEMIAというポーランド人のパンク・バンドでヴォーカルをやっていたの。デモをレコーディングしたけど、私はポートランドに戻っちゃった。それからミネアポリスに引っ越したわ。そこでは2人のブラジル人のパンクスとA MESSを始めた。 私はギターを弾いていたんだけど、あれは本当に"メチャクチャ(a mess)"だったわね、ハハハ…。 このバンドもデモを録って何回かショーをやっただけ。

その後よ、私がRESOLVEを始めたのは。CONSUMEとのスプリット7"をリリースして

2、3回ツアーをした。LPを出すくらいの価値はあったけど、メンバー間でまたお互いにもめちゃって、最後のツアー後に私は辞めたの。私がいなくても少しの間、彼らは続けていたみたいだけど、レコーディングはしなかったようね」

■その次のバンドがQUESTIONになりますか?1st 7"を買ったら、ジャケットが手描きのマジックで塗られていたのですが、あれは誰のアイデアだったんです?

「そう、次はQUESTIONだったわね。本当、素敵なバンドだった。RESOLVEの後、もう私は音楽をやるつもりはなかったの。人とうまくやっていくことができないし、もう二度とハードコア・バンドを私はすべきじゃないのかなって思えてきて……。

だから、QUESTIONはこれまで私がプレイしたバンドの中でも、大のお気に入りよ。みんな思いやりがあって、やる気も、才能もある。それに私はみんなとの時間をすごく楽しんでいるからね。最初の7"はカラーで印刷するつもりだったんだけど、ちょっと高すぎてね、それでツアー中にヴァンに乗っているときだとか、遊んでいるときに大部分のレコードに手作業で色をつけていったのよ」

■僕の勝手なイメージなんですが、DETESTATIONの頃のあなたは黒尽くめのクラスト・パンク・スタイルでした。しかしQUESTION以降はカラフルな格好になったように思うのです。何か心変わりをさせせることがあったのでしょうか?

Saira on the road





左 : RESOLVE
Photo by Chris Boarts Larson
Philly, PA　2003年

左下 : QUESTION
Photo by Old HC Dude
LA, CA　2008年

下 : BLOODY PHOENIX
MDF　2012年





「他の人たち、みんながやっていることが、私にとっては常に苦痛であったの。特に、パンク・シーンにおいてはね。DETESTATIONの頃に周りにいたポートランドのパンクスの大多数はとても"強烈"で派手だったし、そんな見た目も私は大好きだった。だけど、どうもみんなカッチリ同じような格好をしているように見えてきて、おまけにどんな格好をしているかによって、パンクスたちは私のことを判断しているように感じられてきてね。それに、当時の私の周りの人たちは"パンク"の服にたくさんのお金を注ぎ込んでいたけど、それが嘘っぽいことのように思うようになった。

私はただ心底音楽をやりたいだけだったし、真剣に捉えてもらいたかった。そんなことも相まって、私は"適合"したくなかったし、性的に注目されるよりも、女性がバンドにいることが自然なことであって欲しかった。それで質素な格好をしていたの。私はいつだって、ワイルドでケバケバしい服が大好きだったのよ。

そしてね、ある瞬間から、私の格好に対して他の人たちがどう反応しおうが気にしないことにしたの。もう自分が着たいものを着ようって。それから私は自分が着る服は全て自分で作るようにした。だから、私が何を着るかという選択が無制限になっちゃった。服装っていうのはこの15年くらい、私にとってのアートなのよ。そして私が服飾に関する製図だったり裁縫の技術を得るにしたがって、それはもっと多彩に、もっと興味深いものへとなっていったわ」

■DETESTATIONやRESOLVE、QUESTIONとFAGGOTはかなり違いますよね。驚きました。FAGGOTはどのようにして始まったのでしょう?

「ベースを弾きたいという気持ちがずっとあって、それで"オカマ(Faggot)"になる連中とジャムり始めたの。私たちはただ思いっきり楽しみたかっただけ…。型にはまったパンク・シーンに対する反抗という面もあったけど…。コスチュームを作る、うってつけの練習にもなったわね。私たちはもっと、パフォーマンス/アート・ロック・バンドだったのよ。音楽よりもパフォーマンスとショー(パーティーね!)をもっと重要視していたから。それは確かに愉快な日々だったんだけど…ある時、良い時間を過ごしているっていうよりも、不快な、見返りのない役目を果たしているように感じちゃって、それで解散したの」

■性差別主義者からFAGGOTに対する嫌がらせはありましたか?

「全然、悪い反応っていうのはなかったわよ。私たちの名前にゾッとして私たちから離れ



ていく人たちはたくさんいたけど。みんな困惑したんだと思う。私がこれまでしてきたバンドとはかなり違ったから。人の気をもませるっていうのは素敵だわ!!!」

■それでは、RØSENKØPFについて紹介して下さい。どのようにしてこのメンバー3人が一緒にやることになったのですか?このバンドの名前はドイツの都市名から?

「RØSENKØPFは2年前からスタートしたダーク・スリー・ピース・バンドで、私はベースを弾いている。最初のうちはギタリスト(Soren)と私だけだったんだけどね。ツー・ピースでドラム・マシーンを使ったインスト・バンド。私たちがこれまでやっていたバンドとは違う何かをしてみようという実験をしていたのよ。

1stデモ・テープをリリースした後に、ドラマーのEmilには加入してもらった。名前は全然関係がないのよ。だって都市の名前だなんて気づきもしなかったから。私たちの音楽とはかけ離れた、意味のない名前にしたかったの。バンド名じゃなくて、私たちの音楽で、私たちだって認識されるようにね」

■LPのレコーディングについても聞かせて下さい。

「いい感じだったわね。数ヶ月にも渡る長期間、私たちは物凄く忙しくてレコーディング

に割くことができたのは3日間だけだったの。過程と最終的な結果には満足している。もちろんアラはあるわよ、完璧なものなんてないからね!」

■Wierd RecordsからLPを出したのはどうしてですか?どういう決め手があったのでしょう?

「マンハッタンでPieter(Wierd Records)が毎週やっているダンス/ライヴ・ミュージック・ナイトがあるんだけど、そこで私たちは彼と会ったの。SorenとChi(ニューヨークのデス・ロック・バンド、ANASAZIのメンバー)が、彼のイヴェントにバンドを出演させてもらえないかとアプローチしたのよ。それで何回かショーに出させてもらった後に、彼は私たちの楽曲を気に入ったみたいで、レコードをリリースしたいって言ってきた。とても自然な流れの出来事だったわ」

■Chaos In Tejas 2012にも出演して、ツアーも最近行いましたよね。

「Chaos In Tejasは楽しかった。障害物マラソンのコースみたいなショーだったわ、ハハ!!!格好良いバンドをたくさん見たし、古い友人にも会えた…。正直に言うとちょっとフェスには圧倒されちゃったかな。実際に楽しめるバンド数の限界ってあるからね。け



QUESTION　Photo by Old HC Dude　LA, CA　2008年

ど、それにも関わらずとても良い時間を過ごせたわよ。

ツアーも素晴らしかった。一つとして駄目だったショーはなかったし。もちろん、このショーは他のショーよりも良かったな、ということはあるけどね。全てを通してベストだったのは、LEBENDEN TOTEN、BELICOSE MINDS、THRONESとやったポートランドでの2日目の晩のショーよ!どのバンドも最高だったし、安堵と心地好さをポートランドに戻るといつも感じる。ロスアンジェルスではすごいレコーディング・セッションも録ったしね…。それがリリースされるのを楽しみにしている!

始まりから終わりまでもう本当に長いドライヴだったけど、景色は息を飲むほど美しかった。グランドキャニオンでキャンプして、アメリカスギの森で遊んだり…。私たちが行ったところの人たちはみんな協力的で、親切で、優しかった。私が行ったツアーの中でもベストなものの一つね!」

■ニューヨークでファッション・デザイナーをしているみたいですね。どのようにしてファッション・デザイナーになったのですか?いつニューヨークへ?

「私は子供の頃から洋服に夢中だったし、デザインや裁縫は11歳の頃からやっていた。ミネアポリスに引っ越してからは、もっと集中してやるようになった。集中力が削が



QUESTION Photo by Samantha Lobrano NYC 2012年

れるからバンドもやらなかったしね。そこに住んでいた10年間近くは、洋服の仕立て方から製図の技術までを必死になって自分に叩き込んだ。
2009年の7月に、具体的に言えばファッションの仕事に従事するため、私はニューヨークへ引っ越した。ニューヨークへ引っ越したら、ファッションに集中するためにも音楽はやらない腹づもりだったんだけど、やっぱり無理だったわね…。私はフリーランスで洋服の仕立てをやって生活している、ファッション/テレビ/広告の現場でね。一方では、革を使った手染めの繊細な仕立て服を作る仕事にも乗り出しているわ」

■僕はファッションについて疎いのですが、服をデザインするとき、あなたにとって大切なことって何ですか?

「自分の手でものを作るということは、色々な製図だったりデザイン、染色の技術を用いた実験みたいで本当に楽しい。私が生活している景色の中で、その外見がより豊かになるようなデザインをしている。いつも私に欠けているものを創造しているのかな。
私が最初、パンクに惹き付けられたのはその外見の特徴もあったし、それが私の自己を形成した。ファッションは私にとって、ストリートのアートでもあるのよ。インスピレーションは様々なことから得ているわ…歴史、自然、宇宙、高次元の意識…。その時に聴いているレコードからデザインをしたりもするわね。音楽を視覚的なものへと組み立てていくのよ」

■人づてにあなたはLEBENDEN TOTENの結成時のメンバーだったと聞いたことがあるのですが、それって本当ですか?

「違うわ。私はATROCIOUS MADNESSを結成したメンバーの一人ではあるけどね(LEBENDEN TOTENのChanelと一緒にね)。デモと最初の7"では曲を書いて演奏もしている。その後に、私はポートランドから去ったのよ」

■そうだったんですか。では、最近のお気に入りのバンドも教えて下さい。

「近頃のバンドならLEBENDEN TOTENは大好き(彼らは素晴らしいわよね。感動的だわ。友達だからってわけじゃなく、友達じゃなくても私は彼らが大好き!!!)、それに最高にロウでレイジングなロックのMIDNIGHT(オハイオ)、CONDOMINIUM(ミネアポリス)はJoe(QUESTIONのドラマー)が在籍していて凄く強烈で演奏技術も高い。
メイン州の田舎の2バンド、TABOOとANCESTRAL DIETにも私は完璧に魅了され

てしまっている。彼らは本当、筆舌に尽くし難いわ…。ヘヴィで、キテレツで、ロウで、真情に溢れている。本物のショーを見せてくれるわね。彼らの歌は物語性があるんだけど、それを伝えてくるのが上手なの。他の人たちが"理解"しようがしまいが、おかまいなしに彼らは音楽を創り出し、それに対して彼ら自身が忠実である。私は驚きを隠せないわ。絶妙よ!ニューヨークのバンドならPERDITION(ノイズ・パンク)、PHARMAKON(ノイズ)、STERLING SISTERS(ダーク・ウエスタン)がとてもいいわ」

■活動の原動力となっているものは何なのですか?

「創造するために生きている。創造しないのなら(音楽やアートとかね)、生きている実感がないの。私の興味が尽きることはないし、目標と大望に向かって続けられる限り、私は成し遂げるだけ。

私の人生にとって最も不安なことは、ただ唯々諾々と存在するっていうこと。人々は才能を有し、できることがあるにも関わらず、自分に欠けている事柄ばかりを強調して、自身の状況を改善するために何もしないでいる。私にとってのモチベーションって、ポジティヴな先例であろうとしていることかな。そうありたいと頑張れば、人生はあなたのなりたいようにすることができる。元気を出して!留まっている必要なんてないのよ!」

■ハードコア・パンクや政治、人生に対する考え方というのは時を経て変わっていきましたか?

「イエスでもあり、ノーでもある。パンクを知ったばかりの13歳の私よりも、今の私は洗練されている状態ではあると思う。たとえ、誰が/どこで/何をして来たとしても受け入れてくれるパンク・シーンは、私に何をもたらしてくれたのか。それは、大きな困難にもかかわらず、自分自身の人生を築いていく、ということ。パンクスの誰も彼もがそうだとは残念ながら思えないけど、私はこの考えをまだ信じているの。

どの音楽シーンにも言えることだけれど、思慮の浅い判断を下しがちな大多数のパンクスの姿勢に、私は時にウンザリさせられる。そういうこともあって、私は"シーン"に全身全霊を注ぐことはしないし、色んなことに関心を持つようにしている。政治に関してだけど、私は個人的に、自分の生活に対しての最善を尽くす。

そして手の施しようがないような大きな問題について、私は心配しないようにしている。生活する上での問題は、あなたを自分が非力で無能だと思わせることがあるけど自身

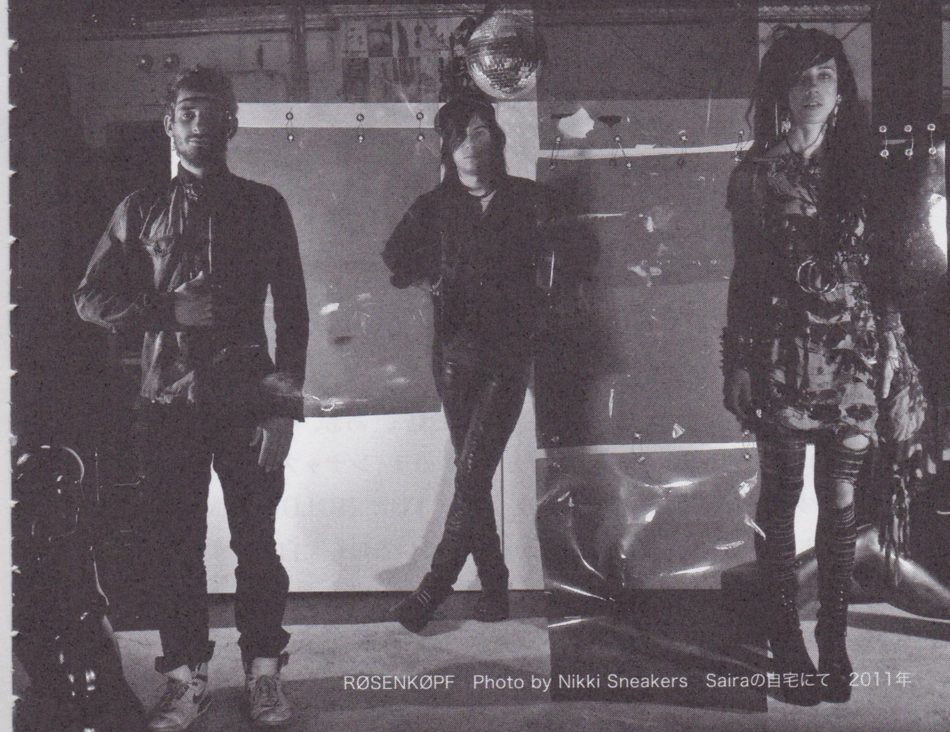
を成長させてくれる。私にとっては日常を過ごすということこそが、最も強力な手段であるの」

■今後の予定を聞かせて下さい。

「学習して、成長して、進歩する。音楽をやって、綺麗になって、旅行して、おしゃべりして、読書して、書き物して、他にも色々。この中のいくつかを日本でしてみたいわね、ハハハ。RØSENKØPFは次のLPのため動いている。その前後には、ツアーにも出る予定よ。次のシーズンの洋服も作らなくちゃね」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後に日本の読者にメッセージをお願いします。

「私のプロジェクトに関心を抱いてくれてありがとう!社会的なことや家族の困難があったけど、自分のための人生を創造するため一生懸命やってきた!それが評価されたみたいで嬉しいの!私は日本人の職業観には感心している。いつの日かじかに見てみたいわ、ハハハ!」



RØSENKØPF　Photo by Nikki Sneakers　Sairaの自宅にて　2011年

現行のアンダーグラウンド・パンク/ハードコアを聴き込んでいる方ならば、リリース作品を持っていなくとも、このVIDEO DISEASE RECORDSという名前はどこかで聞いたことがあるかと思います。
アメリカはカリフォルニア拠点のレーベルですが、ジャケット画像の一覧を見て頂ければ分かるように(次頁に掲載)、パッと見て「あぁ、〜系のレーベルね」というのが"サッパリ伝わってこない"リリースのラインナップ。変態ジャンク・ノイズ・パンクのFRANCIS HAROLD AND THE HOLOGRAMSと、女性Voクラスト・ハードコアのCERVIXが同居しているのも面白いですが、アートワーク含めこだわりが感じられるリリース多数で、今後も要注目のレーベルの一つだと思います。主宰者のBrandenに直撃しました。

■VIDEO DISEASE RECORDSのこれまでについて紹介して下さい。いつ、どうしてこのレーベルを始めたのですか?

「VIDEO DISEASE RECORDSはカリフォルニアのロングビーチが拠点の、とても小さなインディペンデント・レーベルだよ。俺がこのレーベルを始めたのは2009年。友人と俺とで、2006年から、止めようって決意するまでの2007年にかけて、散発的なレーベルはやっていたんだ。

でも俺は新しいバンドを聴いたり、彼らの音楽を他の人たちへと広める手助けをするのを心の底から楽しんでいたからさ、まだレコードを出したかったんだよ」

■アメリカに"VIDEO DISEASE"というハードコア・バンドがいましたが、このレーベル名とは関係があるのでしょうか?

「もともと俺はそのVIDEO DISEASEのヴォーカルだったんだ。2008年に始動して、1年とちょっと続いたのかな。バンドは解散したけれど、俺はこの名前をレコード・レーベルに使おうと思っていてね。VIDEO DISEASEというバンド名を聞いたことのあるやつはそんなに多くはないだろうから、レコード・レーベルとしてこの名前そのままにしたんだ」

■ロゴのデザインをしたのは誰ですか?山羊と蛇?どういう意図を込めて?

「ロゴはFRANCIS HAROLD AND THE HOLOGRAMSのメンバーであるFrancis Haroldがデザインしたんだ。山羊の頭は強烈なサタニック・シンボルとしてほとんどの人が認識するだろうし、俺にとっては漠然とした影、不吉な事実を意味している。

ウロボロス(尾を飲み込む蛇)は不死鳥みたいに、何かしら、古いものの再生を象徴している。俺はレコード・レーベルをやっていたけど、新たに始めることにした。古いものから新しいものが生まれるということ、ウロボロスはそのいい象徴だと俺は感じたんだよ」

■影響を受けたり手本としたレーベルはありましたか?

「さっきも言ったけど、俺は友人と小さなレーベルをやっていた。SMOKING BARREL RECORDSっていう名前でね。その経験からかなりのことを学ぶことができたし、前進できたと思う。

俺がすごくインスピレーションを得たのは、初期DISCHORDとTOUCH AND GOが出したシングルでさ、俺にとって7"っていうのは、パンクとハードコアを最も象徴してい

るものなんだ。そして俺は初期のパンクとハードコアのシングルに心底魅了されているし、だからこそ俺はパンクやハードコアってやつに関わりたかったんだ」

■リリースするバンドはどのようにして選んでいますか?レーベルとして重視していることは?

「俺がリリースした全てのバンドは、その100パーセントを彼ら自身の音楽に対して注いでいた。音楽とは熱情だ、そしてその熱情を共有できる人たちと出会えることは素晴らしい。バンドを選択するということに関しては、完全に状況によるとしか言いようがないな。デモ・テープを聴いて一発で恋に落ちて取り憑かれちまう時もあれば、そのバンドが友人で、いいバンドだなと思ってリリースする時も多分あるんだろう。

俺は自分がリリースする全てのレコードを、しっかりと影で支えるし、バンドの一員になった気持ちで楽しんでいる。大変だけど全作品に熱情を捧げている。それは創造された音楽に対しての、共通した愛情なんだ」

■ほとんどのリリースが7"フォーマットですよね。7"があなたにとってベストなフォーマットなのでしょうか?

「そうだね、パンクとハードコアにおける7"フォーマットが大好きなんだ。7"フォーマットは、パンクとハードコアを最も体現している。MINOR THREATにNEGATIVE APPROACH、DEEP WOUND、PAGANS、CRIMEといった素晴らしいバンド、彼らが7"フォーマット上でやっていたことに、何よりも魅了されたんだから。パンク/ハードコアと7"っていうのは最良の組み合わせなんだ」

■レーベルを運営していて最も興奮することとは?活動を続ける動機とはなんでしょう?

「世界中の素晴らしい音楽を聴くということ、それがレーベルを継続するモチベーションとなっている。しかしながら、どれもこれもがいいというわけじゃない。新しくリリースするとき、俺は慎重にバンドを選ぶしね。購入したり、ディストロで扱うときにしてもね。溢れているつまらないバンドの中から、俺の耳がキャッチした、他とは何かしら違うことをやっている素晴らしいバンドを見つけ出すこと、そこに面白味を感じるんだよ」

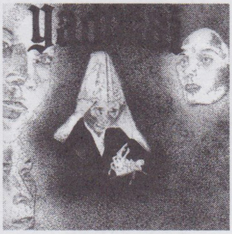
■ところで、あなたはSTOIC VIOLENCEのメンバーでもありますか?このバンドについても聞かせて下さい。愚鈍(の曲名)からこのバンド名をとったのでしょうか?

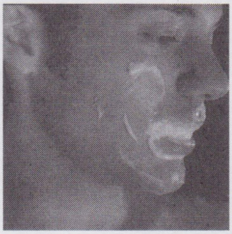

RAWNERVE
TEENS IN HEAT


PIGEON RELIGION
CRYSTALLIZED METH



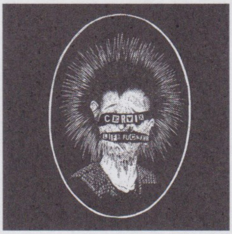


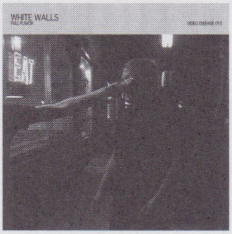




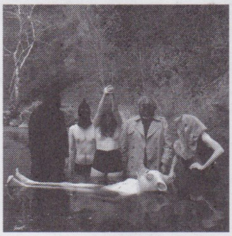

性交



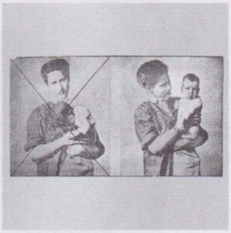


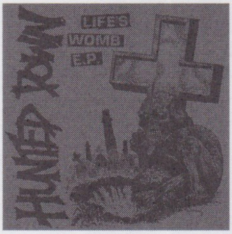

WHITE WALLS

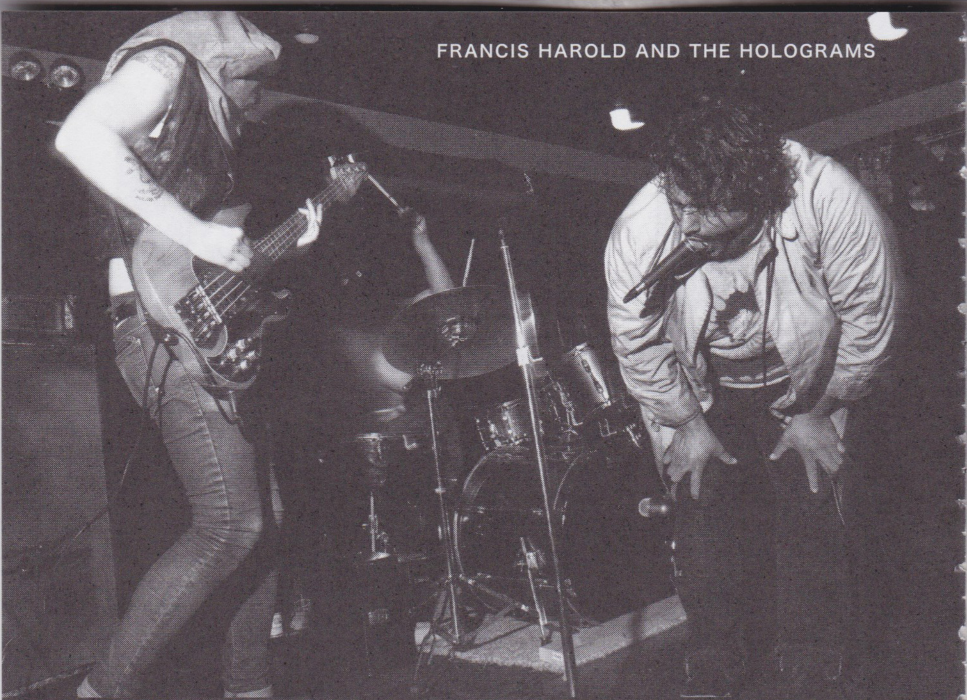




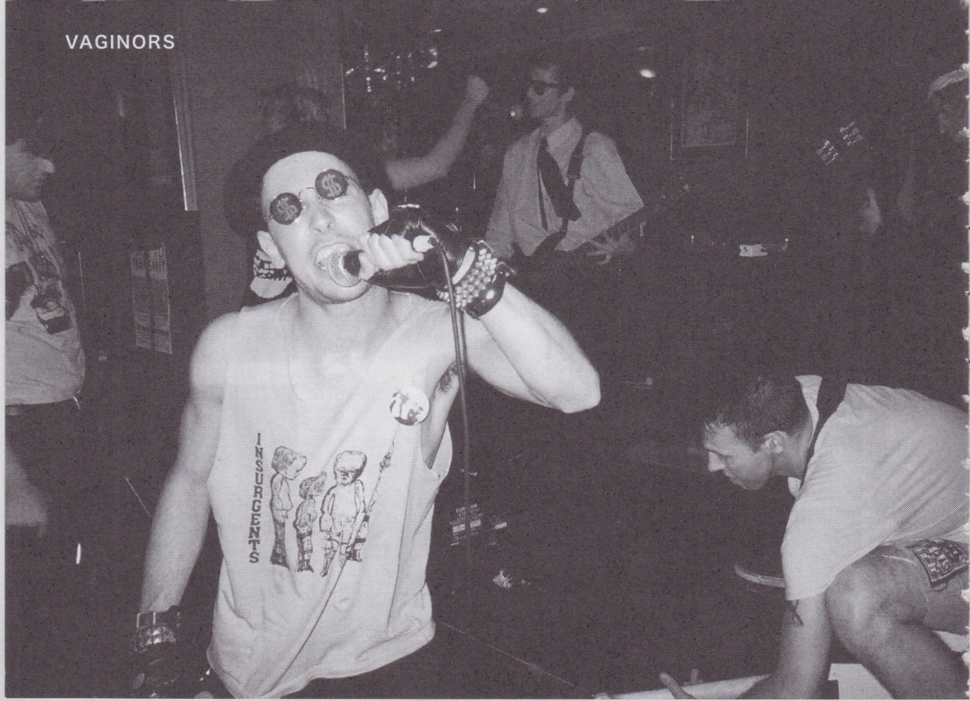

REDFLESH
raw war




LIFE'S
WOMB
E.P.



FRANCIS HAROLD AND THE HOLOGRAMS



VAGINORS

「うん、STOIC VIOLENCEのメンバーだよ、ヴォーカルをやっている。STOIC VIOLENCEは5人組の、カリフォルニア・ロングビーチのハードコア・バンドだ。南カリフォルニアの別のバンド、TRENCH ROTとメンバーがダブっている。3曲入りのデモ・テープを丁度出したんだけど、近いうちに出す予定の10〜12曲入りLPのために今は曲を書いている。このLPを誰がリリースするのかはまだ分からないんだけど、まぁ見込みとしてはVIDEO DISEASEから出すことになるんじゃないかな。俺としてはよそのレーベルとの共同リリースにしたいんだけど、もし駄目だったら自分でやるだけさ。そうそう、愚鈍の曲から俺たちはこの名前を拝借したんだ。俺は日本のハードコアの大ファンだし、USハードコアを除けば、何よりも好きなんだ。俺はアメリカのバンドが日本のバンドから名前を拝借していることに関して、日本の人たちが怒るんじゃないかと少し心配していたんだけどさ、日本の人たち何人かと話したら、この名前とデモ・テープを気に入ってくれているみたいで、とても嬉しかったよ」

■そもそもパンクとはどのように出会いましたか?何歳でした?

「EPITAPHのバンドをよく聴いていたよ。8歳〜10歳くらいの時かな。1990年代のここアメリカで、特に俺が育ったのは南カリフォルニアだったから、デカい存在だったね。11歳か12歳くらいにはRAMONESとかTHE CLASH、SEX PISTOLSみたいなバンドを発見した。そして13歳、14歳の頃には(高校に入学したばかりの時だよ)、BLACK FLAGの『Damaged』のCD、MINOR THREATのディスコグラフィーCDを買ったんだ。そして、俺の音楽に対する見識は完璧にひっくり返った。まさに目を見開くような体験だったね、どれを聴いても速いし、ラウドだし、しかも怒りまくっている。すぐにパンクとハードコアに足の先までドップリと浸かっちまったよ。俺が若かった頃に初めて見出した、パンクとハードコアのクラシックなバンドだってずっと聴き続けているし、新しいバンドを探し出して聴くことだって止められないでいるんだ」

■漠然としていますが、最近のUSハードコア・シーンについてはどう考えていますか?

「USハードコア・シーンは世界的に見てもベストなものの一つだと思う。だけれどもここに住んでいるやつらは、小さな都市を見過ごしがちではあるかな。一般的にみんな、大きな都市のハードコア・シーンに注目している。ニューヨークやボストンみたいな都

市に行くやつらは多いからね。

この国の大都市以外で何が起こっているのか、ここに住んでいるやつらは時間を割いてでも探求する必要がかなりあると思うよ。大きな都市に限らず素晴らしいハードコア・シーンっていうのはたくさんあるんだから。

最も見過ごされている都市はロチェスターだな。ロチェスターは今この瞬間も、大量の素晴らしいバンドを輩出しているし、このことに気づき始めているやつらも出てきた。RATIONAL ANIMALS、INSUBORDINATES(今は解散している)、THE NARCS、BAD TASTEといった最高のバンドは、このスゲー都市から出てきているんだぜ。俺の出身地であるロングビーチ/ロスアンジェルスもまぁ、同じように見落とされているかな。不幸なことに俺たちはダサいパワーヴァイオレンスや冴えないスケート・スラッシュ・バンドを産出しているという評価を得てしまっている。いくつか素晴らしいハードコア・バンドが発見されているにも関わらずにね。

TRENCH ROT、KNIFE FIGHTにZOLOAといった、今の南カリフォルニアの最高のバンドにはみんな注意を払って、聴いてみたほうがいいぜ。デカい都市だけじゃなくて、お前の身近にも素晴らしいパンクとハードコアがあるってことを、このインタヴューを読んだやつらが気づいてくれたらいいね!小さな都市でも情熱的なシーンがあるのならば、どうかサポートしてやって欲しい。パンクとハードコアに全身全霊を捧げたやつらが今もいるのだろうから」

■最近の気に入っているバンドは?

「ここ最近のヘヴィ・ローテーション中のレコードは、NEON PISSのLP、NOのLP、VAGINORSのLP、HERPES(ニューヨークのバンド)の7"、LUST FOR YOUTH『Growing Seeds』LP、CRAZY SPIRITのLP、ANASAZIの7"、HOAXのレコード全部、BIRTH DEFORMITIESの10"(スゲー作品だから、これは手に入れろ!)、PERSPEX FLESHのデモ・テープ、CULOのレコード全部、DRY HUMPのレコード全部、AXEMANの12"、ZOLOAのデモ・テープ、KREMLINの7"、NIGHT SINSの新しいテープ、INSERVIBLESのLP、EFFLUXUSのLP、DOSESのデモ・テープ、GUTTER GODSのデモ・テープ。

今、精力的に活動しているバンドで気に入っているのは、WARCRY、URBAN

BLIGHT、CULO、SCHOOL JERKS、BLOODKROW BUTCHER、NEO CONS、AVON LADIESかな、もっとたくさんあるけどね。パンクを貫いている格好良いハードコア・バンドが世界中に何百といるからさ」

■今後のリリース予定は?

「VIDEO DISEASEの今後は未定だね。レーベル作業やら通販作業で、もうこれ以上何もできないってちょっと参っちまう日もあったりするんだ。だけど、時間がある時に俺を完全に圧倒してくれるようなバンドを聴くだろ。そして彼らがレコードを出すことを了承してくれたら、彼らの音楽を世界中に知らしめる、その手助けのために俺はまた多忙を極める。けどその過程にいられるってことが、俺にとっては最もエキサイティングなことの一つなんだよ。

そしてバンドが新しい提案をしてきたりするのを聞くことによって、俺の気分も盛り上がってフレッシュになってくるしね。2012年の8月には4枚のリリースを予定している。VAGINORSの7"、TRENCH ROTの7"、WHITE WALLSの12"、そしてASHtoDUSTの7"。その後もいくつか予定はあるけど、今はまだ黙っているよ。時が来たら全て明らかになるだろうし。考えうる限りでは、2013年以降もレーベルは順調にいくと思う」

■インタヴューさせてくれてありがとう。最後に、日本の読者へ向けてメッセージを。

「Kenji、俺へのインタヴューに時間を割いてくれてありがとう。レーベルと俺が出したバンドに注目してくれるやつらがいるってことが分かって嬉しいよ。日本の読者へ。このインタヴューを読んでくれてありがとう。レーベルやバンドをサポートしてくれて感謝しているよ。アンダーグラウンド・パンクとハードコアよ、永遠であれ!」

http://videodiseaserecords.com/

世界中の素晴らしい音楽を聴くということ
それがレーベルを継続するモチベーションとなっている

Tokyo Record Shop Long Interviews

仕事帰り、学校帰りにフラッとレコード屋に寄って、予備知識ゼロのバンドの音源を直感で買い、ワクワクしながら帰途につく。そして自宅で針を落として…絶望する(笑)。こんなことが"贅沢"になるなんて、誰が予想できたでしょうか。音楽業界は大不況(音楽業界に限らないですが…)と言われ続けて早10年以上、普段お世話になっているレコード店さんに昨今の現状を聞くべく、東京・高円寺のBOY、BASE、そして西新宿のNATのスタッフさんにお話を伺ってきました。ネットで事前に調べた上でレコードを買うのもいいですが、たまには"ジャケ買い"や店員さんとの会話を楽しみながら買い物するのも一興です。



RECORD BOY

トップは高円寺の老舗、RECORD BOYの大倉さんです。
弊誌にはこれまでも「レコード屋さん密着24時!!」(vol.9に掲載)や、「Tokyo Leather Boys」(vol.10に掲載)などにご登場いただいていますが、大倉さんの"音楽の楽しみ方"とその姿勢に、感銘を受けている人も多いのではないでしょうか。今回はオススメ・バンドの情報も色々と聞くことができましたので、じっくりとお楽しみ下さい。

■まずは去年、"これはよく売れたな"っていうレコードは?

「MIDNIGHTというアメリカのメタル・バンドの新しいアルバム『Satanic Royalty』ですかね。久しぶりのリリースだったので、うちも力を入れました。去年っていうと、それがまず思いつきます。まぁ、発売が年末だったから印象が強いのかもしれませんけど」

■以前からずっとMIDNIGHTは推していますよね。

「はい、メンバーがMIDNIGHTの前にやっていたBOULDERの頃から好きで、連絡していた人でもあったので」

■MIDNIGHTもそうでしょうが、オススメのバンド/作品となると?

「今年に入ってからだと、NMEっていう昔のアメリカ・シアトルのスラッシュ・メタル・バンドがオフィシャルで再発になったので、それはオススメです。VENOMに影響されたスラッシュ・メタルなんですけど、アメリカのハードコアに近い感覚もあるので、再発モノではNME。

あと、METAL DUCKっていう、ELECTRO HIPPIESの人が絡んでいたスラッシュ・メタル・バンドの再発も、UKのスラッシュ・メタル/ハードコア・パンクの歴史検証という意味で、面白いカルトなリイシューです。ELECTRO HIPPIES絡みというところから、初期Peacevilleや初期Earacheあたりの80年代後期UKスラッシュコアの雰囲気が好きな子に、ここ数年アピールしてたみたいです。でも当時日本ではハードコア・ファンには全然相手にされてなくて、て言うかパンクの人はほとんど知らなかったんじゃないかな?メタル系のファンジンでレヴューされたり、(スラッシュ・メタル・バンドの)CASBAHが交流あったりしてたので、80年代にアンダーグラウンドのスラッシュ・メタルを細かくチェックしてた人は覚えてたバンドだと思います。UNSEEN TERRORのキャップとCASBAHのTシャツなんてルックス、今考えると最高です」

■なるほど。

「現行のバンドだと、MIDNIGHTと同じように、メンバーに普段から良くしてもらってい るアメリカのSUPERCHRISTっていうバンドがいまして、ヘヴィ・メタルなんですけど ロックンロールの延長線上にあるメタルっていうのを、キャッチーにわかりやすくやって るバンドです。

例えばMOTÖRHEADはメタルが嫌いな人でも好きな人は多いと思うんですが、 SUPERCHRISTもヘヴィ・メタルなんだけどロックンロールも強いバンドで、メタルが 苦手な人が嫌う、現実離れした仰々しさもないので、とっつきやすいと思います。でもメ タルらしい古臭いメロディもあって。先入観なく色々聴きたい人にもいけるバンドです ね」

■アベさん(LIFE)も好きですよね。

「あぁ、アベさんも好きで新作は取り置きしてたんですけど、取り置き期限を過ぎたので キャンセルにしました(笑)」

■(笑)。

「SUPERCHRISTはシカゴのバンドで、若手のバンドにも慕われてて、このバンド中心 にシカゴのメタル・シーンが形成されてるみたいなんですが、シカゴのメタル・シーンと 交流が深いのが、デトロイトのシーンでして、SHITFUCKERっていう、見た目からして ガラが悪くて関わり合いたくないようなメタル・パンクから、BORROWED TIMEって いうエピック・メタルまで、メンバーも被ってるバンドが多いので小さなシーンなんで しょうけど、メタルとパンクの、異端も正統派も、他のどの地域のシーンより濃いバンド が密集した感じがあって凄く面白いですよ。

BORROWED TIMEは、MIDNIGHT、SUPERCHRISTに続いて、今後永く付き合っ ていければ嬉しいなあ、って思ってるメタル・バンドです。それと、日本のSEX MESSIA HのEPを出してたイギリスのME SACO UN OJOっていうレーベルも、(リリースの)全 部とは言わないですが、デス・メタルとクラスト・パンクの接点から(バンドを)チョイスし ているところがあるので、海外の今の傾向を探るには面白いと思います。

あと、イギリスだとSALUTE。DARKTHRONEが何年か前にブラック・メタルとパンク の中間みたいな方向性にチェンジしてから、そういうバンドはよく見かけるようになった

んですが、SALUTEはDARKTHRONEよりも先にそういう感じのをやっていたみたいです。実際にDARKTHRONEのメンバーとも交流があったりして、DARKTHRONEは実はけっこうこのバンドにインスパイアされたんじゃないのかな？って思わせるところがあります。アルバムを2枚とスプリット・シングルを出していて、初期はまあプッシュするほど格好良いわけではないんですけど、2ndアルバムは本当に渋いんでオススメしたいんですが…発売したレーベルがもうレーベルを止めたみたいで…」

■廃盤ですか。

「でも(SALUTEは)最近スプリットEPを出して、それはAMEBIXみたいでまた面白いですから。ブリストルのバンドなんで、DESTROYファンジンの人も、"あぁ、SALUTEね、いいよ、あのバンドは"って言ってました。あんまり派手な売り出し方するようなバンドじゃなくてマイペースなんですけど、このバンドは今後も楽しみにしてます。

他にもUSのSATAN'S SATYRSっていう、VENOMとBLACK FLAGをミックスしたようなガレージ・メタル・バンドや、EMPERORやってたFaustのSTUDFAUST、あと再発ですけどAxCxのSethがやってたVAGINAL JESUSなど、パンクとメタルの境界線にあるバンドで面白いのはまだまだいろいろありますから、興味は尽きないです」

■ところでHPにショッピング・カートを取り入れたのは去年でしたっけ?

「去年の5月です。1年経ちました」

■どうですか?変えてみて。

「やっぱり今はこれが主流なんだなっていうのが、実際にやってみてよく分かりました。お客さんは楽でしょうし、こっちはアップデートが面倒なんですけど、注文の対応が凄く楽です。お客さんも買いやすいと思いますし、ショッピング・カートを考えた人は凄いですね。

ただですね、初めて注文してくる人が増えてきたようにも感じますが、その分、最初から冷やかしなのか、何かのっぴきならない事情が生じたのか分からないですけど…」

■不払い?

「はい。買えなくなった何か事情があればこっちも知りたいわけですし、善処しようという気もあるのですが、電話やメールで連絡しても応じてくれないと困りますね。そんなにしょっちゅう入荷するってわけじゃない物がほとんどですから、そういう人が人気のあ

る商品を押さえてたりすると、その時買い逃した他のお客さんにも申し訳なくて」

■どこにでも売ってたり、有り余っているものでもないですしね。

「充分な在庫を最初から用意できればいいんでしょうが、的確な仕入れ数を読めれば、こんなにヒーヒー言わずに、もうちょっと儲かるわけで(笑)。予算もタイトですし、そんなに甘くないんです。本当に欲しい人に行き渡ってくれれば嬉しいんですが」

■客層の変化は感じますか?

「あるとは思います。前から良くしてくれていた人が、買いづらくなったと感じて離れてしまったりするのは、ちょっと切ないですが、でも逆に、数年間注文がなかった人がカートにしたらまたボチボチ買い始めてくれたりする方が多いんで、やっぱりコレが今の主流なんですよ」

■通販の方法も、20年前なら雑誌に広告を出すとか、カタログを郵送するとかでしたよね。みんな電話やハガキで注文したりして。それがPCでの注文に変化していって、大倉さんは両方経験していますが、どうですか、昔のほうが良かったみたいなのは?

「今はちょっと興味を持てば、入口はあちこちにあって広くて入りやすいですから、やっぱりそれは悪いことではないと思いますよ。…いや、でもべつに良いことだとも思わないかな(笑)。よくわかりません。通販するドキドキ感ってのは、昔のほうがあったのかなぁ。当時は今みたいに通販自体が世間一般でポピュラーじゃなかったですから。高い現金書留の手数料払って送金して、一体いつ届くのか…みたいな感じで」

■昔はレコード屋さんに行くのもドキドキしながらで、"来たからには何か買わなきゃ"って買うけど、全然格好良くないという(笑)。

「でも、"雑誌にはこれがオススメ!って書いてあるから、これが格好良いんだな!"と思い込む。あー、今こそ、それが必要ですね(笑)。"なんでこれを雑誌ではオススメしているんだよ、全然格好良くないと思うけど…"っていうのを、良いと思い込む(笑)!」

■良さが分からない自分が駄目だと思いますからね。

「とにかく付いていくのに必死だったから、先輩から、"お前、これスゲー格好良いから聴いてみろよ"なんて言われたりしたら、そりゃもう嬉しくて、頑張って好きになろうと努力しましたもん。昔は今みたいに情報が溢れてなかったですから、8割くらいは失敗す

るのを覚悟して買っていましたし、でもそれも含めてみんな楽しんでたと思うんですよ」

■来店のお客さんで、"オススメないですか?"って訊いてくる人はいますか?

「いますよ、たまに。そういう人って、関係が長続きするお客さんが多いかもですね。"この間薦めてもらったやつ、良かったですよ。ああいうのないですか?"とか言われると、こっちも力が入ります」

■そういえば、お客さんにベスト5を挙げてもらって(RECORD BOY Customers Favorites 2011)、HPに掲載していましたね。

「HPをショッピング・カートにしたとき、新入荷商品紹介用にブログも始めたんですが、その時お客さんから、"昔のDOLLでやってたような、店員の選ぶベスト10みたいなのを、ブログでやってほしい"と言われたんです。で、昔の雑誌の読者投稿みたいに、お客さんが何か自己主張をする場があってもいいんじゃないかと僕は以前から思ってまして、じゃあ、(ベスト5を)お客さん達にやってもらおうと。

BOYで買ってくれてるお客さんって、レコード聴いてバンドの状況や環境とかを分析したりプロファイルするのが楽しい人が多いんじゃないかと思うんですよ。僕がそうなんで。"ENGLISH DOGSの「Ambassador of Fear」は、SLAYERの「Evil Has No Boundaries」をパクったんだろうな"とか、"FINAL CONFLICTはロブ・ハルフォードと一緒に写真も撮ってるし、このロゴの元ネタはやっぱりJUDAS PRIESTなのかな?"とか。

で、後々インタヴュー読んで、"やっぱりこの人達、こういうのが好きだったんだ!"っていうのがわかったり、予想と違ってたり、とか。僕は音楽のことなんか今でも全くわかってませんけど、こういう音楽聴くようになって、凄く楽しめるようになりましたから、考えて聴くことを楽しいことだと、もっと意識していいんじゃないですかね。

"考えるんじゃなく感じろ!"なんて言う人もいますけど、レコード屋ごときが、そんなに感受性豊かじゃネッすって(笑)。なので、僕みたいに妄想が膨らんで、あれこれ理論や推測があるんなら、それはいつか誰かに聞いてほしくなりますよね。ブログをやってて、そこでレヴューを公開してる人もいるかもしれないけど、もうちょっといろんな人の目につきやすいレコード屋のHPで、自分の理屈を言えたら楽しいんじゃないかなと。

僕の友達で、"この間買ったNME、メチャクチャ格好良かったよ!俺のルーツはNMEだ

ね。これからはそう言いまくるよ"って、バンドもブログも何にもやっていないのに(笑)そういうことばっかり言ってる、アホな話するヤツがいるんですが、僕は彼の気持ちが物凄く良く分かるんですよ」

■今後もベスト5はやる予定ですか？

「今年はたぶんやりません。でも1年に1回くらいは何かやりたいので、きっと他のことはやると思います。"バンドやってる人のベスト5も知りたかった"って言ってくる人もいまして、僕もバンドマンとレーベル関係者からもベスト5を募ろうかとも考えたんですけど、残念ながら今のバンドマンは、昔のようにレコードやCDを買う人は少ないみたいですから。もちろん、現役のバンドの人で、BOYでもこまめに入荷チェックして買ってくれる人もいますよ。ハードコアの人達が欲しいものが今のBOYにはあまりないってのもあるんでしょうけど、"バンドやってる人はレコード買わなくなった"って、他店さんやレーベルやってる人も言ってましたし。

僕がBOYで働き始めた頃、店に出入りしてたCRUCK、BASTARD、DEATH SIDEなんかのハードコア・バンドの人達は、僕の全然知らなかったような海外のバンドのレコードをたくさん持ってて、"この7"のバンドはなんですか?"って、恐る恐る聞いたりしたんですが、ファンはやっぱりそういうの凄く欲してると思うんです。まぁ、バンドマンや関係者にやってもらうなら、ワーストを選んでもらったりするのが面白いですかね(笑)。でも最近はパソコンの翻訳機能が向上しているから、海外のバンドやレーベルの人からも、(BOYの商品解説に対して)"なんでこんなことを書くんだ!"って怒られることもあるので、"外国人だから分からないだろう"という甘い考えは通用しないみたいです(笑)」

■ところで、オンライン・ショップ化を考えたことはありますか?

「実店舗は撤退してということですか?」

■はい。

「いつでも考えていますし、既に半分そういう気持ちでやってますよ。幸い、ここは家賃が比較的安いので、"来店して購入もできる倉庫"みたいな気持ちでいます。オンライン・ショップでやるにしても自宅ではできないですし、倉庫を借りてやるにしても、ここより家賃が高くなってしまうかもしれないですから。

例えば、(新入荷商品の販売は)最近はカートアップが先なんですよ。それから店頭に

出して、商品解説のカードを書いたりとか。お客さんも仕事帰りや休日に、欲しい商品の狙いを定めて買いに来る人がほとんどですから、店舗はもはや受け渡し場所みたいな感じとも言えますね。でも、HPアップ後すぐにカート注文して取り置きしといて、後日引き取りに来るってのが今時の賢い買い方なんでしょうけど、やっぱり現物見てアレコレ考えて決めたいって人もまだ少なくないんです。そういうお客さんがHPを見て直接足を運んでくれたのに、来てみたらもう在庫がないなんていう時は、申し訳ないなって思いますね。

来店する人が全然ない平日なんて、今は当り前になっちゃいましたが、高円寺だとライヴ・ハウスもありましたから、週末は多少こっちにも人が流れてくれたんですよ。そういう時のためにも、やっぱりイチオシの商品は、いつでもオススメできるようにストックしておかないとダメですね」

■20000ボルトがあった時だと、ライヴがあると人が流れてくるっていうのはありましたよね。

「(20000ボルトが)東高円寺に移転した今でも、この間REDNECKSが企画やってた時なんかは、いつも良くしてもらってるお客さんが、ライヴ行く前に注文してた商品を買いに寄ってくれたりとかしましたから」

■"人が店に来ない"っていうのは、いつくらいからですか?ネット通販が当たり前になってから、ガクッと?

「いつからですかね…。もうこの商売、永遠の下り坂なので(笑)、10年くらい前から既にこんな感じだったんじゃないでしょうか。他店さんに行けば、平日の昼間でもお客さんはいるので、うちみたいな限られた人に向けてアピールしている店だと、余計そうなっているんでしょうけど。

さっきも言いましたけど、昔は失敗するのも覚悟して買うのを楽しんでた人が多かったと思うんですが、今の人達は買い方が上手なんです。家や携帯(からHP)でじっくり品定めして、狙いを定めて買いに来る。杉並区内から通販の注文もありますし。都内だと、車を停めるのにもお金がかかるわけですから。バブルの時並みに景気が良ければ、もう少し"無駄な行為を楽しむ"余裕も持てるんでしょうけど、今の時代はそれは無理ですかね」

■誌面で使えるか分かりませんが、どんどん人が来て欲しいと思いますか?それとも、人は来ないでいいから注文だけ来ればいいな、と思いますか(笑)?

「(笑)。もう理想はですね、ゴルゴ13のように、全く無駄口をきかずに、例えば"80年代後期から90年代中期にかけてのデス・メタル/ブラック・メタルの再発モノを3万円分、北欧産を中心に用意してほしい"なんてプロフェッショナルなお客さんが毎日来店すれば、梱包もしないで済みますし、送料も無料サービスにしないで済みますから、こっちの経費もかからないでパーフェクトですよ。"過剰在庫もダブって入れて"なんて言われたら最高です」

■本音過ぎます(笑)。以前に、"委託ならなんでもOKで昔はやっていたけど、今は選んでいる"と言っていましたが、今はもっとシビアに?

「更にシビアにとか、緩めるとかはとくに考えてないです。ただ、こっちが、"今のうちで扱うのはキツいかな"って断る以前に、最初からコンタクトがないリリースは増えました。ちゃんとウチの特色をわかってて、"置いて下さい"って言ってきてくれるのは本当に嬉しいですよ」

■大倉さんはレコード屋をやっていなかったら、何をやっていたと思いますか?

「うーん、何ですかね。普通にサラリーマンでしょう。最初は真っ当に就職もしていましたし。BOYに入ってからも、家族ができたとか、色んな節目節目で、サラリーマンになろうかなと思ったことは何度でもありますけど、まぁ、僕には何にもないですから。職歴がないようなもんですからね。今は同じ職域で自分を売り込むしかないでしょうし、サラリーマンっていっても、9時〜5時のネクタイしてっていう仕事にはこの先はつけないでしょうから。でも、今もよく考えますけどね、"あと何年もつかな"とか、"あのお客さん景気いいみたいだから仕事紹介してくれないかな"とか、色々(笑)。

(BOYが入っているビルの)同じ階に、雑貨屋の倉庫があるんですけど、商品の発送する量が凄いんですよ。そうしたらこの間、"(BOYの)隣の部屋も借りることになったんで、今後ともよろしくお願いします"って挨拶に来てくれて。"景気いいですね!"って、感じ良く挨拶しときました(笑)。若いニイちゃんとネエちゃんがたくさんいるみたいなんですけど、使えそうなオッサンだと思われるよう、ちょっと感じ良くしておこうかなと思います」

■なんか、すみません…。暗い話しになっちゃいました。

「いや、全然暗くないですよ。暗い話だと思われると切ないので、(笑)マークはたくさん付けといて下さい(笑)。

でも、海外の根強いファンの存在は常に感じますし、今の日本でも景気の良いレコード屋さんがあると信じて、それを可能性として感じられれば、くたばるまでやるしかないです」

■分かりました。最後に今後の展望などありましたら。

「じゃあ気持ちは前向きにってことで、一生絶対使いたくないと思っていた(爆)で締めましょう(笑)」

TOKYO RECORD SHOP LONG INTERVIEWS【RECORD SHOP BASE】は P89 へと続きます



Detroit ††† Metal ††† Punk

SHITFUCKER

**色んなバンドにインタヴューさせてもらっていると、時に「このバンドは無理だろ…」と半分諦めつつ、インタヴューのオファーを出すことがあります。
デトロイトのメタル・パンク・バンドのSHITFUCKERに関しては、半分どころか「こんな人たちがインタヴューに答えるわけがない!」と確信しつつも、念のためメールしてみたら、大変丁寧で興味深いインタヴューをとることができました。何かの縁でうっかりSHITFUCKERとリアルに出会ってしまったら、僕は走って逃げますが実は良い人たちなのかもしれません。インディー・ロック・バンドを襲撃する人たちを良い人と言っていいのか分かりませんが、端から見ている分には最高に悪くて格好良いです。
名前にたがわず、shitとfuckの発言回数は本誌史上最多を記録しました。人道主義なんてクソ喰らえ!HAIL SHITFUCKER!Zyklon-T Shagrat(ZT)、Daemon Bitch(DB)、Styx Chizzler(SC)の3人が答えてくれました!**

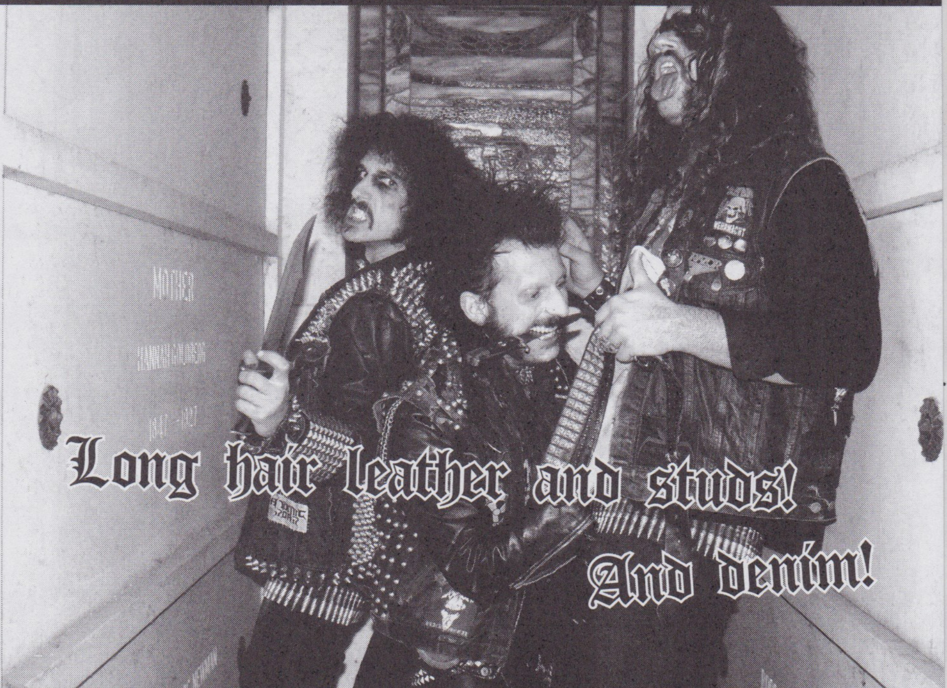
■ACID WITCHやREAPER、ex.FEAST OR FAMINEのメンバーもいますが、SHITFUCKERはどのようにして結成されたのでしょうか?

DB「SHITFUCKERは2005年くらいに俺・Daemon Bitchがベース・ヴォーカル、Tony Kaosがドラム、Bruce Butcher SSがギターでスタートを切った。DISCHARGEとDISCLOSEに影響されまくった、とにかくヒデー雑音をやろうと思って結成したんだ!楽器の演奏方法なんて何一つ分かっていなかったけどな。
デトロイトにある有名なパンクの溜まり場、Rat's Nestってところでショーをやるように

なった。そこはすぐにPumpkin Houseとかいう奇妙な場所に変わっちまったんだけど、Rat's Nestで俺たちはデトロイトの本物のメタル・パンクスと出会った。あいつらの方が全然年上で、俺らもまだ若かったんだけど、友達になって色々よくしてくれてよ。衝突したりウンザリすることもあったけどな。

それで間もなくZyklon-Tがセカンド・ギターとして加入した。『Human Disorder』デモを出した直後だったかな。だが、しばらくするとTony Kaosの頭がおかしくなっちまって、あいつはバンドを去っていった。それでBruceがドラムを叩くことになって、ここからだな、SHITFUCKERが一気に進化してよ、『I.N.R.I/F.O.A.D』EPのために作った俺たちの曲も、ダブル・ベースでもっとメタル寄りになって発展した。

んで、しばらく経ったら、今度はBruceが同じように頭がおかしくなってSHITFUCKERを辞めた。こうして、Styx Chizzlerというサイコーなやつが加わったんだ!過去のドラマーたちのように、こいつの気が狂っちまわないよう願ったさ!やつの加入により、長髪、革ジャン、口髭野郎の3人組という野蛮で汚ねぇ見た目のラインナップになった!俺たちの堕落は留まるところを知らず、生活はこの上なく危なっかしいものになったぜ!」



ZT「お前が挙げた3つのバンド全てをやっているのは俺さ。Styx Chizzlerと俺がREAPERをやってて、あとACID WITCHは滅多にライヴをやらないんだが、Styxはそのライヴ用のドラマーでもある。ACID WITCHはSHITFUCKERやREAPERとは全く異なるロクデナシで、そういう面でもよく知られているのかもしれねぇけどな…。

ACID WITCHは俺と"Slasher"Daveによる、1960年代から1980年代のホラー・ビデオへの狂気じみた渇望にインスパイアされた、アメリカのハロウィーンの休日みたいな喜劇的"スタジオ"プロジェクトだ。SHITFUCKERやREAPERには俺たちの生活、日々のウンザリする憂鬱な現実をブチのめし、それを処理するためのライヴ・バンドであるという重大な責務があるが、ACID WITCHはその全てがファンタジーに関係していて、ライヴ・バンドになろうなんて全く意図したことすらなかった。

REAPERに関係していることで言えば、SHITFUCKERが始まったばかりでオリジナルのメンバー構成だった2005年頃、ChizzlerとJack The Ripper(REAPERのギタリスト)はHELLSTALLIONっていう名前で曲を書き始めていた。やつらはショーのステージ上であがっちまっていた女ヴォーカルを追い出したから、俺がその女の代りにすぐ加入してバンド名をREAPERに変えたんだ。Paul Baloff(EXODUSのヴォーカル。2002年に脳卒中で死去)の魂を蘇らすべく、俺がヴォーカリストとして加入したことによって、より暴力的なバンドが誕生したってわけだ。

REAPERのライン・ナップは2006年からは一度も変わっていない。しかしこの2、3年ほど活動は中断していた。俺たちのハウスと練習場所が全焼して、おまけにメンバーの一人がまた実刑判決をくらっちまったからさ。しかしアメリカ人でFEAST OR FAMINEを覚えているやつは稀だな。どうも日本のやつらのほうがよく覚えているように思えるぜ。多分、DOLLマガジンでインタヴューしたから覚えているんじゃねぇか?

FEAST OR FAMINEにおいては、過去のメンバーたちの多くが悲劇的な結末を迎えている。シンガーだったJeff Nonsenseはナイフでストリートにいたやつを襲ったのち、精神病院に送られて無期限で収監されている。Angry Steve、ベース・プレイヤーの一人だったやつはスピードボートに乗っていたときに高速でドックに激突して首がぶった切れた。別のベース・プレイヤー(Angry Steveと交代したやつ)は約8年前に姿を消して二度と姿を見ることも声を聞くこともなかった。全くもって奇妙な話しだ。ドラマー

だったThe Pope Jean Paulは重度のヤク中でホームレスになっているぜ…。あいつを時々デトロイトのストリートで見かけるが、どん底の生活の中でゆっくりと死に向かっていっているように見える。どんな支援の申し出にも応じようとしねぇしな。
俺とオリジナルのベース・プレイヤー、それにZanne Rehashという結成時のメンバーはまだパンク・シーンにいる。彼女(Zanne Rehash)はUKのブリストルに引っ越してStaffと結婚したんだ。そう、最高のUKレーベル、Tardis Recordsのブレインであり伝説のブリティッシュ・パンク・ジン、DESTROYのStaffだ!彼女のメタル・パンク物語は真のハッピー・エンドを迎えるだろうぜ!FEAST OR FAMINEのメンバーでデトロイトの音楽シーンにいるのは俺だけだな。俺だけが、このデトロイトというこの世の終わりを迎えた廃墟みてぇな酷い環境を生き延びたってわけだ!この都市で生きていけるのは、とことん悪に染まった狂犬だけだからな…」

■SHITFUCKERという(狂った)名前にしたのは?誰がつけたのですか?

DB「俺がSHITFUCKERって名前を思いついたんじゃねぇかな。たしか2つの汚い言葉を組み合わせて一つの不快な名前にしたかったんだ…。大抵のやつらはカス野郎、みたいな意味でとるだろうよ。あるいはクソッタレとかな。けどな、SHITFUCKERと名付けたことによって俺たちはデトロイトで悪名高くなっちまった。
会場をブチ壊したり、あらゆる場所をゲロまみれにしたり、ムカつくやつらの頭にウンコをのせるだとか、インディー・ロックのゴミクソ野郎共の高価な機材をやつらに投げつけて破壊したりする物騒なパンク・ギャングだって評判を得ちまったんだ。おかげで地元だってのに多くの場所において、俺たちは歓迎されなくなっちまった!
本当のところ、何でSHITFUCKERなんて名前にしたのか分からねぇけど、俺たちは実際にSHITFUCKERになっちまったし、定着しているからな!俺たちは永遠に俺たちがしたいことをして、やりたいようにやるだけだ!」

ZT「俺はこの名前はSHITLICKERSからインスパイアされたもんだと常々思っていたんだが。命名するとき、よくSHITLICKERSとDISCHARGEを聴いていたしよ。SHIT



LICKERSみたいだがもっと下劣だろ、それに無礼だ!このバンドの初期の音はSHIT LICKERSに似ているしな」

■どんなバンドをこれまで聴いてきましたか?音楽遍歴を教えて下さい。

DB「若い頃はずっとロックが好きだった。母親はユダヤ人のヒッピーみてぇな人間だったし、親父はロッカーだったおかげで、俺はジミー・ヘンドリックスに夢中だったんだ!ターニング・ポイントは13歳のときにパンクを知ったから。RAMONESにMISFITS、STOOGESとかに夢中になって、それから年を重ねてDISCHARGEやEXPLOITED、DISORDER、CHAOS UKといった、UK82の存在を知った。
そしてPumpkin Houseでたむろっていると、今度はメタルっていう道を知るようになった!RUNNING WILDにMANOWAR、JUDAS PRIEST。俺はゆっくりとヘヴィな音楽に取り憑かれていった。そしてあっという間により速い、よりダークな音楽にのめり込んでいったんだ!今、俺はKISSにはまっている!」

ZT「10コ年上の兄がいてさ、幼い俺…10歳未満の俺にメタルやパンクを聴かせやがった。兄貴はMETALLICA、MEGADETH、SLAYER、AC/DC、BLACK FLAG、FEARにTHE MISFITSを当時聴いていたな。当然のように俺も夢中になっていった。METALLICAの『...And Justice For All』を8歳のときに買ったのを覚えている!
NIRVANAが一気にビッグになった1991年、俺は11歳でそのときに俺が知っていたメタル・バンドはどれもかなりつまらなく感じるようになっていた。それでLED ZEPPELINやNIRVANA、THE MELVINSをもっぱら聴くようになった。これらのバンドは当時の俺にとって、得体の知れないエクストリームなものだったんだ。
皮肉にも、NIRVANAへ向けられていた俺の興味は、SS DECONTROLやTHE GERMS、CELTIC FROSTへと向けられていった。多分、13歳かそこらだったが、レコード屋に集まってはCDを買ったりトレードしたりして、新しい音楽に対してすげぇ飢えていたんだ。
ニューヨークへ学校の旅行で行ったとき、15歳かな、レコード屋に行ったらその店員が、Clay Recordsから出ているDISCHARGEのシングル・コレクションを買うようアドバイスしてきたから、買ってみたんだ。こんなもん俺は聴いたことがなかったし、俺の人生を見事に変えちまった。それからの俺は、ヘヴィでサイコーの音楽を常に求め、聴く、ダイハード・メタル・パンク・ロッカーになったんだ」

■メタルとパンクという音楽についてはどう捉えていますか?

SC「メタルとパンクはサウンドとイデオロギーの面において、必ずしも同列とは限らない。しかしながら、それらは同じアグレッシヴな精神をもたらしてくれる。真のメタルヘッズはパンクが好きだし、真のパンクスはメタルが好きだ」

ZT「メタルのやつらの何人かは、俺たちがパンクすぎると言うし、パンクスの何人かはメタルすぎると言う。どいつもこいつもくたばっちまえ。あいつらの意見なんて重要じゃない。そういうやつらは、音楽について何もわかっちゃいねぇのさ。俺は下劣で汚ねぇキチガイの音楽に魅了されているんだぜ。俺の大好きなパンク・バンド、DISCHARGEに

ENGLISH DOGS、SACRILEGE、CRUCIFIX、AMEBIX、ANTISECT(Out From The Void!)はときにメタリックだし、俺の大好きなメタル・バンド、HELLHAMMER、VENOM、PLASMATICS、WARFARE、CARNIVORE、BLITZKRIEGは薄汚れたパンクから影響を受けている部分がある。
バンドってもんは、あまりにも清潔じゃ駄目なんだよ。フツーの人間みたいな格好して、綺麗にカットされた短髪頭のバンドが大嫌いだ。"モダン"なパンク/メタル・バンドになんか全然興味がねぇんだよ。長くて汚ねぇ脂ぎった髪か石鹸まみれのスパイキー・ヘアじゃないと駄目だ。それと俺はパンクやメタルの政治性だとか、どう関わっているかなんてこれっぽっちも興味がねぇ。何を信じて、何に忠実であるか。それが重要だ」

DB「メタルとパンクは俺にとって常に一緒だ。俺が初めてパンクのショーに行ったとき、そこにはSAURONのメンバーみたいなメタルヘッズがいたからな!ここでパンクのショーがあるとメタル・バンドも出るし、メタルのショーにはパンク・バンドが出る。デトロイトのパンク・バンドの多くが今やメタルからの影響を受けてプレイしているからな!
パンクを長いことプレイしていると、そのうちに楽器の演奏そのものについて学習するようになり、そしてメタルへと転換していくように思う。
時々一緒にプレイするパンクっぽいキッズは俺たちに近づいてこないんだよ。まぁ、俺たちがあいつらを脅すからなんだろうけどよ!政治はメタルともパンクとも違うもんだ…」

■歌詞についてですが、誰がどのように書いていますか?

DB「俺がほとんどの歌詞を書いているぜ…。個人的な、生活していく上での経験だな。
大部分がおもしれぇこと。セックスとか、酒を呑んだりドラッグをやったり、マリファナを吸ったりアシッドをキメたりとかだな、ロックンロールで頭がおかしくなったりとかよ!
あとは長髪に革ジャンに鋲!そしてデニム!"Acid Bath"って曲は、アメリカの人食い殺人鬼、Jeffrey Dahmerについてだ…。暴力や人殺し、サタニックなことについてもたくさん。それがSHITFUCKERのやり方だ。
やりたいように生きろ、アホなやつはブチのめせ、敵はぶっ殺せ、隣人を呪え!酒を呑

め、ファックしろ、クソッタレ、これがShit SSにとってのサタンからの命令だ!しかしだな、デトロイトは生活するには絶望的な場所だから、歌詞もかなりダークになっちまう。そしてときに暗黒が心に入り込み、魂を奪っちまうのさ!」

ZT「時折、俺が作った曲に関しては歌詞がどうあるべきかトピックを提案することはある。Daemon Bitchにトピックを伝え、歌詞を書かせる。俺が書くのとは全く異なる手順であいつは書くから好きなんだよ。発言、歌詞においてあいつは確実に自分を持っている。しかし、歌詞にとって最も重要なことは、俺たちの腐った生活を取り囲む暗黒に対して真実であることだ」

■『FOAD』4 WAYスプリットLPは面白い作品でしたが、誰がこのLPを企画したんですか?

ZT「何年もかけて、全バンドでこのコンピのアイデアについて話していた。俺たちの性奴隷の一人であるAlejandra Bitch Witchが、女王様プレーをして稼いだ結構な額の金で、レコーディング代金とレコードのリリース費用を支払ったんだ。全てのアートワークとレイアウトは参加したバンドが自分たちでやったんだぜ」

■デトロイトではどんなバンドと対バンしていますか?オススメのバンドは?最近のデトロイトのメタル・パンク・シーンについても聞かせて下さい。

DB「普段のショーはPERVERSION、SAURON、REAPER、BORROWED TIME、ANGUISHなんかとやっている。パンク・バンドだとSTATE、FINAL ASSAULTにSCUMとかだな…。最近はダラダラしてて、そんなにショーも多くはない。ツアー中のバンドも大してここには来ねぇし、SHITFUCKERはジャムったり新曲を作ってばっかだな。大概の俺たちがツルんでいるやつらは、ドラッグか酒で頭がおかしくなって、疎遠になっちまうか、自分のことに没頭している。俺たちの小さなシーンは低迷期ではあるが、それでもまだまだブルータルだぜ!」

ZT「前述しているように、他のデトロイトのバンドとは滅多にやらねぇな。WASTELANDERとはよくやったもんだが、あいつらももう全然活動していない。時々BATTLE SLAUGHTERとはやるか。言及したバンド以外、ここのほとんどのバンドはゴミクズばっかだ!BLACK DAHLIA MURDER(デトロイトのメジャーなメロディック・デス・メタル・バンド)みたいなクソもいやがるしよ。もうここに薦められるバンドなんていねぇよ。だから世界が認識すべき、今や忘れ去られている昔のデトロイトのメタルとパンク・バンドの名前を挙げておく…。HERESY、GORE、COVEN(aka COVEN 13)、HALLOWEEN、FATAL、INFECT、WHITE ASH、DEATHCORP、LETHAL MILITIA、CEMETERY、ANGHELL、PUTRID RESURRECTION、そしてVAMPRIELLA」

■デトロイトの普段の生活ってどんなものですか?皆さん、働いてます?

SC「退屈な日常…。起きる、コーヒーを飲む、音楽を聴く、酔っぱらう、寝る!あとは時々モノを喰う!仕事なんかデトロイトにはねぇよ。無職=金欠だ」

DB「日々、クソ退屈な毎日だ…。今、俺はムカつく食料雑貨屋で働いているぜ。胸糞悪いからオナニーしまくっている!大抵はSHITFUCKERとつるんで、できる限りジャムっている。あとはビール呑んだりハッパ吸ったりヘヴィな音楽を楽しんでいるな。それと車を運転して飛ばすくらいか!オカルトと黒魔術の本も読んでるな…。あぁ、共同墓地でたむろっていたりもする。この街は貧乏だし終わってるから他にすることなんかねぇんだよ!」

ZT「毎日つまんねぇ。日常なんてゴミだ…。いっつもムカついているぜ…、日常ってやつによ…。俺はアーティストでミュージシャンで、生活に困窮している。"ちゃんとした"仕事ってのにはついてないな。絵を描いたり、音楽を演奏したり、地元の繁華街を4人が一組になって襲撃者たちから自衛するため見回っている。俺たちが住んでいるのは荒れ地だ…。見つけたくても仕事なんかありゃしねぇ。ここでは自分の生活は自分で守らなくちゃならない。ヤルかヤラれるかだ!」

■ところで、DISCHARGEの作品だと、どれが一番好きですか?"Nuclear Frost"という曲は、"The more I see"へのオマージュでしょうか?

DB「"Price Of Silence/Born To Die In The Gutter"時代のDISCHARGEが一番好きだな。Calのヴォーカルが大好きなんだよ。初期のDISCHARGEは暴力的でラウドだからたまらねぇんだ!あぁ、"Nuclear Frost"は"The more I see"みたいなのをやろうとした…」

ZT「"Nuclear Frost"は、"The more I see"を彷彿とさせるよな。あれは中期のDISCHARGEに影響されている。実際、古いSHITFUCKERの曲、何年も前に作られた曲はもっとDISCHARGEスタイルだ。
この時代(のDISCHARGE)に影響を受けているバンドはそんなに多くはないよな。もちろんFINAL BOMBSを除いての話しだ。もっと後期のDISCHARGEからの影響を出したかったところはある。DISCHARGEは常に大好きなバンドだし、全ての音源を楽



しんでいる。アルバム『Massacre Divine』も『Shootin' Up The World』も好きだ。THE VARUKERSのRatがヴォーカルをやっている新しい音源すらも結構気に入っている。
「Realities of War」のラインナップで2002年に復活したDISCHARGEと「Ignorance」EPの頃とじゃ、全く違うバンドだろ。NWOBHMバンド、DEMONのLes Huntが『Grave New World』と「Ignorance」でギターを弾いていた。"The Mole"という変名でな。多分、あいつがメタル・バンドをやっているヒゲモジャのデブだったから、クレジットにも明記されなかったんだろうよ。ルックスが合わなかったってこと。みんながこのことを知っているかどうか分からねぇけどな。バンドのサウンドが変わっただけではなく、あいつによって全く新しいユニークなサウンドが創造されたと思っている。まぁ、この頃のDISCHARGEは好まれてはいないんだろう。誰かがBonesの抜けたDISCHARGEはクソだって言っていやがったな。クソが、BROKEN BONES聴けよ!」

■あなたにとっての究極のレコードを5枚挙げて下さい。

DB「そいつは難しいな。ここに、俺にとって特別な5枚のレコードを挙げておく…。
G.I.S.M.『Detestation』LP / ALICE COOPER『Love it to Death』LP / JUDAS PRIEST『Painkiller』LP / BATHORYは1st LP、『The Return…』、『Under the Sign of the Black Mark』、『Blood Fire Death』と全て最高だ! / COVEN『Witchcraft:destroys minds and reaps souls』LP」

SC「1.UNSEEN TERROR『Human Error』LP / 2.BLITZ『All Out Attack』EP / 3.REPULSION『Horrified』LP / 4.NME『Unholy Death』LP / 5.CHAOS U.K.『Short Sharp Shock』LP」

ZT「難しい質問だ。2つに分けるぜ…パンク・リストとメタル・リストにな…。これら10枚のレコードは俺の人生にとって決定的なものだ。
メタル・リスト　1.VENOM『Welcome To Hell』LP / 2.DESTRUCTION『Sente

nce Of Death』MLP / 3.HELLHAMMER『Satanic Rites』デモ / 4.MAYHEM『Deathcrush』MLP / 5.SABBAT『Envenom』LP
パンク・リスト　1.DISCHARGE『Hear Nothing, See Nothing, Say Nothing』LP / 2.CHARGED G.B.H『City Baby Attacked By Rats』LP / 3.BROKEN BONES『Bone crusher』LP / 4.BLACK UNIFORMS『Faces Of Death』LP / 5.ONSLAUGHT『Power From Hell』LP(そう、これはパンクだ!)」

■将来計画していることは何でしょうか?

DB「ちょうど今は、SHITFUCKERにとって重大な時期なんだ。1stフル・アルバムに取り掛かっているところだからな!あとは2枚のEPを、マレーシアのBlack　Konflikからテープでリリースする予定だ。ツアーしてギグをやって、日本でもプレイしてみたいもんだぜ。俺たちのファンが一番いるところだからな!!!Hail Japanese Shit Soldiers!!!」

ZT「未来なんて氷河期が待ち受けているだけ…。未来なんざねぇよ。今があるだけだ」

■インタヴューさせてくれてありがとうございます。最後にメッセージを。

ZT「"Without leather you may die, without switchblade you may die" LOUDNESS」

DB「Kenji、SHITFUCKERに興味を持ってくれて感謝するぜ。そして全ての日本のファンにも感謝を伝えたい!ハードコアなSHITFUCKERのファンで、Shit SS(SHITFUCKERアーミー/ファン・クラブ)に参加したいやつがいたら、ここまで連絡をくれよ。

Dik Beat　3952 Commor.　Hamtramck, MI.　48212　USA

…HAIL SHITFUCKER!」



CROSTA

スペインはバルセロナのスリー・ピース・アナーコ・パンク・バンドのCROSTAが、自主で1st LP『Nus a la gola』をリリースしています。
カタルーニャ語という、フランコ独裁政権時代には使用を禁止されていた言語を使っているのも興味深いポイントですが(LPの歌詞カードにはカタルーニャ語の他にスペイン語・英語訳も併記)、肝心のサウンドも湿り気を帯びた全編ミドル・テンポの燻し銀サウンドで実に渋カッコイイのです。
特にB面を丸ごと使った10分に渡る長尺ナンバー"incomunicació"は最高にスリリングで目(耳)を見張るものがありました。
インタヴューの回答もそのサウンドを彷彿とさせる実に真摯な内容で、バンドを代表してXaviがキチンと応じてくれた次第です。 PHOTO:Mattin

■それぞれのバンド遍歴を教えてもらえますか?CROSTAの前にはどんなバンドをやっていました?

「メンバーはMar(Ba)、Xavi(Dr)、Ian(Gr)。3人ともCROSTA以前にもバンド経験はあって、HIPOKONDRIA、DÖD HUMAN、それにいくつかソロ・プロジェクトもやっていたよ。

2006年にCROSTAを始めた後も、ABSURDOやLAS OTRAS、DESTRAL、THE CROWD、CHIP SUBCUTÁNEOといったバンドでも活動している。CROSTAがメンバーの唯一のプロジェクトってわけじゃないんだよ」

■CROSTA結成のいきさつは?

「Marと俺はアナーキスト・パンク・バンドをやりたいと思っていたんだ。その当時はまだ2人ともバルセロナに住んではいなかったけど、Ianと出会い、意気投合してね。俺たちは初期UKアナーコ・パンクのメッセージと活動のやり方に心酔していた。でも音楽的にはD-Beatのドラミングとシンプルなギター・リフでできているハードコア・パンク・バンドをやりたかったんだ。

あとはメンバー全員が歌い、詞を書き、曲を作る(これは俺たちにとってはかなり重要なことだぜ)。翌年、自主でCD-Rを出し、数ヶ月後にはIanとMarが担当楽器をチェンジしたよ」

■"CROSTA"は英語だと"CRUST"という意味になりますか?この名前をつけた理由は?

「自分たちでもミョウな名前だと思うよ(笑)。音楽スタイルでつけたんじゃなく、単語そのまんまの意味でこの名前にしたんだ。困惑してる?

えーと…Crostaはカタルーニャ語なんだけど、スペイン語だとCostra(かさぶた)と訳される。Crostaはここでは広く使われている言葉なんだ。ベネフィット・コンサートでさえ金を払わず、こっそり会場にもぐり込もうとしたり、ライヴでドラッグをキメたり売ったり、喧嘩をおっぱじめちまうような、シーンをダメにする破滅的なパンクスを指すようなときにね。数年前の俺たちは、不快であいまいな名前が好きだった」

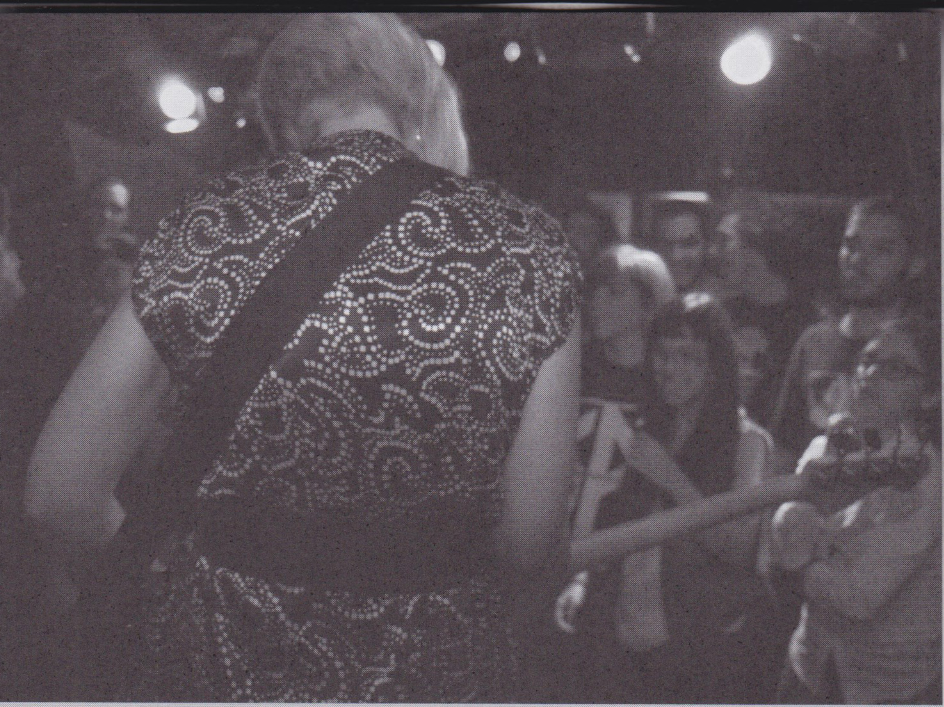
■LPのタイトルを"nus a la gola"にしたのは?「morir de fastic」という曲の歌詞に"Embut a la boca i un nus a la gola"とありますが。

「現在のところ、どの作品のタイトルも曲名からではなくて、歌詞からとってつけているんだ。このタイトルは曲に含んでいるいくつかのことを映し出しているから気に入っているよ。アルバムのタイトルはLP『Nus a la gola』の1曲目からとっている。読んで字の如く、"喉のしこり"って意味だよ。
ネガティヴなやり方で感情を揺さぶってショックを与えるようなものを表現したかった。歌詞のいくつかのパートはかなり良い具合にハマッているんじゃないかな。このLPの前に作った作品はもっと個人的なものだったよ」

■僕はカタルーニャ語ってものを知らなかったので、スペイン語で歌っているものだと最初は思っていました。カタルーニャ語の歴史を少し調べてみたら興味深かったのですが、あなたたちにとってカタルーニャ語で歌うことはやはり重要ですか？

「2006年に最初の曲を作ったときから、基本的にはカタルーニャ語で曲を作っていこうと決めてたよ。なんたって母国語だからね。考えたり感じたりする言語がカタルーニャ語なんだ。





俺たちも学校や街やテレビでスペイン語は学んでいる。スペイン語で歌うのだって問題はない(実際に俺たちが別でやっているバンドでは、主にスペイン語で歌っているんだ)。でもメンバーの中には、ポリティカルな選択からカタルーニャ語にこだわっている者もいる。俺たちの祖父母は独裁者フランシス・フランコの時代に、カタルーニャ語を使うことを禁じられていたんだ。
実際、80年代の特別なケースや最近のいくつかのバンドを除いては、カタルーニャ語で歌うというのは、パンクスの伝統からはかけ離れている。カタルーニャ語は音楽に合わないから使わないと考える人もいるようだよ。カタルーニャ語で歌っていながらも、俺たちは"世界に対してオープン"であるべきだし、もっとたくさんの人たちに届くようにスペイン語で歌う必要があるとも考えている。でもこのロジックに従うと、行き着くところ、誰もが英語で歌うってことになるだろうし、それぞれが持つ多様性や様々な文化に根ざしたアイデンティティを失うことになってしまうってことだろう」
■レコード店のレヴューを見ると、あなたたちのLPを紹介する際にTHE MOBやCR



ISISの名前があがっていますが、実際に好きですか？影響を受けたバンドは何になりますか？

「どちらも好きだけど、較べたことはないよ。練習場所で新曲を作るとき、特定のバンドに似たサウンドにしようとしたことなんてない。もちろん影響を受けたバンドはいるよ、CROSTAは特にアナーコ・パンクにね。ポスト・パンクにアプローチすることも念頭に置きつつ、アナーキストに影響を受けた歌詞を持つミッド・テンポの曲を作ろうとしているんだ。

実際のところ、名前のあがったバンドに似せようとはしていないけれど、引き合いに出すバンドが必要なら、俺たちのやっていることはそういうバンドとかけ離れてはいないと思うよ。俺たちが聴いたことのないバンドの名前をあげて、CROSTAのスタイルを述べようとする人もたまにいるぜ。とにかく、自分の言葉と感覚でサウンドを表現しようとするレヴューが好きだな」

■曲を作るときに最も大事にしていることは？「incomunicació」は特に素晴らしい

曲ですね。こういう長い曲はどうやって作るのでしょうか？

「2009年の秋、俺たちはバンドにくたびれてしまって、やめることを考えるようになっていたんだ。以前のサウンドはもっとハードコアに影響を受けていて、メッセージのみを重要視していた。

その時点から、ゼロからのスタートを決意し、同じ音楽のパターンでいくのをやめて、自分たちの本当に好きな歌詞やサウンドを生み出すようになっていったんだよ。俺たちのことを、昔の名前を再利用して新しいバンドを始めたと言うやつもいるね。だけど俺たちにとっては同じバンドだから、練習もやめなかったしライヴでもプレイし続けたよ。その瞬間、それまでの古い曲は全て捨てて、「incomunicació」を作ったんだ。

今じゃ10分以下の長さで録音しLPの片面に収録しているけど、2009年－2010年の頃はライヴで15分以上も演奏したことがあるんだよ。「incomunicació」では少しだけ実験も試みてて、長いイントロと異なったパート、それに俺たちの昔の曲を連想させるハードコアのパートも含んでいる。



あの当時、曲の骨組みは完全に出来上がっていなかったから、即興でやった部分もあるよ。そういうのは、新曲を作ったりバンドを続けていくために、俺たちを突き進ませる解放的な要素でもあったんだ。

「incomunicació」は人の内にある誤解や、人間関係、俺たちを取り囲む人たちと深く心を開いてコミュニケーションを取り合うために壁を壊す、ってことについて書いているんだ」

■では、読者に歌詞を紹介してください。誰がどんなふうに書いていますか？

「全員が書いているんだけど、ここのところ歌詞の比重はMarが大きくなっているな。いずれにしろ、誰かにアイデアが浮かんだり、誰かが曲用の歌詞を仕上げたら、全員で中身を話し合って、少し手を加えながらまとめていくんだ。

今はさらに個人的な歌詞を書くようになっているな。アナーキストの視点を反映していると思う。このやり方は気に入っている。LPに収録した曲のテーマをいくつかあげてみるね。家族と自分たちの関係。実行できる以上に多くのプロジェクトを自分たちが抱え





ている際の時間の悩み。退屈な平穏が燃え上がるのを見てみたいって衝動に駆られる局面で、自分をコントロールできなくなる恐怖」

■最近のバルセロナのハードコア/パンク・シーンの印象を教えてください。お勧めのバンドは？バルセロナにはパンクスにとって素晴らしいスクワットはありますか？

「今のバルセロナには良いバンドがたくさんいるよ。いいなと思うバンドは例えば、SECT、ESKROTO DE RATA、ATENTADO、BELGRADO、DESTINO FINAL、COL・LAPSE、GLAM。それから、作品は何も残さずに消える、真に素晴らしい短命のプロジェクトも常に存在する。それとは別に、グレートなパンク・ジンとラジオ番組もあるよ。プレイする場所を探すのは、この頃は難しくなっているな。スクワットで演奏したり企画を立てたりするのは好きだな。Blokes Fantasmaは気に入っている会場の一つだよ」

■今、ツアーの真っ最中だと思いますが、ツアーはうまくいっていますか？ツアーで強烈に心に残った思い出は？

「この2012年7月に、6日間、ヨーロッパをツアーしたんだ。リヨン（フランス）、マンハイ

ム(ドイツ)、アムステルダム(オランダ)、パリ(フランス)、ボルドー(フランス)、サラウツ(スペイン/バスク自治州)を訪れたよ。スペインの国境を越えてツアーしたのは2回目なんだ。他のシーンを知るのも、他の街の人たちと出会い、その土地の現状について話をするのも、毎回素晴らしいことだよね。去年の夏はABSURDOと一緒にUKとフランスをツアーしたんだけど、あれも驚くほど良かったよ」

■スペインの金融危機は日本でも大きなニュースになりました。自国の経済や政治に関して、どんな考えを持っていますか?EUについては?

「一方じゃ、危機は資本主義体制の産物であり、論理にかなった結果だな。直接関係があるのは政治家や銀行家であって、一般の人たちじゃない。自分たちの生活とは遠く離れたものだと感じているよ。

でもその一方じゃ、俺たちの周りでは多くのことが起きていて、それが"危機"と呼ばれている。政府は長期間に渡って、あらゆる基本的なサービスを削減しているんだ。特に医療や教育に関してさ。これはレイオフ(企業の業績悪化などを理由とする不安定な一時的な解雇)を減らそうとする労働改革に対しても同じで、労働者の状況はさらに不安定になっているんだ。その金融危機の余波は毎日の生活にも影響を与えている。

例をあげると、友だちのほとんどが失業しているか、仕事をしていてもめちゃくちゃ低賃金だし、一時的な職業仲介業を通して働いている。家賃や住宅ローンを支払えず、家を失っている人たちも増加しているんだ。若者は真剣に移民になる可能性を考えている。ここに未来はないから。

幸いなことに、今は多くの人たちがこういう状況に対して、別の道を作り上げていこうと自ら進んで闘い行動しているよ。15M(キンセ・デ・エメ。スペイン全土に広がった経済的不公平を政府に抗議する"怒れる者たち"の抗議行動。この街頭占拠運動の出発点が2011年5月15日、スペインの首都マドリッドのプエルタ・デル・ソル広場だった)のムーヴメントは変化したし、いろいろと批評をすることもできると思う。

でもあれは、連帯とサポートの新しいネットワークを作り出すためにとても重要だった。地方の人たちをつなぎ、議論を活発にし、直接行動の実践を増加させていったんだよ。暴動への弾圧は厳しくなっていったが、人々は政府や権力者に対しての反乱を恐れなくなっている。

例えば、2012年3月29日のスペイン全土でのゼネスト、それからアストゥリアス(スペインを構成する自治州の一つ)やレオン(スペイン北西部)の鉱山労働者による最近行われたストライキにつながってる」

■ところでフットボールは好きですか?ニュースで"EURO 2012"を見ましたが、スペインは強いですね。

「ハハ、俺たちはプロのフットボールは嫌いでさ。特にああいう国際試合は人々の愛国心を助長するからね。それにスペイン政府は国民の目を欺くために、できるだけ多くの政治ニュースを陰に隠そうとしてこの試合を利用したんだ。

一つ例をあげると、フットボールの大会の時期に合わせて、教育費や医療費の削減を最悪なかたちで決定した。あの時期、本当に大事な問題について意見を言う人は誰もいなかった。愚かな試合の馬鹿げた勝利をあらゆる新聞が大きく取り上げていたよ。これはもちろん、政府が国民の基本的な権利を奪い去ったってことだ」

■これからどんなプランを考えていますか?

「この先の具体的な計画はないんだよ。新しい曲はいくつかあるから、もっと曲を作って新作を出したいな。そんなとこかな。来月にはマドリッドとサラゴサ、バルセロナでショーをする予定だよ」

■インタヴューに答えてくれて感謝してます。日本でこれを読んでいる人たちにメッセージをお願いします。

「インタヴューをありがとう、Kenji。質問に答えるのはとても面白かったよ。ジンは健在だ!!数週間のうちに自主リリースしたLP『Nus a la gola』を再プレスするよ。欲しくても見つけられないようだったら、俺たちのウェブサイトで無料でダウンロードできるようになってるよ」

http://crosta.interrupciones.net

破綻国家に生きるパンクス
—2012 年夏　ギリシャ記—

文・写真：鈴木智士(ex 無我、ex Technocracy)

昨今のギリシャの経済危機と、それに伴うファシスト政党「黄金の夜明け」の勃興の中で、パンクスはいかに生きているのかということが気になり、この6月にギリシャを訪れることにした。ギリシャと言えば、個人的にはギリシャ人映画監督であるテオ・アンゲロプロスの映画が好きだったということもどこかで作用したのかもしれない。大変残念なことにアンゲロプロスは今年の1月に新作『The Other Sea』を撮影中に交通事故でこの世を去った。アンゲロプロスの描くギリシャというのはまるでそこに色が存在しないかのような鈍色がスクリーンを占めており、実際に訪れる現在のギリシャというのはどのような「色」なのだろうかとこの目で確かめたい気持ちもあった。
さて、幸運なことに以前レコード等のトレードをした友人がヴォロスというギリシャ中央に位置する人口10万人程度の町におり、その友人の紹介で、Matsaggou Squat（以下マツァゴウ）というスクワットに滞在することができた。その後はアテネ〜テッサロニキと大きな都市にも足を運び、現地のスクワットや地元のパンクス、アナキストたちと時間を過ごした。ここではそのマツァゴウを中心に、ギリシャ・パンクス/アナキストたちの現状や自分が感じたことを記す。

　ギリシャと同様に多額の財政赤字を抱える日本の行く末を見るかのように、日本国内のメディアでも珍しく取り上げられていたここ数ヶ月のギリシャの政治情勢だが、財政危機に対する緊縮策の是非を巡って2012年5月に行われたギリシャ総選挙では左派・急進左派連合(SYRIZA)の躍進で連立政権が出来ず、翌6月に再選挙となった。結果は元々の政権と変わらぬ新民主主義党(ND)と全ギリシャ社会主義運動(PASOK)ともう1党による連立政権が成立し、ユーロ、IMF等からの緊縮策を受け入

れていくことになった。一般的には、ギリシャはユーロからの離脱を免れて首の皮一枚で繋がった、と見られている。

今回2週間ほど滞在したマツァゴウだが、元々は古いタバコ工場のビルだったらしく、3階建ての巨大なビルをスクワットしている。スクワット内にはまずミーティングやその他催し物を行う大きなフリースペースがあり、キッチンがあり、ここに住む人たちの部屋があり、奥に行けばライヴを行うスペースもある。2階にはもう1つライヴを行うスペースがあり、こちらは「Riot Squat」という名前が付いている。その他昔劇団が使っていた部屋や、住み着いている猫がニャンニャンと鳴いているだけの部屋、ただグラフィティだけが雑然と描かれた部屋など、まったく手付かずで放置してある部屋もある。

そもそもスクワットという概念が日本人にはあまり馴染みのあるものではないが、要は空いた建物や空き地に住み着いて自分たちの住居にしてしまおうという考え方、行動である。そんなものは不法侵入で逮捕じゃないかと思うかもしれないが、多くのヨー



マツァゴウ・スクワット外観

ロッパの法律では即座に違法となるわけでなく、一定の期間住んでしまえばその建物に居住する権利を得ることすらできる。ギリシャでは主に政府や市町村所有の、現在は使われていない建物をスクワットし、政府や役所がその対策に手を拱いている内にスクワットが正当化されていくらしい。このあたりはギリシャ政府や役所の対応の遅さも手伝っていると言う。

ではスクワッター（スクワットしている人）は普段何をしているのだろうか。マツァゴウに住んでいたのは数人だが、彼らは学生であったり無職であったりたまに仕事をしたりと様々である。一番ヒマそうにしていたミツォスという、スキニーでボロボロなブラックデニムに着古したTシャツという80年代風パンクス風貌のナイスガイとよく一緒にいたが、彼は仕事（この場合賃労働）をしているわけでもなく、スクワットで開かれる様々な催しやスクワット維持のために、日々細々とした「仕事」をこなしていた。例えばマツァゴウでは毎週月、水、木曜にランチを提供している。特に値段が決まっているわけでもなく、食べに来た人は料理の横に置いてある箱に自主的に寄付をする仕組みである。ミツォスはその料理を作っていた。もちろん例の如くベジタリアン料理だが、そもそもギリシャ人は一般的に食に対して妥協しないためなのか知らないが、レンズ豆と野菜が軽く煮込んである、ちゃんと味付けのしてあるベジタリアン料理だった。



ミツォス

またある日は、週末にアンチ・ファシストの公演会を主催するためにその告知ポスターを町中に貼り出す作業をしたり(ギリシャはそこら中ポスターとグラフィティだらけである)、また別の日はスクワットの改修で古くなって使わなくなったエアコンのダクトを皆で取り外したりしていた。その鉄屑は業者が

有償で引き取ってくれるらしく、そうやってスクワット維持のための資金を得たりもしているらしい。「無職」ではあるが、やることはある。

またスクワットは反ファシズム運動の中心となっており、先日の選挙、再選挙で共に7%の得票を得た、移民排斥を訴えるネオナチ・ファシスト政党「黄金の夜明け」に抗すべく、様々な活動をしている。主にいかにしてファシストに対抗していくかというミーティングや、それを町の人々に知らせる活動が中心らしいが、ある夜このような出来事があった。

選挙投票日6月17日の2日前の夜だったが、反ファシズムのポスターを町中に貼りに出かけた仲間からスクワットの仲間に電話があり、ファシストがポスターを貼っているのを目撃したらしい。正直ポスターくらいで…と思ってしまったが、彼らは次々と仲間に電話をかけ、瞬く間にスクワットに数十人が集まった。車3台、バイク10数台に別れ、ヘルメットと角材を車に積み込んで目撃情報があった場所へ信号を無視し車を追い越し猛スピードで向かう。到着したが既にそこにはファシストの姿はなかったので、市内をパトロールのようにグルグル回り、「黄金の夜明け」党のポスターを見つけたら即座に引き剥がす。その夜はファシストとの接触はなかったが、ある若者に聞けば時々遭遇して暴力沙汰になることもあるそうだ。ファシストはナイフやナックル、警棒で武装し、ある者は銃すら携帯しているという。

ギリシャは第二次世界大戦中、枢軸国－ドイツ、イタリア、ブルガリア－によって分割・占領され、共産党を中心にそれに反対する抵抗運動が起こり、その中で右翼、王党派の反共思想とも諍いが起き、1944年10月のナチス・ドイツ撤退後も文字通り兄弟で殺しあう内戦が1949年まで続いた歴史がある。この一連の反ファシズムの出来事は最早現代の内戦なのではないかと思わせる緊迫感とリアリティがあった。聞けばこのヴォロスという町はギリシャの中でも左派寄りの町のために、ファシストはなかなか勢力を伸ばせないでいるらしいが、首都アテネでは選挙後も毎日のように移民を襲撃する事件が起きているらしい。問題は移民襲撃が起きても周りの人々は助けることもなく、ただ傍観し逃げるだけであり、警察すら対処に動かないことらしい。警察とファシストの癒着は昔から起きていたことで、更に再び政権を執ることになった緊縮派のNDや

PASOKもかつては「黄金の夜明け」党のメンバーをボディーガードとして雇っていたりと、政府とファシスト政党の繋がりは相当に根深い様子だった。

ちなみに冒頭に書いた映画監督アンゲロプロスの死だが、こちらの人に聞くとアンゲロプロスを轢いたのが仕事帰りの警官らしく、もしや暗殺されたのではないか、という噂もあったらしい。撮影中の新作はこの恐慌がテーマだったそうで、それをアンゲロプロスに撮られては困るという政府の陰謀なのだろうか。恐らく単なる噂なのだろうが。

ただやはりこの国の経済状況は国民生活を逼迫している。ハードコア・パンク・シーンの人たちに幾つか聞いてみたが、簡単に説明すると、月収は900ユーロ(約90,000円)あればいい方で、以前は700ユーロくらいだったのが、ここ数年給与カットが続き、今は480ユーロ(約48,000円)に減った友人もいた。それ以前に、仕事があればいい方で、職を探して早1年以上経ったがまだ見つからないと嘆く人もいたし、数ヶ月待ったあげくようやく見つかったが、スーパーマーケットでの仕事で週3日労働、月給300ユーロの内100ユーロはスーパーでの物品の購入を強制的にさせられると言っていた女性もいた。この国は別に物価が特段安いわけでもなく、ガソリンはレギュラーで1リットル1.70ユーロ(約170円)していたのを見かけたし、町のどこにでもあるキオスクでペットボトルの500mlコーラを買えば1.30ユーロする。

アテネ滞在時、エクサヒアという、アテネのアナキストのホームタウンに幾つかあるレコード屋に行ったが、ハードコアやストーナー、ドゥームのレコードがどれも25ユーロ(約2,500円)ほどしていた。この値段なら日本で買うより高いものもある。先述の収入と比較したら、とても毎月コンスタントに買えるものではないのは明らかだ。CDも10ユーロ〜12ユーロと、特段安いわけではない。これはこのあたりの地域の家賃高騰によるものらしいが、金はないのに物価は上がるというまったくのインフレ悪循環でますます経営は悪くなりそうな気もする。

ギリシャのハードコア・パンクのライヴは基本的にスクワットや公園、大学の広場などで行われる。これは強力なDIY(Do It Yourself)の精神に基づき、資本主義の手にかかったクラブやライヴ・ハウスではなく、自分たちでライヴを創り上げようという考えか

ら来ている。ギリシャ滞在中に3つのライヴに行ったが、どれも広場、公園での野外ライヴであり、入場料は無料、PAシステムを設置し、主催者がビールを売ってその少しの上がりをPA代やバンドの交通費に充てるといった仕組みである。どのライヴも始まるのが深夜0時過ぎだったが、こちらのパンクスは、否、パンクスだけに限った話ではなく、ごく一般的な様子だったが、平日も朝4時、5時まで公園だったり道端でダラダラと安ビールを飲んだりして過ごすのが普通のようなので(もちろん次の日に仕事がある人はさっさと帰っていくが)、深夜過ぎにライヴが始まってもどうということはなさそうだった。

マツァゴウ・スクワット主催のライヴはスクワットのすぐ前にある広場で行われ、機材などはスクワットから持ち出し、PA、サウンドシステムは知り合いの音響屋を雇って音作りをしていた。例えば日本で公園などでライヴをやろうとすると、市町村の役所や警察に届け出をして許可をもらう必要があるが、こちらは造反有理のやったもの勝ちであり、この日も一切許可等は取っていないとのことだった。朝4時過ぎまでライヴは続いたが、近隣の住民からの苦情もなく警察が来る事もなかった。この辺りは、老若男女問わず夜毎町へ繰り出すのがごく一般的な、ギリシャの人々の国民性もあるのかもしれない。また警察が来ないのは、警察が来ても皆で追い払ってしまうからだと言う。警察よりもパンクス、市民の力の方が強いわけである。

アテネで行ったライヴは、Strefi Hillというエクサヒア近くの丘で行われたが、ライヴの前には、一連の反ファシズム運動に関連するイヴェントということで、近くのコートでフットサルやバスケットボールなどの試合を行っていた。ヨーロッパには反ファシズムを掲げるサッカーチームが幾つも存在するらしく、一つの考え方の元で人々が何かを共同で行うといったような、生活と思想が間断なく同居している印象を受ける。反ファシズムも日常の連続性の上にあるごく当たり前な行動というわけだ。日本のアナキストである向井孝氏の著作にある「非暴力直接行動」というのは、正にこのことなのかもしれないと思った瞬間でもあった。

そのアテネのライヴは、Villa Amaliasという今年で24年目を迎えるアテネの中心的スクワットのベネフィット・ライヴであり、ファシストから攻撃を受けて建物の一部が燃えて損壊したり、建物そのものも築100年以上の古いもので老朽化が激しく、その修繕費に充てるらしい。


アテネでのライヴ

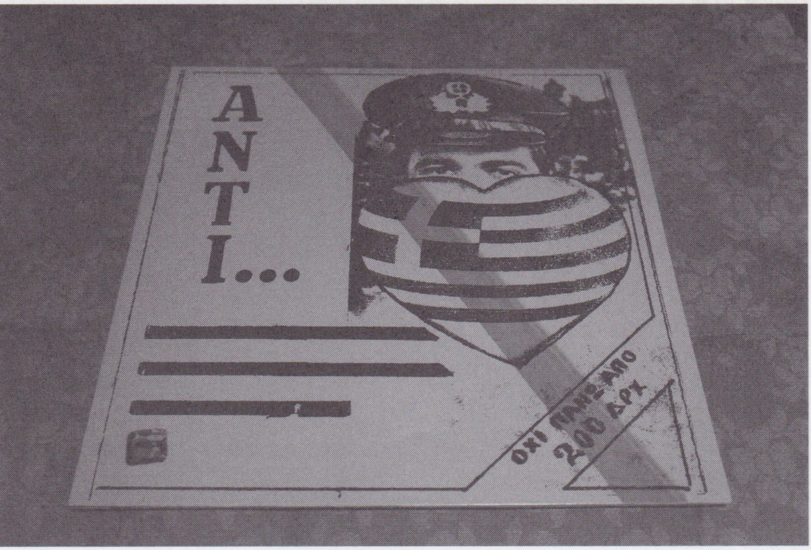
音楽的な話も少し。こちらでは今もいわゆる「ネオクラスト」(この言葉は私は嫌いだが)が主流の様で、どんなバンドが好きなの？と聞くと「メロディのあるクラストだよ」と答える人が多かった。現行のそういったギリシャのバンドの音源も幾つか聴かせてもらったが、僭越ながら正直な感想を述べると、オリジナリティに欠けると共にクオリティがそこまで高いとは言えず、まだまだこれからバンドが磨かれていくのだろうかと感じた。ただギリシャは80年代から活発なシーンがあり様々なバンドがいたとのことで、80年代にバンドをやっていた人たちが今またシーンに戻って別のバンドをやっているとも言っていた。その中で皆口を揃えて好きだと言っていたのはNaytia(ナフティア)というバンドだ。80年代後半〜90年代半ばに活動していたバンドで、音的にはUKクラストの流れを汲むバンドである。ちなみにNaytiaとは英語で"Nausea"を意味する。他には80年代からニューウェイヴ/ポストパンクのバンドも数多くおり、その中でもキーボードx2、ベースという編成のAntiというバンドがかっこよかった。日本でも音源が流通していたHibernationももちろんまだ活動しており、アテネで私が滞在したスクワットには現在のベーシストが住んでいた。またテッサロニキで世話になったディミトリスと言うナイスガイがやっているGo Filth Goというバンドは、Disclose直系のノイジーなD-Bea

tバンドで、バンドのロゴは日本のSUGI氏が手掛けている。

ただライヴは前述のように深夜から朝方にかけて行われ、バンドの入れ替えもギリシャ的なのんびりさなので、日本のようなうまく仕切られたライヴと比べると全体的にダラダラした印象を持つのは否めない。そのせいなのかわからないが、バンドの演奏もどこか物足りず、ただ淡々と演奏をしているだけのようにも思えた。もちろんMCでは反ファシズム運動などについて長く語ったりしており、音楽より先に政治性があるのがこちらのバンドの特性のようである。一般的に、政治性とバンドのクオリティというのは、二兎を追えぬものなのかもしれない、根拠のない私的な邪推ではあるが。

また政治的過ぎるがゆえに、こういったことも起こると聞いた。他の国からツアーでやってきた友人がギリシャのスクワットでのあるライヴでメタルの音源やTシャツを売っていたら、「メタルは商業的だから売らないでくれ」と注意されたらしい。もちろん今日のハードコア・パンクにおいて何がメタルで何がパンクかという線引きは議論の余地が大いにあるが、これは音楽、表現の幅を自分たちで狭めてしまい、また別の形のファシズムを生むようにも思う、ポリティカル・ハードコア原理主義とでも言うか。

高い生活費や税金が生活を圧迫してくるために、日々賃労働に勤しむより仕方がな



Antiの再発LP

いと思っている日本人からすれば、彼ら彼女らの生活は、お金はないが、より自由で毎日を楽しむべきものに創り上げている感がある。賃労働や貨幣制度というのは資本主義が一方的に押し付けてきた制度であり、自分たちの手でそれ以外の方法、生きる道を模索していく力というのをギリシャの人々は日々実践しながら追い求めているように感じた。それはフラペというアイスコーヒーを最低でも2時間かけて飲みながらお喋りやゲームを楽しむギリシャ人特有の「ゆるさ」にも起因するのかもしれないが、怠惰、と言うよりは、会社の為でもなく国のためでもなく、ただ自分たち自身のために時間を使っているというより自由な姿勢を垣間見ることができる。もちろんその「ゆるさ」が極端な利己主義や懶惰な「テキトーさ」といったような悪い方向へ作用することもあるが、周囲の目や場の雰囲気、慣習ばかりに気を取られて知らぬ内に「組織」の歯車になっていくような息もできない社会に生きる者からすれば、学ぶべき点は多い。

この季節のギリシャの空は紺碧である。渺としたエーゲ海ももちろんどこまでも青い。アンゲロプロスはこの青い夏をどのように見ながらあの灰色の空を写し撮ったのだろうとふと思う。古代にはもちろん隆盛を誇ったが、その後は歴史の流れに翻弄され、19世紀の独立、大戦と内戦を経て軍事政権が崩壊したつい数十年前までの長きに渡って不遇を蒙った国でもあるギリシャ。そして今、国家が、経済が人々の意思とは無関係に破綻に陥る最中も、ギリシャの多くの人々は悲観的になり過ぎずに自分たちの生を掴もうとしている。その先は決して真っ青な青空ではなく茫漠たる灰色であるのかもしれないが、その果てしのないくすみの向こう側を見据えているのだろう。

この他私の旅の模様を下記ブログで記しております。

”旅の軽さ”　http://tower.void-server.net/

E-MAIL　satoshi@nomasters.com

CRASS

～"CRASSICAL COLLECTION" TEXT:行川和彦

英国生まれのジャーナリストであるジョージ・バーガー著の本の和訳『CRASS』も河出書房新社から発売され（ディスクユニオンで購入すると限定で行川による解説書付）、また静かに盛り上がりつつあるCRASS。ただ音楽シーンも政治も掻き回したアグレッシヴな活動展開のみがクローズ・アップされがちだが、CRASSの表現自体に向き合うことも忘れたくない。まずは作品を聴いていただかないと始まらないのだ。というわけで、2010年から始まって2012年に完結したCRASSのアルバム・リイシュー・シリーズ"CRASSICAL COLLECTION"の6タイトルを特集したい。
すべて2009～2010年のリマスタリングの音が使われていてLPとはまた違った鮮烈な響きに仕上がっており、それぞれボーナス・トラックを追加。メンバーのライナーと歌詞、今まで不明だった曲ごとのソングライターのクレジットが付き、アートワーク担当のメンバーのGがデザインした厚手の紙の64ページのブックレットの作りも気合が入っている。さらにCDを収めた二つ折りの新デザインの紙ジャケットと、クラス・レコードからリリースされたLPのポスター・ジャケットのミニチュアが、小箱に収納されている。

『The Feeding Of The Five Thousand』（CRASS CC01）CD

ボーナス・トラックの16曲を含む約66分34曲入りで、リーダーのペニー・リンボー（ds他）とスティーヴ・イグノラント（vo）のライナー付だ。オリジナルLPのリリース年は78年という説が有力だが、"79年に出した"とCRASS自身が書いたこともある。ただレコーディングしたのが10月末のことだから、78年の末から79年の頭に掛けて世に出たのかもしれない。

"cunt"など卑語の使用やキリスト教の冒涜とも解釈できる歌詞の内容ゆえにプレス工場から溝に刻むことを拒否され、スモール・ワンダー・レコードから出たオリジナルLPでは無音状態だった1曲目の「Asylum」は、クラス・レコードから再発されたLPと同じ形でしっかり収録されている。「Asylum」はスポークン・ワードと不穏なアンビエント・サウンドで作られており、そういう曲を最初に持ってきたことでいきなりCRASSは既成のパンク・バンドとはまったく違うことを示した。続く「Do They Owe Us A Living?」は音が跳ねるCRASS流のパンク・ロックで、以降、立て続けに弾けた音の曲が繰り出される。EXPLOITEDも怒らせた「Punk Is Dead」ではパンクをはじめとする音楽シーンや業界システムへの反発を歌い、スローガンの反復のみの曲「Fight War, Not Wars」でシンプルな反戦メッセージを繰り返し、ギター・ノイズと女声の「Women」ではフェミニズムのニュアンスを匂わせた。つまりCRASSの基本的な意思はこのアルバムの時点で既に集約されていたのである。

CRASSは音楽的に初心者集団ではなかったが、あらゆる面でロックをはじめとする従来のポピュラー・ミュージック全般にファック!を叩きつけたから斬新な音楽になった。曲は現代音楽の手法を密かに応用してロックンロールのフォーマットから解き放たれ、演奏は伝統的なロックのスタイルから掛け離れていた。にもかかわらず、このファースト・アルバムのほとんどが前のめりのパンク・ロックになった原動力は、スティーヴ・イグノラントの"ワーキング・クラス・ヴォーカル"に他ならない。後のOi!パンクに直結する嫌悪感丸出しで男臭く田舎臭い喉を震わせてアルバム全体に勢いを付けたのだ。ス

『The Feeding Of The Five Thousand』



『Stations Of The Crass』



ティーヴが書いた曲が最も多いアルバムでもあり、彼が綴るプリミティヴな歌詞が以降減っていくこともCRASSが変わっていく主因の一つだった。さらに1分台の曲がほとんどというのも当時のパンク・バンドの中では異例で、短時間で思いを叩きつける手法でも後のハードコア・パンクの先を行っていたのである。

この"CRASSICAL COLLECTION"のシリーズはボーナス・トラックもポイントだが、それが最も魅力的なのが本作。77年5月、同年8月、78年2月にレコーディングした"ラフ・スケッチ"が収録されている。77年5月録音の２曲はペニーとスティーヴだけでCRASSのメンバーが集まる前の音源だが、早々と作った代表曲「Do They Owe Us A Living?」がCRASSの方向性を決定づけたことがわかる。77年8月録音の５曲は大半がボツにされた曲だが、CRASSがブルース/ロックンロールのフォーマットを踏まえた曲も作っていたことが興味深い。そして78年2月録音の９曲はアルバムに収める曲だが、デモ録音ならではのシンプルな味わいの原石状態。サーフっぽいアレンジも聞こえてくるし、「Punk Is Dead」がミニマル・ミュージックみたいな反復になっているところにもCRASSの試行錯誤が見て取れて面白い。

『Stations Of The Crass』（CRASS CC02）CD

自主レーベルのクラス・レコードのアルバム第一弾として79年にリリースしたセカンド・アルバム。残念ながら２枚組LPと最初のCDに入っていたライヴ17曲は未収録だが、今回のリイシュー盤は79年３月録音のラジオ・オンエア用の６曲が追加された約66分26曲入りになっている。ペニーとスティーヴのライナー付だ。

パンク・ロック・スタイルをキープしつつヴァラエティに富み、CRASSのアルバムの中で最もユーモアにも富む。やや曲が長くなり、ところによっては音声のコラージュやダブなどを組み込んでポスト・パンクのニュアンスも強い。たとえば女性ヴォーカルの曲はRAINCOATS、雑音が拡散する曲はCABARET VOLTAIREといった具合に、当時クラス・レコードの作品をディストリビューションしていたラフ・トレードのバンドとも共振していた。"仕掛け"だらけのアルバムで、「White Punks On Hope」はCLASHに対する皮肉も歌われた曲だが、タイトルは米国のグラム・ロック系バンドのTUBESの

「White Punks On Dope」という曲名にも引っかけているのだろう。

女性メンバーがソングライティングを手がけて歌う曲が増えた点も含め、バランスが良くて最もCRASSらしい作品……と言いたいところだが、そうは言い切れない。依然として大半の曲のリード・ヴォーカルを取っているとはいえ、スティーヴ・イグノラントの名がソングライターとしてクレジットされた曲が一つもないのだ。他のメンバーのアーティスティックな方向性が強まって下品な匂いが薄まったことで、パンク・シーンを越えて先鋭的なロックを求める人に一層アピールしたとも思われる。ただしむろんアルバムにもストレートな曲を入れてはいたが、この頃からCRASSは一発必殺のパンク・ロック・ナンバーはシングルで発表するようになり、アルバムは全体の構成を考慮して様々な曲が収録されるようになる。

一方ボーナス・トラックは、名レコーディングが多いBBCラジオの"ジョン・ピール・セッション"の模様だ。無名のアーティストでも気に入ればオンエアして80年代後半のUKハードコア・シーンのバンドの曲もレコード・デビュー前から世に放った、ディスク・ジョッキーのジョン・ピールの番組である。たとえ"fuck"の類いの言葉を含む歌詞の曲はNGだったとしても国営放送でCRASSの曲がかけられたことは、なんだかんだ言っても太っ腹な英国の懐の深さを物語る。アルバムやシングルのテイクに近いが、ピール・セッション特有の硬質かつシンプルな音はスタジオ録音盤とはまた違った鋭角的な味わいがあり、CRASSの音楽的な魅力を引き出している音源だ。

『Penis Envy』(CRASS CC03)CD

81年リリースのサード・アルバムで、ボーナスは3曲だけの約46分13曲入り。ペニーに加えて、女性メンバーの一人であるイヴ・リバティーン(vo)のライナーが付いたのも本作の性格を表している。

女性ヴォーカル・オンリーということでCRASS異色のアルバムである。いや、それは一方的な見方かもしれない。以前の曲がスティーヴ・イグノラントの男性ヴォーカルが大半だったことを思えば、これもCRASSの"正当"な形態のアルバムとも言える。ただスティーヴとしてはアルバム一枚丸ごと自分が外されたことで面白くなく、CRASSの中で

の自分の必要性を自問自答もしていた。フェミニズムが基本的なアティテュードの一つであるCRASSの中でスティーヴは最も伝統的な男性的価値観を持つメンバーで、バンドを始める当初は女性メンバーを入れることに対して積極的ではなかった"歪み"が、当時表には出てなかったにしろ内部ではあらためて露わになった。

そういったバンド内の"軋み"を殺ぎ落としたかのように『Penis Envy』はすがすがしい佇まいだ。うねうねするベースとファズ・ギター、マーチング・ドラムといったCRASSの音の核は変わってないし、むろん一般の女性ヴォーカルものの百万倍キツい響きだし高い声域ゆえ時折ヒステリックにも聞こえ、アグレッシヴである。ただスティーヴの俗悪な声を一掃した女声オンリーの作りでCRASSが内包するポップ感が浮き彫りになった。SLITSやRAINCOATSがアルバム・デビューする前の初期のパンク・ロック・スタイルがハードになったかのようで、同じくラフ・トレード絡みの女性バンドである、GIRLS AT OUR BESTの"まったり感"も漂う。

そういった音は女性をクローズ・アップしたアルバム全体のテーマに沿っており、女性ヴォーカルのパンク・ロックとしても他に類を見ない名盤で、一番実験的な曲が少ないストレートなアレンジのアルバムという点も特筆したい。と同時に作曲やアレンジの端々に、85年リリースのペニー・リンボーのソロ作『Acts Of Love』で表した映画や演劇の音楽みたいな要素も感じられ、そのアルバムに全面参加したイヴ・リバティーンのオペラちっくな歌唱も顔を出す。LPでは曲名がクレジットされてなかった本編最後の曲「Our Wedding」は、そういった音楽資質を上手く活かして結婚制度を皮肉った甘

『Penis Envy』



『Christ - The Album』



い曲。女の子雑誌の付録ソノシートのためにCRASSが変名でレコーディングした曲である。

なおボーナスの3曲は、2000年代にコラージュ/リミックスしたもの。オマケといった感じだが、クラシカルな趣も加味している。

『Christ - The Album』(CRASS CC04) 2CD

82年発表の4作目。当時LPもスタジオ録音とライヴの2枚組でリリースされたが、本作のブックレットはボックス・パッケージのオリジナルLP版に封入されていたものとは別内容だ。ペニーとスティーヴのライナー付。

ディスク1はスタジオ録音で、本編の曲のアウト・テイクが追加された約69分22曲入りである。CRASS流の骨っぽいパンク・ロック・スタイルに戻った路線ではあるが、やはり"アヴァン・ハード・パンク"と呼びたい多彩なサウンドになっており、気持ちがそうさせるのかヘヴィで一番濃いアルバムである。それはともかく全体の構成が演劇的とも言えるほど凝っており、曲間に留守番電話の伝言メッセージの再生みたいな音声を重ねている点がポイント。ただそこで勢いが途切れてしまうから全体の流れとして加速度に欠け、重いビートをはじめとして音そのものに初期のハジけた感覚もないから間延びした印象も受ける。考えすぎにも思えるが、逆に言えばそれゆえ非パンク系の音楽ジャーナリストの評価は高い。

前作の反動かヴォーカル・パートの大半はスティーヴ・イグノラントが取っており、一曲だけとはいえスティーヴがソングライティングをした曲が久々に収録されたが、その曲「Mother Love」がポリティカル云々以前に家族の問題をピックアップしていて興味深い。本人は書いて後悔しているが、政治を扱うことで一個人を封印していたメンバーと一味違うスティーヴの物の考え方が表れているし、結局は他人事も多い政治のことではなくまさに自分自身の中から出てきた表現だから生々しいのだ。

政治云々だけではなく常にシーンを意識しているCRASSならではの曲もある。「It's The Greatest Working Class Ripoff」はOi!ムーヴメントへの返答みたいな曲で、モリッシー(元The SMITHS)もこよなく愛するCOCKNEY REJECTSの代表曲「The

Greatest Cockney Rip-Off」をもじってもいる。Oi!パンク・シーンとの確執が絶えなかったCRASSだが、"Oi! Oi! Oi!"という掛け声がハマっているのは、当時から密かにOi!周辺のバンドにシンパシーを覚えていたスティーヴの本領発揮！と言える。

『The Feeding Of The Five Thousand』のこのシリーズのCDに追加されたデモ・テイクの曲の断片を数か所に挿入するなど遊び心もいっぱいだが、ボーナス・トラックのラフなアウト・テイクを聴くとストレートに仕上げたらもっとパワフルなアルバムになったと思わずにはいられない。当初ラスト・アルバムとして作っただけにCRASS総決算！とも言うべき仕上がりであると同時に、バンド自身の終末感もゆっくりと漂い始めている。

一方の約48分24トラック入りのディスク2はLPの時と同じ曲数でライヴ・テイクが入っているが、こちらも曲間に別の音声を挿入。というわけで全体の流れが途切れ途切れで勢いに欠ける点は否めないが、曲ごとのライヴ・パフォーマンス自体は素晴らしい。シングルの曲も色々やって、セットリストを見るとバンドにとって当時どの曲が特に大切だったかもわかる。

『Yes Sir, I Will』（CRASS CC05）2CD

83年リリースの5作目。当時LP1枚で発表したアルバムだが、今回はCD2枚組でのリイシューである。ペニーとスティーヴのライナー付だ。

約44分のディスク1はオリジナルLPの曲が入っている。LP時代ははっきりした曲名表記がなくて曲の切れ目もわかりにくかったから全体で一曲みたいに解釈されたが、今回は7トラックそれぞれに曲名が付いている。とはいえやっぱり実質的に全体が一続きの壮絶な"組曲"だ。

のた打ち回っている怒涛の声と音が続く。途中で設けられた男声とピアノのクラシカルな数分間以外は息をつくところがない。男女の比率がほぼ均等で以前の作品以上にアジテーション調のヴォーカルをはじめとして、サウンドが途切れずに加速し続ける。ノイジーだからインプロヴィゼイションのようにも聞こえるが、実際はフリーキーなパン

ク・ロックのパートがほとんどで、作曲家としてのペニーの力量を再認識もできる。

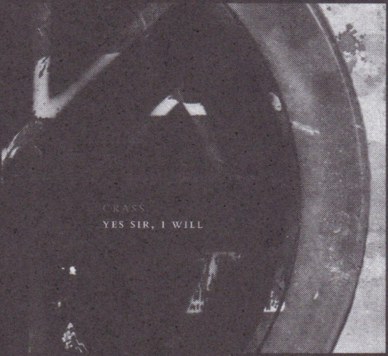
実のところ当初は作る予定がなかったらしいが、82年に起こった英国とアルゼンチンとの間のフォークランド紛争にCRASSが点火されたアルバムでもある。レコーディング当時大ヒット中だったNEW ORDERの「Blue Monday」のフレーズを忍ばせるなど実はユーモアも忘れていないが、やはり全体としては余裕がない。いたたまれなくなる。特にパンク・ロック史上異例の20分強の曲はCRASS最後のあがきにも聞こえて息を呑む。歌詞の組み立て方もそれまでとは違った。基本的に一人称を"I"で表現していたCRASSが意識的に"we"を多用し、破壊的な音にも関わらず言葉は内省的なトーンも強いのだ。そういう意味でも"自爆アルバム"と言える。

ディスク2は本編の曲を2002年に再構築した約46分8トラック入り。ジョン・ゾーン風のサックスやバス・クラリネット、アップライト・ベースを加えたCDだ。いわゆるリミックスものの常で元を上回る興奮は得られないが、CRASSとジャズのちょっとした接点は見えてくる。

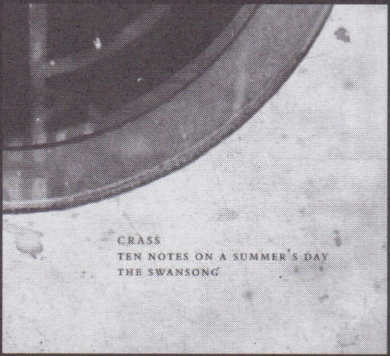
『Ten Notes On A Summer's Day』(CRASS CC06) CD

85年に12"シングルとしてリリースされた作品。各々10分前後の曲とはいえもともと2曲しか入ってなかったが、今回のリイシュー盤は4曲追加の約33分6曲入り。このレコードだけはもともとポスター・ジャケットではなかったから、新たに風景をデザインし

『Yes Sir, I Will』



『Ten Notes On A Summer's Day』



た6つ折りのミニ・ポスターが封入されている。ペニーなどのライナーが付き、歌詞が少ないから他の5タイトルよりもGによる写真多用のアートワークの割合が高いブックレットだ。

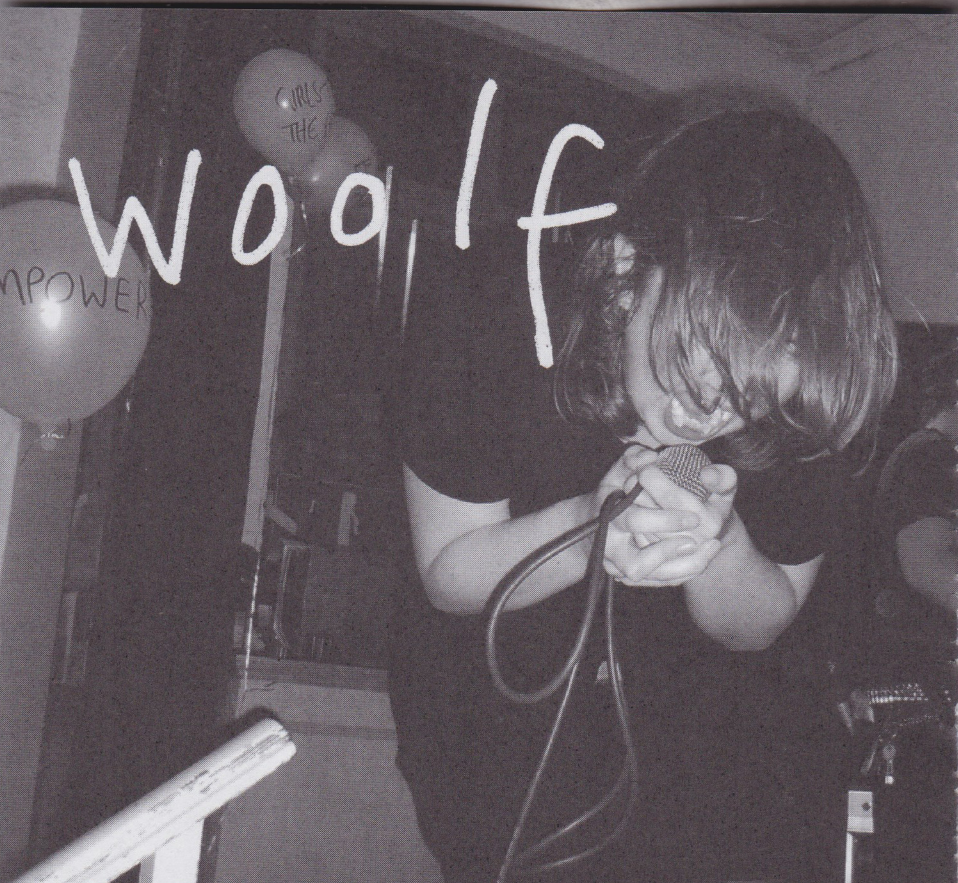
"残務整理"というわけではないが、前作ともどもスティーヴ・イグノラントは本作を「クソ！」と言い切っている。実際これをCRASSの作品と呼んでいいものかと迷う内容だ。結成時から不動の体制が崩れ、リズム・ギターのN.A.パーマーが脱退して既にいない。それでもクレジットによれば他のメンバーは全員レコーディングに参加したようだが、そのようには聞こえないサウンドなのである。

もしCRASSが当時精神的にパンクだったとしても、これはパンク・ロックじゃない。ジャズ～ファンクの要素も含むが落ち着いており、特に静かなインストの2曲目はまったりした70年代後半のCANも思い出すスペーシーな感覚で、映画や舞踏、クラシカルなダンスの音楽みたいだ。自らを葬り去ったCRASSの鎮魂歌にも聞こえる。

ボーナス・トラックはCRASSのレコーディングではないが、本編の流れにそった曲が入っている。85年のペニーのソロ・アルバム『Acts Of Love』の曲のリミックスと再収録、クラス・レコードからリリースしたバンドのHIT PARADEの曲、ペニーが歌詞を書いてA-SOMAがプレイした94年の4曲で、いずれもつつましいトーンで統一されている。

ともあれ、やはりリリース順から接していくことをオススメする。さらにCRASSはアルバムとは別にリリースしていたシングルの曲も非常に重要だから、2012年の秋にリリースが予定されているシングル集『Best Before 1984』のリイシュー盤もチェックしたいところだ。

woolf



フリーキー&アバンギャルドに突き進むロンドン発のオール・フィメール・パンク・バンド、WOOLFが1stアルバム『RIGHT WAY TO PLAY』を、お馴染みLa Vida Es Un Musよりリリースしております。
個人的には針を落とした瞬間にCRASSの"Systematic Death"が頭をよぎりましたが、もっとラフで自由奔放。イギリス人女性作家のヴァージニア・ウルフからバンド名を拝借しているなど気になるところ満載でしたので、メンバー全員にメールでのインタヴューを試みました。
尚、彼女たちは"クィア"という言葉を度々使っていますが、これはゲイやレズビアン、トランスジェンダーなどといった、性的マイノリティの総称として彼女たちは使っていると思われます。

■WOOLFの結成の経緯を詳しく紹介してください。このバンドを始めたのはいつ、どうして？

Georgina「始めたのは数年前、私たちは一緒にバンドをやるべきだっていうColly（※Coletteのことだと思われる）のアイデアからだったの。お互いによく知った間柄じゃなかったけど、練習したりつるむようになっていったのよ。WOOLFは面倒なことも小難しいこともなく、いつも楽しんでやれてる。
サウス・ロンドンにあるDew Dropってパンク・スクワット（残念ながら立ち退きにあい、取り壊しになってしまったの）で初めて練習するようになったんだけど、そこはめちゃめちゃ安かったし、のんびりしたとこで、バンドを始める私たちにはとっても良い雰囲気だったわ。何かを始めるって、難しい部分もあると私は思うのよね。
2011年にはロンドンのMilk Recordsってレーベルから、素敵なバンドでもあり友達でもあるTRASH KITとスプリット7"を出した。Milk RecordsのAndrewが「Fishing with Lolita」のビデオを作ってくれたんだけど、彼は独創性もあるし創造的なのよね。TRASH KITとスプリット7"を出そうとアプローチしてくれたときには、本当にワクワクしたな。
そのスプリットと『Right Way To Play』とのリリースとの間に、たくさんギグをやったよ。プレイするってみんなと過ごすことでもあるから私たち好きなのよね。バンドとしてお互いにとても忠実な間柄よ」

Colette「Georginaがほとんど話してくれたと思うよ。最近、9日間（!!）のUKツアーをしたところなの。最高に楽しかったよ」

Sophie「私はすでにROSEANNE BARRRをやっていたの。Coletteにナンパされて、それからIrene（COREY ORBISON）、Georginaに声をかけられたのよ。唯一知っていたのはColetteだけだったから、最初のうちの練習は緊張しまくりだったな」

Irene「私たち、基本的には遊び仲間よね」

■バンド名は"Virginia Woolf"(ヴァージニア・ウルフ)からとっているのですか?

Georgina「そう。ヴァージニア・ウルフには闇と不安がある。それは私たちのサウンドに影響していると思うの。それと、バンド名のスペルを実際に見ないと誰もわからないかもしれないっていうダブル・ミーニングにもなっている。捉え所のないものが好きなのよ」

Sophie「バンドに名前をつけるって最悪よね。どんな名前も醜い響きが表に出てるもんね。でも誰かがWOOLFを思いついて、みんな賛成したの。ヴァージニア・ウルフは一風変わってるところがあるから、そこは重要な要素だと思ってる」

Irene「WOLLSTONECRAFT(※イギリスの社会思想家で作家、フェミニズムの先駆者であるMary Wollstonecraftのことかと思われる)という案もあったの。でもこっちはちょっと長くて発音しにくいからね」

■それぞれの音楽的なキャリアを教えてもらえますか。若いときから今まで、どんなバンドやミュージシャンを聴いてきたのでしょうか?

Georgina「13歳から今までパンク・ロックを聴いているよ。私は小さな地方の村で育ち、とにかく音楽に夢中だった。全てのパンク・バンドが気になっちゃって。ライオット・ガールには本当に興味を引かれたの。BIKINI KILLやHUGGY BEAR、BRATMOBILEなんてバンドにね。そういうバンドはとても重要だったし、TRIBE 8、L7、BABES IN TOYLANDなんかの女性バンドやクィアなバンドも同じくね。

それから、CRASSやAUS ROTTEN、A//POLITICAL、AMEBIX、CONFLICT、ANTISCHISM、NAUSEA、SPITBOYのようなピース・パンクやアナーコ・パンクも知るようになった。その当時はニュージーランドのオークランドに住んでいたんだけど、パンク・シーンはアナーコ・パンクやクラストに強い影響を受けていたな。私はTOXIC SHOCK SYNDROMEっていうフェミニスト・クラスト・パンク・バンドでギターを弾い

ていたんだよ。

今はロンドンに住んでいるの。必ずしも出会わなくてもいい、ありとあらゆる音楽にも目と耳を開いていると思う。そういう中に素晴らしい音楽があるよね。でも心はいつもパンク・ロックにどっぷり。もうできあがったバンドやミュージシャンを見に行くよりも、友達のバンドがプレイするのを見に行くほうがワクワクするな。ロンドンのシーンもポジティヴだと思うし、創造的なことが起きてるよ」

Colette「音楽経歴はそれほど豊富じゃないと思う！演奏はさっぱりダメという意味でね。私は単なるオタクなのよ。若い頃はダサいノイズ・ロックに夢中だったな。空き缶の中で録音したみたいなサウンドの作品が好きだったけど、年月が経つにつれてそうは思わなくなった。でも、ほんのときたま痛烈な言葉が耳に飛び込んでくるから素敵なんだよね。ライオット・ガールはとっくに巻き起こっていたことだと思うの── 私の前の世代にね。でも地元のカーディフ（ウェールズの首都）で最初に知ったDIYな動きは、間違いなくポスト・ライオット・ガールやladyfestの信念に貫かれたものだった。



Georginaが言っていたことの繰り返しになるけど、私も地元のバンドを見るのが好きね。他の街(ツアーに出るのは最高のチャンス!)の新鮮なバンドにも興奮するな。ロック・スターを見るのに大金を使いたくなんてないわ」

Sophie「Maya Victoria Kjellstrandのおかげで、ICA(ロンドンにある現代美術のギャラリー・スペースを主とする機関。世界中の優れたアートと文化の発信源としての活動を行っている)で、即興演奏をする全員女性の中に私とColette、Ireneも加わり演奏したことがあるの。ドラムを叩くのは初めての経験だった。あまりに素晴らしい体験で、すぐに友だちのPatrickとバンドを組んじゃった。それは私の音楽のキャリアの大きな部分をしめてるよ。ソロでやろうという計画も立てているの。まあ、ずっと話してはいるんだけど、でも基本的にはこの6年の間のことね。音楽とは別のことになるだろうなとだけ感じてる。音楽が楽しめなくなったらやってみると思う。夢中になってきた音楽を一言でまとめて言うことはできないな。エキサイトさせてくれて、荒々しくて、感動的で緊張感に満ちているものってところかな」



Irene「ロンドンの郊外で、John Peelのラジオを聴きながら育ってきたの。15歳のときに初めてRough Tradeに行って、THE FALLのレコードを買ったんだったな。ライオット・ガール時代の最後の時期だった。でも私はティーンエイジャーが関わるジンのシーンに入り込んでいったの。政治や音楽に対しての考えはシリアスな面もあって、ちょっと圧倒されてたわ。その後はSlampt Recordsに強い影響を受けるようになっていった。バンドで言うとRED MONKEY、AVOCADO BABY、YUMMY FUR、MILKY WIMPSHAKEなんかね。彼らのポリティクスも美的なところも全て含めて…彼らは『Fast Connection』というジンもやっていたな。あれは私にとってはもの凄く重要なものだった。他に、実験的な音楽やエレクトロニック、ノイズなんかにもハマッていったわ。2001年ごろかな、友達何人かと"バンド"みたいなことをやり、Youth Club Tape Clubってレコード・レーベルを始めたの。後のIRRKがそれね。自分たちの周辺の人たちがやってる音楽を出していた。
IRRKには10インチのコンピレーション・シリーズがあって、2003年にHELLO CUCA、VALERIE、HUMOUSEXUAL、LESBO PIG(私はここでプレイしてたこともあるよ)、ERASE ERRATAのSara Jaffeらを収録した個性的な作品を出したのが始まりだったんだよ。このあたりまで、あんまり音楽を演奏することはなかった――ギグを企画したり、レコードを出したり、Homocrimeっていうクラブ・ナイトをやったりすることのほうが重要だったのよ。また初期ladyfestのスタッフでもあって――2001年にヨーロッパで初のladyfestがグラスゴーで開かれたの。あれは強烈過ぎるほどの衝撃だったな――いくつかのバンドのその後のツアーもオーガナイズしたよ。無駄話も含めて素晴らしい人たちだった。今じゃもちろんとても有名だよね。あの当時に私がやってたLESBO PIGはMELODY DOGみたいなスカしたバンドって感じだったかもね。それからブリストルの友達数人と、COREY ORBISONっていうトゲトゲしくて汚いDIYパンク・バンドをやった。WOOLFと平行して今もたまに活動しているんだ。今聴いているのは多種多様で、統一されていない感じね…」

■CRASSを彷彿とさせるところもありますが、サウンドはとてもオリジナルで、WOOLFには色んな音楽的要素があると思います。曲作りはどうやって?

Georgina「ワオ、ありがと！正直に言うと、曲は出来ちゃったという感じで、必死で作ろうとすると本当に難しくて…大概、曲作りはめちゃめちゃ。急に新曲を練習するの。いろいろな音楽の要素があるというのは同感ね。それぞれのやりたいサウンドのアイデアが個人個人違って…なんとかそれを一つにまとめているからだと思うな！」

Colette「ハハ、やったね。CRASSと比較されるなんて嬉しい。CRASSの曲は私たちの曲よりももっと長いとは思うけどね」

Sophie「どうもありがとう！どうやって曲を書こうかなんてアイデアはないのよね。Georginaが練習ルームに凄くいいものを持ってきてくれて、その後はまるでミステリーね。最近はIrene不在で練習しないとならないから寂しいんだけど、みんなの謎な要素が曲を作らせるんじゃないのかな」

Irene「最初のうちは即興でやっていたな、特に練習はね。だから曲は混沌の中から生まれていると思うの」

■LPのレコーディングはどのように進みましたか？

Georgina「レコーディングはちょうどスクワットから移らなくちゃならない時と重なって、だいぶストレスが溜まってたよ（私たちはスクワットから立ち退かないとならなかったの）。それに数ヶ月間の旅に出る時期にも重なったし。そんなことがあったのに、レコーディングは順調にいったよ。いつだってみんな一緒に楽しんでる」

Colette「ワォ、あの時期に起こったことを考えると奇妙なんだよね。レコーディングした12月はとにかくヘンテコな月だった。間違いなく「December」って曲の歌詞はそんな気分が出てる。2日間のレコーディングの後にHARD SKINとLOWEST FORM、それとFACEL VEGAを見るつもりでいたのを思い出すな…作り終えた観点から言うと、作品は私たちの頭の中で感じたことがサウンドになってる。ほっとしたわ」

Sophie「とても充実していたな。Dropout studiosっていうナイスなスタジオでレコーディングしたの。途中、いくつかのポイントでみんなそれぞれ苦労していたよ。レコーディングがこんなに厳しいかと実感する瞬間もあったし。ドラムの叩き方を教わったことがなかったから、自分の技術不足も思い知らされたしね」

Irene「本当だよね、さらけ出された感じ。これまでこんなに真剣なやり方でレコーディングをしたことがなかった——LESBO PIGは部屋の真ん中にディクタフォン（録音機）を置いて録ったの。音を大きくしたり小さくしたかったら、ディクタフォンから離れたり近づいたりしてね…COREY ORBISONもそんな感じかな。WOOLFの最初の7"は多少、一発録りっぽいもんだったから。でもアルバムは初めてのやり方をしてて、時間を延長したりトラックを変えたりと贅沢なレコーディングだったよ」

■LPのスリーヴのデザインはSophieが描いたんですよね。この男性にはどんな意味



を込めて？悲哀ですか？

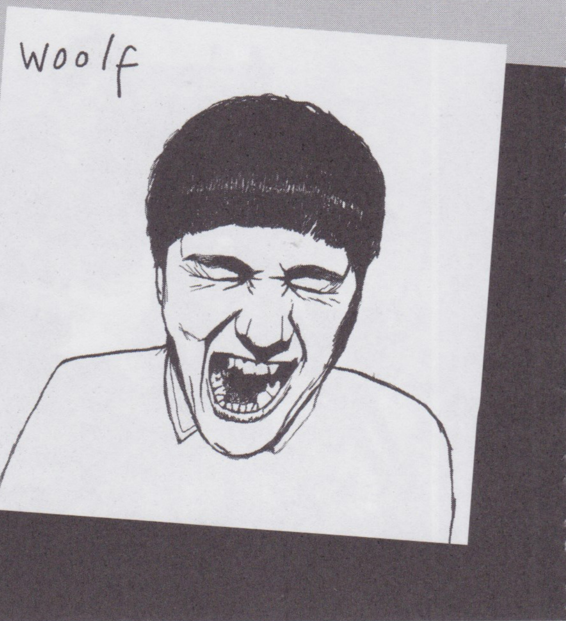
Georgina「あのカヴァーはSophieが手がけたの。熟考と激怒を意味してる…。でも"愛のある人生"の中での怒りであって悪い意味での怒りではないよ。私はあの人物を中性的と捉えているんだ」

Colette「そうだね、あの絵にはSophie自身の理由が隠されていると思うよ。アートワークは特定の人物のように見えるかもしれないね！でも間違いなく不確かだし性別も不明だと思う。ねえ、解釈の準備はできてるでしょ」

Sophie「男性ではないよ。バンドの友達でもある中性的な女の子なの。私の考えは両極端の中間ライン、中間の性、はっきりしない怒り/歓喜と熟考。私はWOOLFのことをそんなふうに考えているの。私たちは自分たちの音楽や個性において、シリアスにもなれるし、穏やかにもなれる。ノイズや怒りが必要ならそれも表現できる」

■La Vida Es Un Musからリリースしたのはどうしてですか？Pacoからオファーがあったのですか？

Georgina「私たちバンドからなの。La Vida Es Un Musから作品を出したかった。でも実現するとは思ってなかったな。CollyがPacoに作品を送ったら、レコードを出したいと言ってくれたのよ。なかなか信じられないこ



とでしょ！La Vida Es Un Musリリース作品の一つになれて、めちゃめちゃ興奮してるんだから」

Colette「La Vida Es Un Musのリストに名を連ねるのは、とてもヘンな風にフィットしているんじゃないのかな。私たちは彼のファンの人たちをもの凄く困惑させたと思うんだよね。真剣に光栄よ。彼は一生懸命にやってくれたの、クリスマスの当日までね。なんだか凄いよね！」

Sophie「Pacoは私の誕生日にWOOLFのレコードを出そうと言ってくれたんだよ。プレゼントよね！彼は励ましてくれたり、サポートもしてくれている。La Vida Es Un Musからリリースできて本当に興奮しているよ」

■近頃のロンドン・パンク・シーンについても教えてください。お勧めのバンドはいますか？ロンドンのTORTURAのカセットテープを持っているのですが、彼女らと共演したことは？

Georgina「TORTURAとは何回か共演したことがあるよ、彼女らはグレートだよね！他のグレートなバンドは、GOOD THROB、COVER GIRL、FAGGOT、TRASH KIT、PETTYBONE、COREY ORBISON、ETAI KESHIKI、SILVER FOX、BEAUTY BROTHER GANG」

Colette「うん、そうそう。Georginaが全部あげてくれた！！ロンドン出身じゃないバンドがほとんどだけど、THE LOWEST FORM、SATELLITES OF LOVE、STAB、ROSEANNE BARRR…もっといるはずよ！」

■女性がバンドをやり易い環境にありますか？フェミニズムに関心は？

Georgina「この数年間のロンドンのミュージック・シーンはかなり盛り上がってきてい

ると思うよ。女性やクィアなメンバーがやってるバンドがたくさんいるしね。これは主導権なんかのために音楽シーンに時折はびこってきた"型"や"ワク"をぶち壊す助けになっていると思うんだ。私の考えになるけど、あらゆる音楽シーンがクィアやフェミニストのミュージシャンをもっと必要としている。いい加減、古い仕組みには飽き飽きよ。
私は自分をフェミニストだと考えているけど、クィアだとも言える。クィアっていうのは、例えばフェミニスト支持、反資本主義、反人種差別主義、反トランスフォビア、反ホモフォビアなどを合わせた幾つものポリティカルなアイデアを、大きく一つにまとめたポリティカルな考えと言えるとも思うからね」

Colette「間違いなく、まず最初にクィアだと自分のことをみなしているよ。ただクィアなポリティクスをお互いにつないでいる急進的な要素は、今自分が立っているところからは、かなり離れているとは思うんだけど。具体的に聞かれたら、私は自分のことをサード・ウェイヴ・フェミニストだと言うかな。わかりきっていることだけど、"古い仕組み"は、女性ー従ってーフェミニストっていうイデオロギーに簡単に適合しない多くの人たちに影響を及ぼしている。私たちバンドとしてのジェンダーやセクシャリティーが理由で、ひどい扱いを受けたり差別されたりすることがあると、私は相当なショックを受けちゃうんだよね。同じ立場にあるバンドと共演するのはたまらなくクールだよ」

Sophie「そう、そうなの、私たちはクィア・バンドよ。クィアなシーンでもプレイしているし、それ以外でもプレイしていて、そのどっちもが重要なんだよね。男性が支配しているシーンでプレイするのはかなり不気味な感じもしているけど、私たちがやっていることはとても重要じゃないかと思う。目に見えることが重要だと思うんだよね」

Irene「ロンドンにはとても積極的なクィア・シーンが存在すると思うな。COVER GIRLS、TRASH KIT、VERITY SUSMANなんかのバンドもいるし、Club Milkのようなプロモーター、Power Lunchesのような友好的な会場もあるんだよ。フェミニストやクィア論、それからポリティクスは、私の人生やコミュニティにおいてもの凄く重要なものなの。私はそれらの一部だし、バンドもそれらの一部になっていると思う」



■では、好きなアーティスト、映画、本などを教えて下さい。

Georgina「好きな本はサラ・シュルマン（アメリカのレズビアン小説家で活動家）の『People in Trouble』。好きな映画は『Institute Benjamenta（ベンヤメンタ学院）』。好きなアーティストはシンディ・シャーマン（アメリカの写真家・映画監督。コスチュームを着けた自分を被写体としたセルフ・ポートレイト作品で有名）とエドヴァルド・ムンク（ノルウェー出身の画家、ムンクの『叫び』の作者）」

Colette「ちょうどサラ・シュルマンの『Gentrification of the mind』を読み始めたとこ！とても興味深くて、再生やクィアな関係、未来の唯物論に関することかな。四六時中、好きなものがずっと同じってわけではなく、時期によって好きなものがあるんだけど、ヴィジュアル・アートに対しては強い嫌悪感があるのね。だから質問には答えることができないのよ。ラヴコメは好きだよ。夕べも『恋人たちの予感』を見たよ」

Sophie「下品でバカバカしいもので言ったら、シンディ・シャーマン、ライアン・トゥリカーティン（セクシャル・マイノリティなどのアイデンティティに関わる問題を、カットアップ構成やエフェクトなどを用いて軽快に扱った作品で脚光を浴びる）、ポール・マッカーシー（絵具、ケチャップ、体液を体中になすりつけ、性・排泄・暴力などのタブーに挑んだパフォーマンスや映像作品が有名）。静けさのあるもので言えば、ガブリエル・オロスコ（メキシコを代表するコンテンポラリー・アーティスト）、フランシス・アリス（社会的危機を抱いた都市空間を舞台にビデオや抽象絵画によって世間を挑発し続けるアーティスト）に夢中よ」

Irene「本なら伝記や自伝が大好き。ずっと好きな作品は『Beautiful Shadow：a life of Patricia Highsmith』(アンドリュー・ウィルソンによる、作家"パトリシア・ハイスミス"の伝記。パトリシア・ハイスミスは『太陽がいっぱい』、『殺意の迷宮』などが有名。クレア・モーガン名義で書いた『The price of Salt』は同性愛者の人気を呼ぶ)ね。彼女はかなりサイコティックだったみたいで、作品にもそういう雰囲気が満ちているのよ。
アンジェラ・ディヴィス（社会学者、反人種差別主義、フェミニズム運動家）の自伝『An Autobiography』、これは説明不要よね…。好きなヴィジュアル本は『Queer With Class：The First Book of Homocult』。これは今じゃ手に入れるのは難しくなっちゃったね。Class War(1980年代のイギリスの階級闘争)に関わったポスター・アーティストの作品が掲載されている。90年代の初期にマンチェスターで制作されたとき、ゲイ・シーンは表立ってきた。内容も衝撃的だし、印象的な場面が切り出されてる。
好きな映画はリジー・ボーデン監督の『Born in Flames』、『Paris is Burning』。メル・ブルックス監督がジーン・ワイルダーと組んだ作品、特にあげるとしたら『The Producers』かな。他に映画は『フェリスはある朝突然に』もいい。
本業のほうで、ヴィジュアル・アーティストと一緒に働いているから、"お気に入り"をうまくまとめるのは難しいな。でも映像作品に心を動かされる傾向が強いわね。セディ・ベニング（映像作家。ジェンダー問題を扱った作品が多い。作品は『それは愛じゃない』や『もしどんな女の子も日記をつけていたら』など。元Le Tigerのメンバー）の初期作品には未だに感動しっぱなしよ。もちろん新作も最高！最近、シンシア・モーンっていう

LAの70年代のビデオ・アーティストを知ったの。リズ・ローズ（70年代前半よりUKアヴァンギャルド・フィルム界の重要人物として活動）の全作品もいいね。リンダー・スターリング（イギリスのコンテンポラリー・アーティスト）の作品もいいし、もちろん80年代初期に活動した彼女のバンド、LUDUS（ブリティッシュ・ポスト・パンク・バンド）もね」

■今後の予定は？

Georgina「新曲を作る。レコードを出す。ツアーに出る!!!!!!!!」

Colette「そうだね、また新たなスタートを切りたい気分。新しいテープも作りたいし、ツアー、ツアー、ツアーよ！」

Sophie「新曲を書かないと！」

Irene「出たとこ勝負！」

■インタヴューに答えてくれてありがとう。日本の読者にメッセージをお願いします。

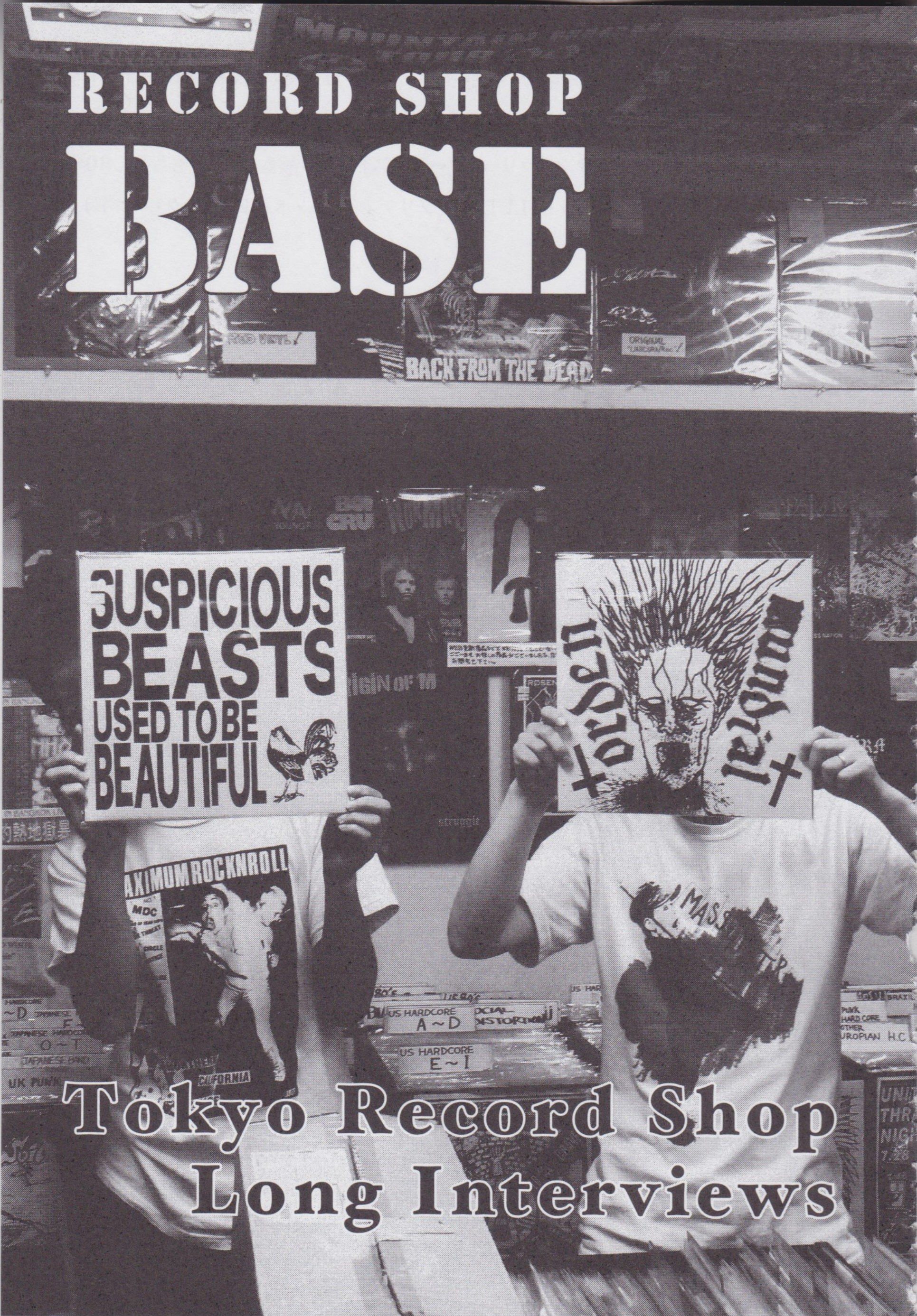
Georgina「関心を持ってくれてありがとう！」

Colette「イェイ、サンクス！！」

Sophie「要望があったら、日本に行ってプレイするよ！」

Irene「読んでくれてありがと！」

RECORD SHOP
BASE



Tokyo Record Shop
Long Interviews

続きましては、全くのゼロからお店を作り上げ、今年で15年目を迎えた高円寺のRECORD SHOP BASEの飯嶋さんと南さんにお話を伺ってきました。開店前の苦労話から現在に至るまでの流れ、そしてBASEという屋号に隠された想いまでをドウゾ！

■BASEの始まりからお聞きしたいのですが、オープンしたのは97年でしたか?

南「97年ですね」

■西新宿のレコード店で元々は働かれてて。

南「僕は2年間だけなんですけどね、飯嶋さんは長くて」

飯嶋「9年、10年くらいかな、多分」

■"自分たちのお店をやろう"というのは、オープンさせる何年前くらいから考えてましたか?

飯嶋「どうだろう、はっきりとは覚えていないけど、"やりたいなぁ"というのがだんだん明確になってきて」

■それで資金とか工面して?

飯嶋「そういうのもあったし、"本当にできるのかな?"とか。あとはしがらみとか、難しい問題もあったもんで(笑)。そこをゴタゴタせずに解決したいなと思っていて」

■それもあって高円寺に?

飯嶋「いや、高円寺はたまたまだったんだよね。元々は色んな場所をあたっていたんですけど、最終的には西新宿も視野に入れていたんだけど(笑)、あの当時、97年とかはもう物件が空いてなくて」

南「それに高かったですね」

飯嶋「下北沢、渋谷とかも考えていて。実は渋谷で物件を決めて押えてから、中古盤を仕入れるのにアメリカに2人で行ったんですよ、3ヶ月間。それで3ヶ月経って帰ってきて、"さぁ、そこの物件を本契約するぞ"って(不動産屋に)行ったら、もう担当者がいなくなってて、その話しが立ち消えになってて。"エー!"って。物件探しが一からの振り出しに戻って。

それで、ここはJUSTICE LEAGUEっていう当時SPROCKET WHEEL、HUSKING BEEのメンバーがやっていた服屋だったんですよ。ここに相談に来て"高円寺とかって

どうなのかな"って話しをしていたら、"俺らここを出るから"って言われて。JUSTICE LEAGUEはその後、(BASEの近くの)ローソンがあるところに移ったんですよ。あそこは以前は中華料理屋で隣りが古い一軒家で、その一軒家をJUSTICE LEAGUEで借りることになって。それですぐに不動産屋を紹介してもらって、入れ代わりで入ったんです。それでここになったんですよ。もうとにかく場所がなかった」

■今じゃ考えられないですね。

南「見合う金額だとね」

飯嶋「高いところも借りられないし、下北沢の不動産屋に行っても門前払い、空き待ちだったり。渋谷の物件ていうのは当時ZEST(ネオアコなどを取り扱っていたレコード店。2005年に閉店)が入っていたビル。あの話しが残っていたら、俺らはあそこに出店していたんだよね(笑)」

■そうだったんですか(笑)。

飯嶋「"やるぞ!"って進めていたら、"場所がない!"ってことだったから、物件には一番苦労したかな」

■やはり最初は不安でしたか?

飯嶋「そりゃ不安だよね、不安が大きかったと思う。特に南さんはキッチリした性格だから、かなり"そりゃないだろ"ってことを言って口論になったり(笑)」

■どんなことですか(笑)?

南「僕は覚えていないんですけど(笑)」

飯嶋「いやー、俺は覚えているよ。"一回の仕入れに使ったFAXの回数がどうこう…"とか。"そんなことまでしないでいいだろー!"って(笑)」

南「経費で元を取れるのかが不安だったのもあって。売って赤字じゃしょうがないっていうのもあったから」

■始めた当時はおいくつでしたか?

飯嶋「俺は丁度30歳」

南「僕は27歳でしたね」

飯嶋「30歳までには店をやりたいっていうのもあって。俺は新潟(出身)なんですよ。田舎の人から見るとレコード屋なんてチャラチャラしているように見えるじゃないですか。

"30歳にもなって何をやっているんだ"って親にすごい言われてたから、"俺は店をやりたいんだ"って話しをして。実際、新潟で店をやるのも考えていたのね。けど当時の新潟も同じ状況で、今はガラッガラだけど、もう物件の空きがないって言われたんですよ。新潟で店をやるっていうのは俺にとってちょっとの選択肢だったから、"空いてない"って言われたらすぐに"こっちでやるしかない"と思って。
前の店を辞めてからここを開くまで1年間あって、GAUZEのアメリカ・ツアーがあったから一緒に行ったり、居酒屋でアルバイトとかもして、色々どうしようかと考えていた。本当にできるかも分からないし、"こういう店にしたいな"とか、いろいろ考えてました」

■遡って、レコード屋の前って何をされていたんですか?

飯嶋「俺は内装、荷揚げ屋とかをやっていたかな。バブル絶頂の80年代後半だけど、その恩恵をこうむることもなく、ただ日雇いにはありつけたという(笑)。当時はパンクが好きなら、フリーターしながらバンドをやるっていうのはよくあることだったけど、今はあんまりそういう人もいないみたいだね」

南「僕はLEOっていうJEANS　MATEみたいなチェーン店の服屋で、1年くらい働いていたのかな。大学卒業して、スーツを着る仕事がイヤだったから。何かしら就職しないといけないからそこで1年働いて。でも僕、前の店の面接で、飯嶋さんに断られているんですよ(笑)」

飯嶋「それは言わない方がいいかなと思っていたのに(笑)」

■面接で、ですか(笑)?

南「新品を扱っていた2号店で働きたかったんですけど、(面接を担当した飯嶋さんに)門前払いされて。"1号店に行って"と言われて、1号店で雇ってもらって。あとから2号店に引っ張ってもらったんです(笑)」

■何が駄目だったんですか(笑)?

飯嶋「こんなことを言うと語弊があるけど、南さんイケイケなパンクな感じで、"スンマセン!"って(面接に)来たから、"ウワッ!"って思って(笑)。"いやー…"って断ったら、1号店に行って受かってて(笑)、しばらく一緒に仕事をしていたら真面目ですごいなって思って。俺が間違っていたなと。その後俺が南さんに"店を一緒にやらないか"って声をかけたんだけど、そのきっかけはというのが、毎日いつも白いご飯だけ持って来て、近所の総

菜屋でハムカツ1枚とか、コロッケ1個だけ買って、それでお昼食べているんですよ。"なんでそんなことしてんの?"って聞いたら、南さんは"僕は将来的に店をやりたいんです。それでお金を貯めているんです"って言ったんだよ。その時、スゲー根性あるなと思って」

南「その時は漠然とでしたね。食費を減らしてレコード買っていたし。だから、お金を貯めてはいなかったですね(笑)」

■ところで、パンクはどこから入ったんですか?

飯嶋「CLASH。もちろん後追いだけどね、中学、高校の頃って80年代頭だから。なんだろう、小さい頃から音楽が好きだったけど、"俺が好きなのはこれなんだ!"っていうのがパンクだったんだよね。

CLASH聴いて"ワッ!"ってなって、DAMNEDとかSEX　PISTOLSとかを追っていって。その時期には、日本のアンダーグラウンド(シーン)が、東京、大阪等、大都市では起こっていたわけじゃないですか。その頃はまだDOLLも全国流通じゃなかったから、うちの田舎にはなくて。でもパンクに興味を持っていれば、ちょっとずつだけど色々と知っていけるような状況で、『GREAT　PUNK　HITS』や、VAPからDISCHARGEとかCHAOS UKとかが国内盤でリリースされて、普通のレコード店で買えるようになっていったので、そういうのは手に入れやすかった。家が新潟市内じゃなかったんで、市内ならもっと色々あったんだろうけど」

南「僕はパンクは遅くて、高校のときにはメタルでしたね(笑)。高校の友達がLAUGH IN'NOSEのカヴァーとかやってて、それから好きになって」

■話しは変わりますが、BASEっていうこの屋号は?

飯嶋「さっき言った、店を始めるまでの1年間に考えて。BASEっていうのは2つの意味があって、"基地"と"基本"っていう。最初は看板に基地って書こうと思ったんだけど、"墓"に見えそうだったんで止めたんですよ(笑)。

"基地"っていうのは、色んなこと、例えばレコードを作るとか、流通させる、レコードを売る、人と人とが出会う場所でありたいという思いで。始めた数年間は結構な数のレーベルのレコード製作代行をやっていたんですよ。20～30タイトルくらい?お金はとらずに、お店をやっているんで現物で10枚とかもらって。当時は外国とやりとりをしたことがな



いっていう人が多かったんで、俺はレーベル(MANGROVE LABEL)やっていたからできたというのもあって。ただ、取り引きが増えるとトラブルも増えるんですよ、対日本(レーベル)ではなく、対(海外の)プレス会社との。それが結構続いてきたんで、厳しい感じになっていって…。日本にも代理店が増えてきたしね。

流通もやっていたんですけど、どんどん景気が悪くなっちゃって、昔は10枚注文があったところが、1枚になったりしてきて、それで、少ない数だと送れないよね。バンドがうちにレコードを持ってきて、発売日前に他の店にも渡さないといけないんだけど、1枚の注文だと送れない。そういう状況になってきたから止めたんだよね。うちには(流通を頼まれたレコードが)あるけど、他の店には置いてないという状況は良くないので。あと、昔はレコード屋さんて、バンドとバンド、お客さんとバンドの出会いの場でもあったりしたんだけど、最近は足を運ぶ人がどんどん減ってきているので(苦笑)、そういう意味でのレコード屋の役割っていうのはあんまりなくなってきているのかなって感じるけど。それと、パンクより遡ったところにも良い音楽が色々あるから、そういう音楽も揃えていきたい、という意味での"基本"。

昔はJAMES BROWNのコーナーとかあったんですよ。KRAFTWERKとか。でも全然売れなくて(笑)、全部俺が自分で買って。そこはやっぱりハードルが高かった。DAVID BOWIEとかT.REX、ポピュラーな古いやつも置いておきたかったんだけど、そういうのは他でも簡単に手に入れられるので、うちではだめだったね。でもMC5/STOOGESみたいなプロト・パンク、"パンク・ロック以前のパンク・ロック"のバンドの再発とか、復刻音源は置くようにしていますね。でも、最初の理想はあったけど、なかなかパーフェクトにはできなかったかな。やり続けたところもあったけど、時代の流れもあって、しりすぼみになった部分もあるね」

■ここ10年くらい"不景気"という声しか聞こえて来ないですが…、レコード屋さんを取り巻く状況について。BOYの大倉さんは、"永遠の下り坂"って言ってましたが。

飯嶋「それはそうかも。そうあってほしくはないけど、そうかも(苦笑)」

南「買い方と売り方が変わりましたよね。ネットがメインになってきちゃったんで、お店に来て"何かいいのないかな?"って探すのはもうなくなりましたよね、それが一番でかいかな。家にいながら入荷状況が分かりますからね。どこかで言ったけど、"ジャケ買い"ってもう死語ですよね(笑)」

■僕はこの間、VIDEO DISEASEが出したFRANCIS HAROLD AND THE HOLOGRAMSをジャケ買いしましたよ(笑)。

飯嶋「例えば、"買って自分の好きな音/ジャンルと違ってて、失敗したな"と思っても、買ったからには何回も聴くでしょ。次の日に聴いたら、"ちょっといいな"って感じ方が変わってきたり。そうすると自分が好きだっていうジャンル、音以外にも許容範囲が広がっていくと思う。俺らの世代はそういう人が多かったんじゃないかな?

試聴もパソコンで簡単に聴けるけど、ちゃんとしたスピーカーに繋がないで、シャカシャカした音で聴いている人も多いだろうから、そうするとその曲の本当の音の姿も分かりづらいだろうし。脇道への誘惑みたいなのがなくなってきちゃったのかなとは思う。

でも、入荷情報をサイトで見て、欲しいと思った物が店に来た時点で売り切れてたりするから、"そりゃ店に来る前にネットから注文するよな〜"とは思いますけどね。それと限定モノだけじゃなくて、普通にあるものにも、もっともっと興味を持ってもらえたら良いなと思ってます。

もう音楽産業はどういう状況になっていて、普通の人は音楽をどう楽しんでいるんだろうって思いますよ。昔は買わないと聴けない時代だったから、分かりやすかったじゃないですか?今は"CDの売り上げが下がっている"っていうけど、音楽を聴いている人はたくさんいるわけで、"どうなっているんだろう?"って」

■実際お店に来ているにも関わらず、そのお店のHPを携帯で見ながら買い物するお客さんって本当にいます?

南「いますいます。探せなかったりするみたいで、(携帯に商品を表示して)"これありますか?"って。仕事が追いつかなくて店頭にまだ出せていないものもあったりしますし」

飯嶋「若い子は駆使しているよね。多分だけど、"こういうのが好き"っていうのは突き詰めているっぽいんだよ。すごく詳しい。ただ、それは一点に対してのみで、ネットでの突き詰め方だと横に広がっていかないというような気がすることも。もう店にいると"若い人は音楽やパンクに興味があるのかな?ないのかな?"って思っちゃうけど、GREEN DAYやRANCIDが来日するとアリーナ級が満員になるらしいじゃないですか。ああいうのには興味がある人はいるけど、うちみたいな専門店に足を運ぶわけではないのかなと。そこがどうなっているんだろうって日々、考えているかな。RANCIDとかの新譜を入れてもうちでは売れないけど、大手のチェーン店では売れているんだろうから、新しくこういう音楽を聴く人にとってはここは深すぎて、大手チェーン店で得られるもので満足してしまう状況なのかな、とか」

■話題を変えて、"去年これは売れたな"っていうと?

飯嶋「それはZOUOでしょう、飛び抜けていたよね。現行のバンドだと、ISTERISMOの編集盤かな。でも現行バンドのリリースとなると突出したのがないんだよね、何かある?」

南「うーん。あ、DORAIDは出れば売れますね」

■HPにアップした途端に注文が殺到してっていうのは?

飯嶋「それは限定で枚数が少なくて、うちにも10枚しか入らないとか。だから、それは売れているかというと、ただ単に枚数が少ないだけで」

■じゃあオススメの音源は?

飯嶋「俺はSECRET PROSTITUTESってアメリカのパンク・バンド。このバンドも少な

い枚数でリリースしていて、すぐ売り切れてなかなか手に入らないバンドなんだけど、シングルとかをまとめてCDで再発していて」

南「日本なら、最近だとSUSPICIOUS BEASTSかな。THREE MINUTE MOVIEもカッコイイし、海外だとMARVELOUS DARLINGSやTHE CRYも注目ですね」

飯嶋「ハードコアだと、個人的にはスペインのSUDORとか。初期衝動を濃縮したような。あとEL ZINEでMOONLESSが表紙になったりすると、(MOONLESSの音源に対する)問い合わせがすごいあったり。だから情報源不足になっているのかも。レコード屋さんもバンドを紹介しているけど、やっぱり雑誌で取り上げられたバンドに興味を持つ人が多いような気がする」

南「情報が溢れている分、何でも手に入るけど、何にも手に入らないような状況というか。買う方も分からないような状況になっているのかもしれない。本だとバンドがピックアップされて出ているじゃないですか。ネットの情報だと、どんどん出てくるから通り過ぎちゃって」

飯嶋「雑誌で一つのバンドの特集、インタヴューがあると、ポッとそのバンドが出てくる(目立つ)じゃない。それで、"このバンドを聴いてみたい"とか、そのインタヴュー(本文)に出てきたバンド名が気になって、"聴いてみたい"ってなって。ネットだと、うちでもピックアップとかするけど、ある意味平坦じゃないですか。みんな同じような枠で紹介されているから、選びづらいのかもしれない」

■なるほど。

飯嶋「この10年で突出した外国のバンドって、TRAGEDYが最後だったと思うんですよ。もちろんLEBENDEN TOTENとか格好いいバンドはいっぱいいるけど、売れた記憶だとTRAGEDYが一番すごかった、現行の今やっているバンドだと。記憶だから、正確じゃないかもしれないけど。THE ASSASSINATORSも盛り上がったなって思ったけど、ライヴに行ったら人が思っていたより少なくて"エッ!?"と思ったり」

南「音源の売り上げとライヴの動員が一致していないですよね」

飯嶋「TRAGEDYの初来日って、動員もいっぱいでそれは比例していたけど」

■TRAGEDYだと幅広いリスナー層を得ていたんじゃないですかね。

飯嶋「あ〜、それはそうだね」

■BASEのHPを見たら映画『BLOODIED BUT UNBOWED』の配給をされるそうですが。(渋谷の)シアターNで上映で。この配給はどういう縁で?

飯嶋「バンクーバーのD.O.A.の来日を2001年にやって、そのあとにPOINTED STICKS、MODERNETTS、DISHRAGSとかの日本でのライヴをオーガナイズしたんだけど、元々あっちでドキュメンタリーが作られていて去年完成したのかな。それで、そのへんのバンドのメンバーから、"送るから見てみろ"と。で、見てみたらすごい面白くて、"日本で上映したい"って話しがあったんで、"協力するよ"っていう流れ」

■ドキュメンタリーというと、当時の映像を使ったような?

飯嶋「そう、『AMERICAN HARDCORE』みたいな、ああいう感じ。色んな人の証言と当時の映像を織り交ぜて、バンクーバーという都市のパンクの流れを紹介してて。すごい面白い映画ですよ」

■チケットも前売りだと安いですよね、1300円て。

飯嶋「映画のやり方のことは俺は分からないから、シアターNの意向で(笑)。けど、音楽も映画も厳しい、俺らの世代に一番影響を与えていた文化が厳しいって、インタヴューの主旨とは外れるけどさ(笑)、"何が娯楽なんだろう?"って」

■生活するのに手一杯なんですかね。

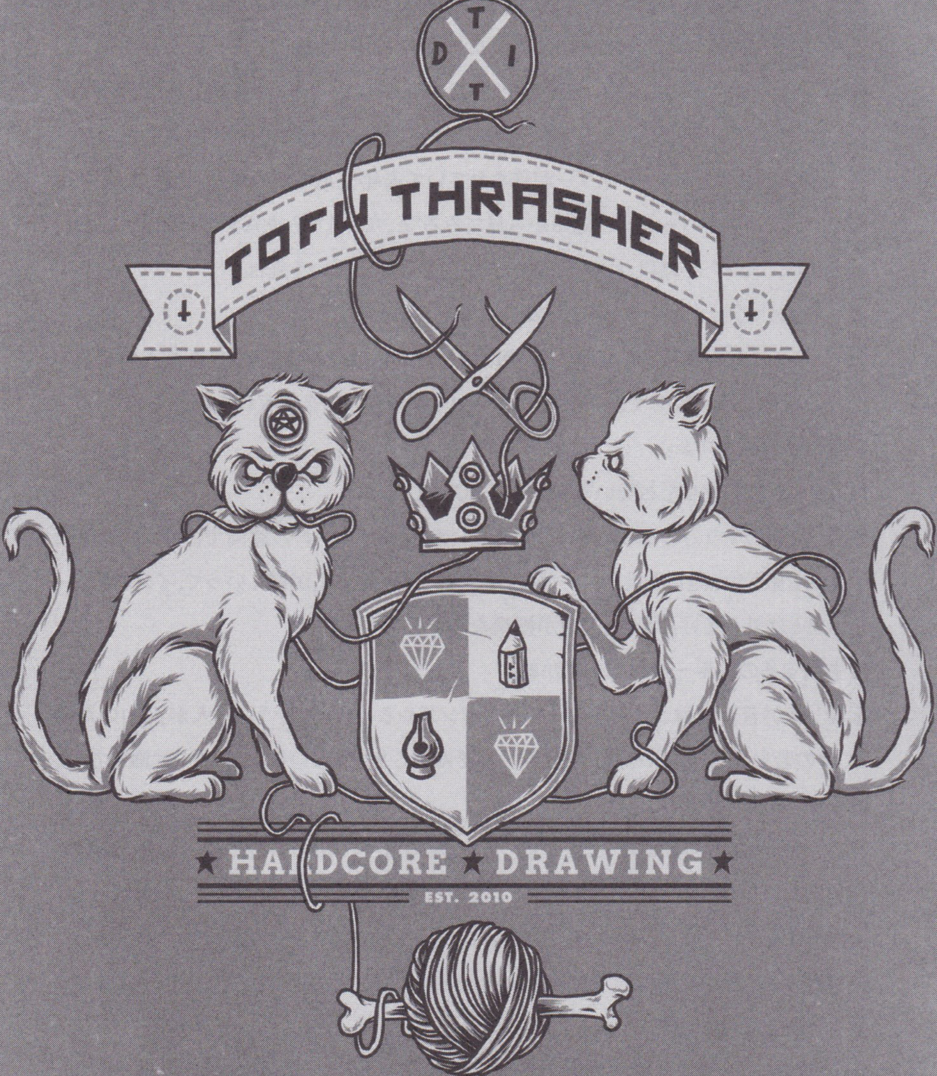
飯嶋「俺が若い頃は、"バイトやりながらバンドやるぜ!"ってそういう人が沢山いたけど、今の若い子は、聞いた話しだけど、もうそんなことできないらしい。まず就職して、就職してからバンドをやるらしい。

昔は"30歳までなら好きなことをやれ"ってなんて言う人もいたけど、今の若い子は、先が見通しづらいから"しっかりしないと。お金を貯めないと"ってなっているみたい。だからタダで済ませられるものは、そうするんじゃないかな。ニュースを見ても、"年金が〜、失業率が〜"とか、暗いニュースしかない。だからもっと世の中が良くなってくれないと、下り坂が止まらない(笑)」

南「お店的には、映画が今までやったことのないことなので、成功するといいかなって」

飯嶋「あとは、踏ん張り続けるしかない(笑)」

TOKYO RECORD SHOP LONG INTERVIEWS【NAT RECORDS】は P109 へと続きます



チェコ・ハードコア・イラストレーター
トウフ・スラッシャー

vol.10でインタヴューしたベルリン在住ポーランド人のKaskaさんみたいな、所謂"典型的"ではないパンクの絵を描くアーティストは世界にもっといないものかしらん、と色んなコネクションを駆使して探していたのですが、"日本であまり知られていない"&"一定以上の技術を有している"という条件を加味すると、これがなかなか見つからなかったのです(正直、中学生の落書きレベルの人はたくさんいますが…)。
諦めかけていたある日、チェコの友人から"お前が好きなのはこういうのか?"と教えてもらったのが、当地のハードコア・イラストレーターのTOFU THRASHERだったのです。早速チェックした瞬間に、"そうそう、こういう作風だよ!"と僕が小躍りしたのは言うまでもありません。
作品の数々とあわせて、インタヴューをお楽しみ下さい!

■どんな子供でしたか?初めて聴いたパンク/ハードコア・バンドって何でしたか?チェコのバンド?それとも、アメリカかイギリスのでしょうか?
「ヘイ、Kenji!僕が子供の頃なんて実に平和なものだったよ。初めて聴いたバンドってのは覚えていないな。けどどうしようもない類いのバンドだったと思うよ。思い出すだけの価値があるバンドは、OI POLLOIだよ、『Fuaim Catha』ってアルバム。初めて行ったパンクのコンサートで買ったんだ。だから初めてはイギリスのバンドだね」
■いつから絵を描いているのですか?どういうキッカケで?
「小学生の時から絵を描いているんだ。けどその時なんて素人だからね。初等教育を受けた後、僕は電気技師になろうと勉強していたんだけど、学び終えたら全然違うことがやりたくなっちゃったんだ。それで美術系の高校に行ってまた勉強を始めた。そこでグラフィック・デザインとイラストレーションが僕の一番興味のあることなんだって分かったんだよ」
■バンドはやっていますか?どのようにしてパンク・シーンと関わるようになったのでしょうか?
「もちろんやっているよ。RAPSÖDでギターを弾いているんだ。少しスラッシュ/パンクっぽいかな。15歳くらいの時から音楽を作るのに興味を持つようになってね。ギグも何回か企画したことがあるんだけど、今やここでギグに訪れるような仲間って、極僅か

しかいないんだ。それでもうギグの企画はやってない」

■TOFU THRASHERという名前ですが、豆腐が好きなのですか?

「もちろん。豆腐は僕の食事には欠かせないよ。ちょっとバカみたいな名前だよね、けどみんなその名前で僕のことを知っているんだ」

■手が込んでいてオリジナリティを感じるから、僕はあなたの作品が好きです。実際、僕は典型的なクラストっぽい絵って好きじゃないんですよ。あなたが絵を描く時に留意していることは何ですか?絵のアイデアはどうやって得ています?

「評価してくれてありがとう。僕もモノクロのクラスト・パンク・スタイルの絵って好きじゃないんだ。自分の好きな物と組み合わせるのが好きでさ、例えばコミックだったり、スケートボードとかね。シンプルに様式化しようとしているけど、同時に細かいところまで気を配っている。写真は使わないんだ。色彩はとても大切だね。ポスターなんかは通りでも目につかないとならないし、レコードのジャケットはそれ自身に雰囲気と物語性を持たせようとしているんだ。いろんなことからインスピレーションを得ているよ。映画だろ、本、小説、自然。時にバンドがどうデザインしたいかヴィジョンを持っていることがあるから、そういう場合は自分のスタイルで僕は調整するだけだね」

■パンクとは関係のない絵を描くことはありますか?デザインが本業?

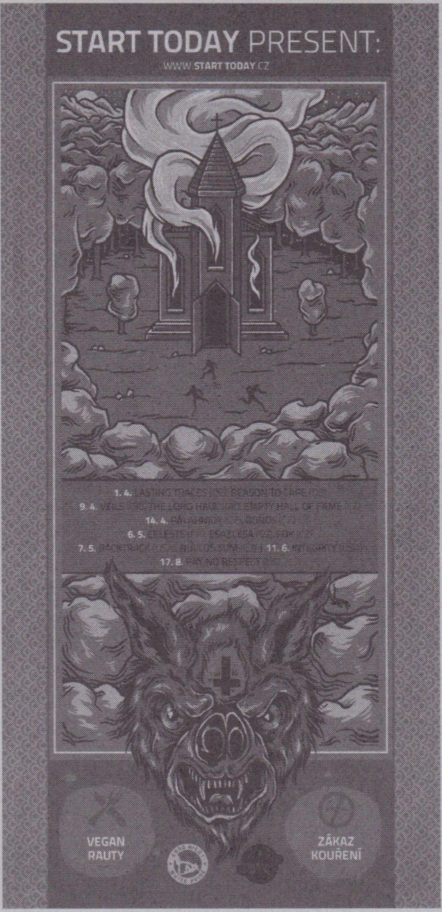
「TOFU THRASHERの名前で他のデザインの仕事もやっているよ。例えばスケートボード・ファッション・メーカーのデザインもいくつかやっていたり。将来的にはTOFU THRASHERを本業にしたいと思っている。他のグラフィック・デザイナーみたいに今、僕は広告代理店で働いているから、本業にするのはかなり難しいだろうけどさ」

■最初に手で描いてから、パソコン(イラストレーターやフォトショップ)で加工していますか?工程についても聞かせて下さい。

「君が言う通りにやっていたんだけど、時間がかかっちゃうから鉛筆や紙はもう使わずに、パソコンでフォトショップを使って描いているんだ。時にはイラストレーターや(レイアウトや印刷する際に)インデザインも使うよ。まぁ、それぞれプロジェクトによるんだけどね。僕はやっぱり"手作業"のリノリウム版画やスクリーン・プリントが好きだから、またやりたいんだけどさ」

■では、好きなアーティストを挙げてもらえますか?







TOFU THRASHER
FROM CZECH REPUBLIC

「現在の人ならDrew MillwardとDan Mumfordかな。彼らは自分自身のスタイルを持っているからね。今では似たような作品が溢れているけど、彼らは突出している。多くの色んなイラストレーターやグラフィック・デザイナーが好きだよ、だけど僕にとって大切なのは、この名前の他には挙げられないな」

■好きなバンドは?

「チェコのバンドならKRITICKÁ SITUACE、FPB、MOTHER、LAHARだね。チェコ以外ならAMEBIX、BLACK SABBATH、DISFEAR、ICUTS、BONES BRIGADE、KYLESA、BARONESS、DOOMRIDERS、BASTARD PRIEST、NO MEANS NO、AGENT ORANGEかな。もっともっと色々あるし、挙げるべきバンドをたくさん忘れちゃっているね」

■地元のハードコア・パンク・シーンについても聞かせて下さい。僕はプラハとブルノしか知らないのですが、チェコのどこに住んでいるのですか?

「僕はイフラヴァ出身でね、小さな町さ。プラハとブルノの丁度中間くらいに位置している。イフラヴァとブルノには多くの友達が暮らしている。地元のバンドでオススメは、キラー・グラインドのPRŮMYSLOVÁ SMRT。残念ながら、他のお気に入りのバンド(HUMAN STEAK、MESSERSCHMITT 109…)は活動していなくてね」

■今後の予定は?

「いくつか計画はあるんだけど、今は先々について話したくはないんだ。今やっていることにベストを尽くしたい。RAPSÖDの新しい作品も出したいし、できる限り絵も描いていきたい。今、興味深い仕事の依頼もたくさんもらっていて、やるべきことがありすぎるのに時間が全然ないから、時間をやりくりできるか心配しているんだ」

■最後に読者にメッセージをお願いします。

「ファンジンやレコードを買ってくれたり、ギグを楽しんでくれよ。いい時間を過ごそう!そしてKenji、君のファンジンに幸あれ。インタヴューしてくれてありがとう。あと英語がヘタクソでごめん!楽しんでいこうぜ!」


ANGERS
CURSE


No One is Free
When others are opressed


SROUBY


Dead Reprise
the unveiling



REDFLESH

vol.4にてSEXDROMEをインタヴューした際、僕はSEXDROMEとICE AGEだけが突出してコペンハーゲンでブッ飛んでいるのかと思ったのですが、どうも調べていくと彼の地には"新世代"の恐るべき糞ガキ共による"New Way Of Danish Fuck You"(NWODFY)という、名前からして酷いシーンがあるようだ、ということを学びました。
そして、そのシーンの急先鋒こそが「Raw War」7"をVideo Disease RecordsからリリースしているREDFLESHだというではありませんか!僕は、"こりゃインタヴューだ!NWODFY大特集だ!"と意気込んだわけですが、事実はそう都合良く進むわけもなく…。ともあれREDFLESHの他に、PAGAN YOUTHでも活動中のLukasが取材に応えてくれました。NWODFYが虚構でも、こいつらがヤバイのは、れっきとした事実です!

■LukasとJoachimはPAGAN YOUTHでも活動していますが、どうして別に新しいバンド、REDFLESHを始動させたのですか?

「よお、調子はどうだい!全ては日曜の午後に、俺とMarcusが二日酔いの中でD-Beat

パンクをジャムっていたのが始まりだ。そして一時間ほど経ったらJoachimが来てヴォーカルをしだしたってわけ。
ICEAGEをやっている友人が俺たちのリハーサル音源を聴いて、彼らのリリース・パーティに出てくれって頼んできたんだよ。そっから俺たちは最初のテープをショーのために作ることにした。ハッキリさせよう。PAGAN YOUTHとREDFLESHは同じメンバーを抱えているが、共通していることは何もない。2つの異なったものだ。とあるバンドが、別途新しいバンドを始めたってものじゃない」

■「Raw War」は素晴らしい作品ですが、アメリカのVideo Disease Recordsからリリースしたのはどうしてでしょうか?

「ありがとよ!VDRのBrandenが共通の友人を通して俺らのテープを入手したんだ。そして彼は、7"を自分のレーベルから出したくないかと尋ねてきた。俺らは彼のリリースを気に入っていたから、彼のレーベルから7"を出す機会を得たのは嬉しかったね!」

■どういうレコーディングをして、あんなにロウなサウンドを作り上げたんです?

「数時間ほどかけて、古いリハーサル・スペースで全部自分たちで録音した。友人のMetal AndreasからTeac A-3440という古いオープン・リール・テープを借りてきて、それからヴォーカルとドラム、あとギターに2本マイクを立てただけだ。
そして友人のThunder Thorと一緒に、4トラックで滅茶苦茶ラウドに全部ミックスして、これまた友人のViktor Ottosonがマスターをしてくれた。けどな、ロウなのはレコーディングじゃない、バンドがロウなんだ!」

■ギターやアンプといった機材はどんなのを使っていますか?

「俺たちが持っているのを使っただけだ」

■実際、どうやって曲作りをしていますか?アイデアをメンバー全員で持ち寄るのですか?

「あぁ、そうだ。Marcusがギター・パートを用意してきてさ、俺がドラムを叩いて、それから一緒にフィットするように形作っていく。そんなに難しいことじゃない。大抵は俺とJoachimが、納得するところまでディストーションをあげてくれってMarcusに頼むんだ」

■歌詞ですが、Lukasが書いていますか?"BC43"というのは何を意味しています?

「俺らみんなで書いているよ。多分、一人がテーマに関するアイデアを持ってきて、他のやつらが書いていったりだね。Joachimが彼自身について書いた歌詞もいくつかあるな。"BC43"というのは、第二次大戦中にナチスに対抗して戦った戦士たちのことだよ。BC43はデンマークに派遣された、ナチスに抵抗するイギリス陸軍の特殊部隊ブリティッシュ・コマンド43のことで、1943という数字は彼らが結成された年を意味しているんだ」

■"Punks Undead"も面白い歌詞ですね。SEXDROMEのヴォーカルはライヴで客と喧嘩したりしていますが、暴力とパンクの関係性についてどう考えていますか?

「パンクと暴力は密接な関係にある。どちらも"攻撃"だ。攻撃的なエネルギーで音楽が充ち満ちていれば、オーディエンスだってもちろん同じように攻撃的になるってもんだろ。それは時にして喧嘩か何かに発展することもある…。それが良いことか悪いことかなんて考える必要はないと思うけどね、やりたいようにやりゃいいんだよ。俺らには関係ない。ただな、お前がパンクのショーを企画しているなら警察なんか呼ぶんじゃねぇよ」

■ところで古いデンマークのバンドは好きですか?BRATSとかENOLA GAY、RAZOR BLADESとか。

「デンマークとコペンハーゲンの古いロウなバンドからは確かに影響されているよ。俺らの街のパンクの基礎、つまりはカルチャーの一端を築いてくれたバンドな。他にグレートな昔のバンドを挙げるなら、ELECTRIC DEADS、WAR OF DESTRUCTION(30年以上活動しているぜ!)にKALASHNIKOVだ」

■では、2000年代のデンマークのバンド、GORILLA ANGREB、NO HOPE FOR THE KIDSやTHE ASSASSINATORSなどはどうです?

「俺らみんな若い頃はGORILLA ANGREBとNO HOPE FOR THE KIDSはメッチャ聴いてたぜ!今でも好きだ。でもTHE ASSASSINATORSなんかが好きだったやつはいないな。今でもいないぜ。ありゃポップ・ミュージックだ。クソだね。けどDEATH TOKENにDOGMATIST、DEAD INSTRUMENTは格好良いバンドだ。もっと他にも良いバンドはいるけどな」

■僕はすごく"New Way Of Danish Fuck You"シーンに興味があるのですが、紹介してもらえないでしょうか?ほとんどのメンバーがティーンエイジャーというのは本

当ですか?

「そんなシーンはないし、俺らの多くは残念ながらもうティーンエイジャーじゃねぇよ。NWODFYってのはインターネット上でのジョークとして始まって、アメリカ人が取り上げたんだ。けど、そんな呼び名も決めちゃいなかったんだけどな」

■では、コペンハーゲンではどういう暮らしをしていますか?趣味は何です?仕事は?

「誰も働いてないよ。Marcusは勉強している。俺ら全員、音楽を作って、ちょっとしたバイトをして、ビールをたっぷり飲んでは、つるんでいるだけさ。ちょうど今は夏だから、地元の共同墓地で遊んでいたり、近所の港で沐浴しているよ」

■今後の予定や目標は?

「予定も目標もないな。たくさんライヴして、レコーディングして、リリースしたいだけさ。そしてツアーに出てはD-Beatでメチャクチャやって、俺ら自身をブッ壊す。ノー・フューチャーが俺らの信仰さ!」

■最後に読者にメッセージを。どうもありがとう!

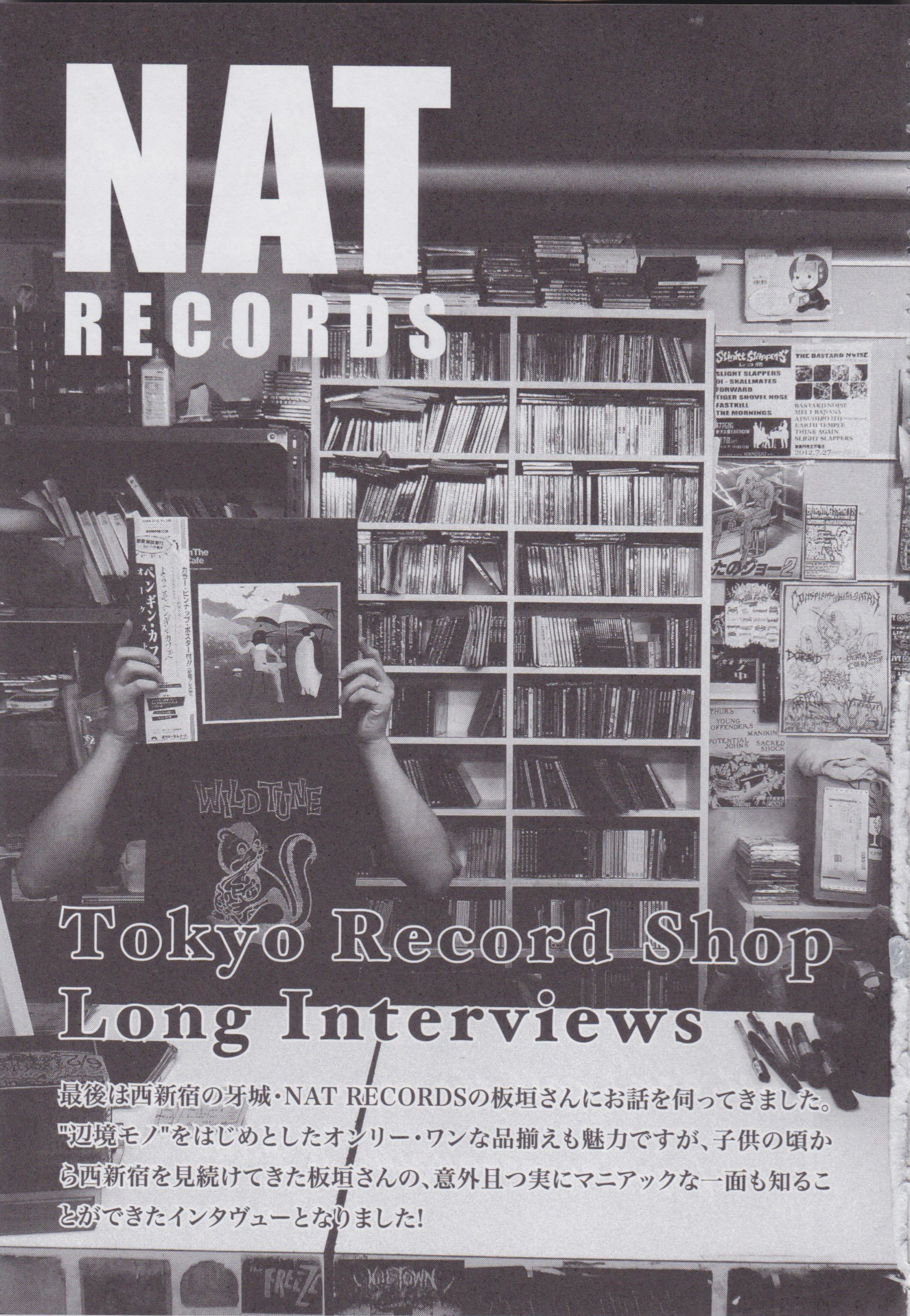
「ヘイ、ジャパン!調子はどうだ!?元気か?どうか日本へのツアーをブッキングしてくれよ。マジでそっちに行ってプレイしたいんだ!あと、そっちのグレートなDisパンク・バンドはデンマークに来てくれよ。俺らはもっと日本式のパンクを必要としている!もし誰かブラジルに来月行くなら、RED FLESHのMarcusと会ってやってくれ。あいつは今年いっぱいをブラジルで過ごすんだ!インタヴューしてくれてKenjiありがとう!戦争がやってくるぜ!」



Just don't call the cops

if you're arranging a punk show

NAT RECORDS



Tokyo Record Shop Long Interviews

最後は西新宿の牙城・NAT RECORDSの板垣さんにお話を伺ってきました。"辺境モノ"をはじめとしたオンリー・ワンな品揃えも魅力ですが、子供の頃から西新宿を見続けてきた板垣さんの、意外且つ実にマニアックな一面も知ることができたインタヴューとなりました!

■どのレコード屋さんからも、"お客さんが店に来ない"という話しを聞きますが。

「どうしても、飛び込みでお店に入って来て、そのまま買っていくようなお客さんは減ってきましたね」

■あぁ、フラっと来て。

「そういうフラッと来るお客さんも、"よく見る"人ですよね。なので、なんといいますか…」

■何か明るい話題はないですか?

「そうですね、いいリリースはどの時代もあると思うんですけどね。"以前に較べて、いいバンドが少ない"ということはないですね」

■それは確かに、そうですね。

「バンドの質が落ちたからどうこうではないんですよね。ただリリース量が、バンドが多すぎるというのがありますよね(笑)。仕入れもやっぱり、アレもコレもと全部取るわけにはいかないので、そういうところで悩む部分はあります。いいリリースがあって、どれを取るか悩む」

■なるほど。

「僕らはもう何でもかんでも置くというのは、やらなくなっていますね。そういうスタンスはないです」

■まかないきれないですよね。いくら委託でも。

「そうですね。それで、なかなか連絡が取れなかったりすると、バンドにとってもうちにとってもちょっとアレですよね」

■ところでお店のブログを拝見したら、スカのイヴェント『DOWN BEAT RULER』のことが書かれていましたが、スカもお好きなんですか?

「こういう店で働いているとよく意外に思われるんですが、スカとかはすごく好きですね。古いやつは元々好きで」

■オーセンティックなもの?

「そうですね」

■へー、ビックリしました。NATで働く前から好きだったんですか?

「NATで働き出したのがハタチ過ぎぐらいだったので、丁度働いてすぐくらいのときが一番買っていたのかな。英国に中古買いつけに初めて行った時も、自分用にオリジナ

ルのシングル200枚くらい買ったり」

■そもそもNATにはどういった経緯で?

「一応、大学を出ているんですけど、NATが出来立ての時から客として通っていたんですよね。それでスタッフ募集をしていたので。大学を卒業して、5月くらいだったかな、当時土方のバイトをしていて、その荷物を持ったままレコードを買いに寄ったらスタッフ募集をしていたので、"あぁ、スタッフ募集しているならやるかな〜"と、そんなアバウトな感じで、もう10何年だろう(笑)、20年近くになりますね。その頃に店長をやっていたのが神野ですね。神野が1年か半年前にNATに入って働いていたんです。それで僕が入って一週間後にカトマン(DOTLINECIRCLE)が入ってきたんです。そういう古い話し(笑)。それで一度神野が辞めて、戻ってきて」

■え、そうなんですか?

「それが、彼が働いて5年くらい経ってからですかね。3年くらい空いたのかな、間が。それで戻ってきてもう一回やることになったんですけど。もうこの事実を知っている人も少なくなってきましたね(笑)。他にもex.BREAKfAST〜EXCLAIM〜BITE等の酒井や、ex.PRIVATE WAYS〜PARACHUTEのMASA 17、PINPRICK PUNISHMENTの岩見君、ACCLAIM collectiveの馳尾君、はるまげ堂/BUTCHER ABCの関根君、ALLIANCE TRAXの武田とかも働いていた時期も…」

■板垣さんはNAT一筋ですよね?

「一応、某レコード店は受けたことがあって、受かったんですけど、(勤務)初日にちょっとトラブルがありまして(笑)、働かなかったんですけどね」

■初日にですか(笑)。

「そのときはまだ20歳くらいでしたかね。まだ学生のバイトで、初日の前の日にライヴで警察沙汰になって。LENINGRAD COWBOYSっていうフィンランドの、とんがり頭でアキ・カウリスマキ監督の映画のバンド(『レニングラード・カウボーイズ・ゴー・アメリカ』という映画に主演したバンド)がクラブ・チッタとかでライヴをやったときに、暴れてトラブルになって(笑)。90年代初頭の話しです(笑)」

■そんなことがあったんですか(笑)。板垣さん、パンクはどこから入ったんですか?

「ラジオじゃないですかね。初めて聴いたのがSEX PISTOLSだったと思います。街のレ

コード屋がまだあった時代だったので、そこで『NEVER MIND』を買って」

■ものすごく正統派な入り方ですね。

「それでやっぱり御三家を聴いて」

■生まれは東京ですか?

「東京の世田谷区です」

■おお、都会っ子ですね。

「だからレコードを買うのにも恵まれていて。僕が中学生のとき、VINYLが丁度そっち(NATの道路を挟んだ向かい側)に移ったのかな。その前は墓場のほう(新宿駅寄り)のマンションにあったんですよ。それが中学2年か3年のときで。『ROOTS OF PUNK ROCK』(シンコー・ミュージック刊)の本が丁度出たときくらいで、その本に載っているシングルとか気になって、買い出したんですよね。70'sもハードコアもよく分からずに」

■子供のときからこの界隈に来ていたんですね。

「レコード代が惜しくて、強引に自転車で来ていましたよ(笑)。なけなしのお金で」

■どうですか、ずっと西新宿を子供の頃から見てこられて。

「やっぱりLOFTがなくなってから(99年に西新宿から歌舞伎町に移転)随分状況が変わったような気がしますね。その頃はライヴも盛り上がっていたと思いますし、何のインフォもなく棚にドカッと(レコードを)置けば、そのままドカッと売れる時代でしたから」

■西新宿がある意味、メッカでしたよね。

「そうですね、今となってはもう何軒かしかないですからね」

■客層の変化はどうです?

「昔からのお客さんは、そのまま今でも来てくれている人が結構多いんですけど、年齢層が高いですね(笑)。どんどん上がってきていると思います」

■中高生みたいなのは?

「まぁ、10代の人とかたまに来ますけど、すぐに覚えられるくらいです。前ならお客さんの顔とか覚えていられなかったですけど、今なら、"あぁ、あの子はこの前も来たな"とか。高齢化が問題じゃないですかね。レコード屋さんで働いている人も、うちも、BOYさんもBASEさんとかも、若い店員さんてそんなにいないですよね。みんな40歳前後じゃないですか。しょうがないのかもしれないですけど、高齢化が(笑)」

■30代で若手ですからね(笑)。

「そうですね、僕ももうすぐ40歳ですから」

■ネットでの販売がメインになって、作業的にはどうですか?

「いやー、作業は増えましたね。前だったら、レーベルのリストがFAXで送られてきて、それに数(注文枚数)を入れてFAX戻したりとか、そういうのだったのが、今は細かいやりとりができるようになったのは利点ですけど。店頭にレコードを出してカード書いて、同じようなことをパソコンでもやらないといけないので、二度手間ではあります。その分、パソコンが動かなくなるとパニックですね(笑)。なかった時代もよかったなとは思いますけど、HPを見てその場で注文するのは、お客さんの立場からしたら当たり前ですしね。ただ、店に足を運んで来てくれるお客さんに、何かできればなとは思っています」

■商品説明も丁寧ですよね。

「いやいや(笑)。でもそういうところで、僕らのカラーが分かってもらえるとありがたいです」

■いわゆる辺境モノも入荷されていたり。

「自分たちが興味あるものだったり、あとやっぱり他であんまり売ってなさそうなものを、と。辺境好きっていますからね」

■ああいう音源は一体どこから見つけてくるんですか?

「もうありとあらゆる情報網ですね(笑)。ネットだけに頼る、というのはしないようにしています」

■昨今のレコード屋を取り巻く現状に対して、"永遠の下り坂"とBOYの大倉さんは言っていたんですが。

「うーん、そうですね、下り坂(笑)。前が良すぎたというのも、あるかもしれないですね。変な話し、そこまで悲観的ではないです。自分たちがやれることをやれればいいかなと思います。まぁ、何ていうか、金がめちゃくちゃ儲かる仕事ではないので、その辺は皆さん分かっているでしょうし(笑)。それなりに道はあるかなと思います。それよりも大手のレコード店が、店舗の形をどんどん変えて、ロックやパンクとは全然関係ないような形になってきていたりしてて、大型店舗が考えることと、僕らやBOYさん、BASEさんが考えているようなショップ像は全然違うでしょうから、僕らでもやれるところは全然あるかと思います」

■"何でもある系"のレコード店のほうが、逆に厳しいでしょうね。

「そうですよね。ある程度、僕らはもう絞っているわけだし、その中でいいものを供給できたらな、と。BOYさんにしかできないこと、BASEさんにしか売れないことだったり、僕らの色だったりがあればいいと思います。ですから、他店さんで激烈プッシュしていてウチのカラーでないようなモノのオーダーは控えめにしていたり。一時期レコード屋がたくさんできたときに、どこもかしこも同じようなレコードばかり売っている状況とは、違ってきていると思います。自分たちがプッシュしているものが明確にないと、そういうレコード屋じゃないと、残ってないんじゃないですか。だから、そう考えれば(現状も)いいのかなって」

■なるほど。話しは変わって、神野さんが辞められたのは皆さんビックリだと思うのですが。

「そうですね、僕もビックリです(笑)」

■何か相談とか?

「長年2人で働いていたので、話しはしましたけど、まぁ、前途だったり、レコード屋さんの限界を感じた、という話しはしました」

■神野さんが辞めたのもあって、お店のレイアウトを変えたんですか?

「それもありますね、NATを僕一人では完全にはできないので、20年くらい色んなレコード屋を流れ歩いたカリベってのがWAREHOUSEから入って。パンクも結構分かるやつなので、一緒にやれば全然できるねっていう話しで。それで、(同居しているレコード店のWAREHOUSEとの仕切りを)外したほうが見栄えもいいんじゃないかなって、そんだけです(笑)」

■入荷にも変化が。

「神野がこだわってやっていたことだけには、こだわらずに、やっぱり今のスタッフでできる面白いことを追求しようと。彼と同じことは絶対できないので。それで、"アレ?"と思うお客さんもいるかもしれないですが、まぁ、自分たちで、(新しいものを)探していかないと。それが結構今、いいほうに作用しているかなと思います」

■では、去年、これが一番売れたなっていうのは?

「パンクのリイシューになっちゃうんですけど、CRITICAL MASSの『SILVER SCREE

N』。SEX PISTOLSタイプのフロリダ初のパンク・バンドといわれていたバンドで、その正規再発が相当売れましたね。今も売り切れて在庫がないです」

■アナログとCDだと、アナログのほうが売れますか?

「今はどうなんだろうな。本当、月によって違ってきて、リリースによるところが大きいと思います。でも、アナログにこだわっている人というのも、半々なのかな。日本ものを買っている方だと関係なく買っていますね」

■なるほど。ではオススメの音源を。

「これも一昨日くらいに入ってすぐに売り切れちゃったんですけど、CALL OF THE WILDっていうバンドの7"。ハードコアもパンク・ロックもメタルも、今のパンクが好きな人も、昔のパンクが好きな人もイケるような、丁度中間というか、すごく面白いレコードですね。他は、日本のパンク勢も、SLIGHT SLAPPERSの新しいやつとか。真新しいものだとどうしても海外に目が向いちゃうんですけど、NYのパンク、CALL OF THE WILDもそうなんですけど、その周辺とかは結構面白いものが多いのかもしれない。

あとはYOUTH ATTACK周りとかも最近は、ハードコアを色々出しているし。メタルとハードコアのクロスオーヴァーみたいなのも多いですね。なかなか(プレスが)限定過ぎて、手に入れづらいというのもあるんですが」

■YOUTH ATTACKは、以前から推していますよね。

「一応、(YOUTH ATTACK主宰者であるMarkがやっていた)CHARLES BRONSONとかSOCIAL COMAとかもNATから出していますからね(笑)。リイシュー関係もたくさん出ているので、追っかけるので精一杯ですね」

■(最近入荷した)ノルウェーのパンク本(『TRE GREP OG SANNHETEN Norsk Punk 1977 - 1980』と『FRA HARDCORE TIL A-HA Norsk Post Punk 1980 - 1985』)とか、すごいですね。

「書籍とかアート・ブックみたいなのも増えましたよね。内容がいいのも多いし、SUGIさんのとか、ノルウェーのも」

■(取り置き商品の)清算でも苦労されているようですが…。

「なかなかご来店頂けないと、大変です。どこのお店も一緒だと思いますが。一ヶ月で、"こんだけ仕入れてこんだけ利益がないと、もう(新たに)仕入れするのも大変だ"って

なっちゃうので。ひと月の目安を作らないといけないから、長く取り置かれると、ちょっと困りますね…。あと、取り置きされるお客さん自体が確実に増えましたね。以前だと電話で、"コレとコレとコレ。じゃあ、ソレないんだったら、ソッチを送って下さい"っていうザックリした注文が多かったですけど、今は"そのレコードがないんだったら(取り置きで)"って」

■買うのに慎重になっている、と。

「月に一回の広告みたいなのが、入荷の目安だったのが、今やHPを1日3回チェックしないともう売り切れていたりする可能性があるわけじゃないですか。もう、(入荷が)より細かくなって、追っかけるのが大変だっていうお客さんもいますよ。連続してアップするのも、ちょっと考えちゃいますね。難しいところです」

■何店舗ものHPを毎日チェックしている人も多いでしょうし。

「漏れがないかってパトロールして、それでも買えないお客さんがいるわけですから。普通に、週に一回、隔週に一回絶対来てくれるお客さんでも、(欲しいレコードを)買い逃している人っていますから。それで、"あぁ〜、ないんだ…"って言われるとこっちも申し訳なくなりますね」

■せわしなくなっているんですかね。

「圧倒的にリリース量も増えていると思いますし、前なら何百枚と売れるようなリリースなんて月に何回もあったわけないのに、今はボンボン出たり。仕入れるタイミングも考えますね」

■全然関係ないんですが、海外のSF(小説)好きなんですか？

「えぇ、文庫でガッツリ集めるスタイルなんですが(笑)」

■ハヤカワ(早川書房)？

「そうですね(笑)」

■僕は海外のが駄目で…。登場人物の名前が覚えられなくて(苦笑)。板垣さんのオススメは？

「月並みですけど、『ブレードランナー』の原作(『アンドロイドは電気羊の夢を見るか？』)は読んだほうがいいかなって。作者のフィリップ・K・ディックの作品は、何でもオススメしちゃいますね。有名になっている映画でも、"元ネタはこれだな"って結構ありま

すね」

■子供の頃からずっとパンクとSFに?

「そうですね。でも、僕らの世代は『AKIRA』(大友克洋の漫画/映画)とかあったから、動力パイプがついているSFよりも、"若者が荒んだ都市を歩く"みたいなSFが好きって人は多いと思うんですよ。何でもかんでも空を飛んでいるSFとは違いますね(笑)」

■あとは野球もお好きで。

「野球好きです(笑)」

■神野さんはサッカーでしたか。

「いや、彼はスポーツ全般なんでも首を突っ込んでいましたよ。そうですね、野球ずっと好きです。この間も、日ハム戦をドームに見に行ってきて。特に応援しているチームはないんですけど、アホみたいに好きです」

■実際にやっていたんですか?

「やっていたんですけど、今となってはデータが好きです。レコードも、"これが何枚目で、どれがオリジナルで"とかを頭に入れていますけど、野球も"打率が去年何割何分だった"とか、"打順が何番で"とか、"出身校がどこで"とか、そういうのはバカみたいに詳しいですよ(笑)」

■…マニアックですね。

「野球のこともバーっと喋りたいんですけど、なかなか言えなくて(笑)。僕の周りだと野球好きのパンクな人ってあんまりいなくて、付き合いで聞いてくれるくらい。やるのが好きな人はいるんでしょうけど、データが好きって人はあんまりいないのかな。ドラフトの話しとかしたいです(笑)」

■注目している選手は?

「基本ルーキーとか、もう辞めそうな選手とか、一軍二軍の当落線上の選手とか、みんな好きです。一人とかは、もう難しすぎて考えられないです。山路君に"レコードは何が好き?"って聞いているようなものです(笑)」

■野球にもそういう楽しみ方があるんですね～。

「プロ野球チップスのカードを集めて悦に入るのと、レコードを集めるのは重なるし(笑)、似たようなところはありますよね。知りたくなっちゃう、何か面白いものがあった

ら、知りたいし欲しい」

■若い人らはそういう感覚があまりないんですかね。

「モノに固執しないんじゃないですか。"音源であれば何でもいい"とか。CDで持っていても、レコードの7"で出たらどうしても欲しい!っていうのが、分からないのかな。僕らはたぶんにそういうところがあるじゃないですか」

■同じものをたくさん持っている(笑)。

「何なんですかね、あれは(笑)。自分の好きなものを一回でも買ってみたら、違ってくると思いますけどね。レコードで一回買ってみると、そのほうが楽しみが分かりやすいのかなとは思います。レコードの面倒臭さ、出したりしまったり、場所も取るし。 でもそこで、"何でハマる人がこんなにいるんだろう"っていうのが分かれば、面白いと思うんですけどね」

■20年近く働いてきて、印象深い出来事って何かありますか?

「SLIGHT SLAPPERSとか、ファストコアが出てきたときに、棚一杯にシングルを出して、それがすぐに売れる様を見ていたのは、思い出深いですね。僕が入ってすぐくらいかな。あとは言えないことも(笑)」

■1000枚限定っていうのが、"タッタの1000枚?!"っていう時代ですね。

「そうです、今はケタ1つ違いますもんね。"あんなに売れていたのに"っていう頭があるのは、駄目かなと思います。あの頃が異常だっただけで。みんなレコードを買っているのが当たり前の時代だったから、僕らみたいな人にとってのバブルは弾けていなかったのかな。でも、パンクなんてマイノリティの音楽なんですから、今みたいに少なくて当たり前ですよ。って、最近は考えるようになりました」

■最後に、今後の展望とかありましたら。

「ジャンルに関係なく、色んな人が楽しめるレコードを入れたいですね。パンクとハードコアの壁が、あまりないようなバンドもたくさん出てきているように思うので。"いいものはいい"という風潮になっていると思うし、サイケっぽいものでも、ポスト・パンクっぽいのでも。そういう考えですね、僕らは。再発も、ドンドンいいものが出てきて欲しいです。あとは店員に話しかけて欲しいですね。そうすれば、HPにアップする前の商品が奥から出てきたり、色々と教えられるので、得だと思いますよ(笑)」

VIVA HATE

NAPALM DEATH

TEXT:行川和彦

末期DOLL誌の連載"VIVA　HATE"を試しに復活させてみた。その第一弾として登場してもらったのは、"憎しみが湧き上がる"というタイトルのデモ『Hatred Surge』を85年に発表しているNAPALM DEATH。80年代後半のUKハードコア・シーンの一翼を担ったバンドでありグラインド・コアのオリジネイターの一つなわけだが、アナーコ・パンクと邪悪メタルとの奇跡的なブレンドという観点で書いてみた。

NAPALM DEATHはエクストリームな細胞体だ。何度も分裂した80年代に基礎が築かれ、その"細胞核"は2010年代も変わってない。"三つ子の魂百まで"ってやつで、オリジナル・メンバーが87年の時点で不在になろうがヘイト・フィーリングは不変である。

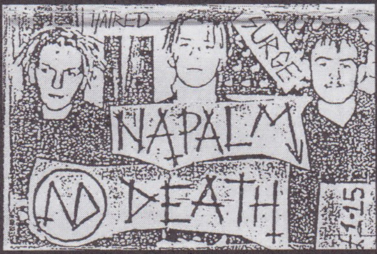
87年リリースのデビュー作『Scum』までメンバーだったニック・ブレン(vo、b)が12～13歳の頃に始めたユニットが母体で、NAPALM　DEATHという名前を使い出したのは81年とされる。結成年があいまいなのは、当初はライヴをやるようなバンドの体裁を成してなかったからだと思われる。

NAPALM DEATHはまぎれもなく隆盛だった頃のUKパンク/ハードコア・シーンの中から立ち現れたバンドだ。出生地のバーミンガムでも当時GBHが頭角を現していたが、NAPALM　DEATHはそういう派手なシーンに深く関わることはなく、内向的な活動がしばらく続いた。まだ子供でメンバー・チェンジが激しかったことも影響したのかもしれないが、ロックンロール・アティテュードの流れをくむパンク・シーンとダブらなかったのは、持って生まれたNAPALM DEATHの体質である。そういった謙虚な姿勢は基本的に今もまったく変わらない。

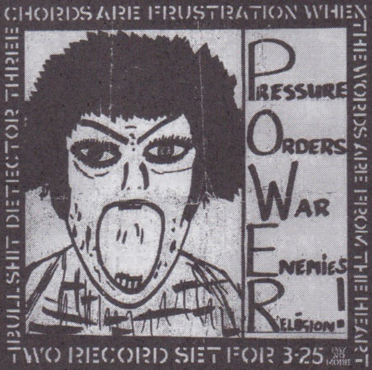
NAPALM DEATHの創始者のニック・ブレンは孤児だった。90年代の初頭にSCORNのメンバーとして来日した際に語っている。親との"援交"ですくすく育って大人になっても世話になっている人間みたいな甘えのない音と言葉の源はそこにある。単純なプロテスト・ソングに成りえないのは、○✕で解決できるほど問題が単純ではないことを幼い頃から身体と経験でわかっているからだ。

デモ・テープを録音していたとはいえ、NAPALM DEATHの存在が広まったのはCRASSのレーベルがリリースした無名アーティストのオムニバスLPシリーズ第三弾『Bullshit Detector Volume 3』である。「The Crucifixion Of Possessions」という曲を提供している。NAPALM DEATHの最大のルーツの一つがCRASSということを示す事実であり、当時は音楽的にも初期CRASSの影響が強い。

その流れは冒頭で言及した85年制作のデモ『Hatred Surge』に受け継がれる。NAPALM DEATHの関係者が今やるべき仕事の一つは『Scum』以前の音源をきちんとした形でリイシューすることだが、特に『Hatred Surge』は極初期NAPALM DEATHと87年リリースのデビュー作『Scum』とのミッシング・リンクであり、UKパンク/



『Hatred Surge』



『Bullshit Detector Volume 3』



『Scum』

ハードコア/ヘヴィ・ミュージック史的にも重要な作品なのだ。

ニック・ブレンがヴォーカル専任でオリジナル・ドラマーのラットが去る直前の録音。まだブラスト・ビートは使ってないが、『Scum』でレコーディングする4曲の原型も聴ける。RUDIMENTARY PENIやCHAOS UKみたいなスタイルが基本ながら、加入してまもないジャスティン・ブロードリック(g)の影響か彼が後にやるGODFLESHやJESUみたいなギターが織り交ざり、JOY DIVISIONやKILLING JOKE、英国のMOBのような音も聞こえてくる。攻撃一辺倒ではなくポスト・パンクなどのダーク・サイドのバンドがはらむ暗鬱なエキスを吸収していた。多重の意識を背負えば音楽的にも多層になる、そういう意味でも後のNAPALM DEATHの原型はこの時点でできあがっているのだ。

まもなくドラマーが"ブラスト・ビート"という言葉の生みの親でもあるミック・ハリスにチェンジ。NAPALM DEATHがブラスト・ビートを取り入れたのは米国のSIEGEとオランダのLÄRMの影響も大きく、前者のクラスティな絶望感や後者のストレート・エッジの自己鍛錬+ポリティカルな姿勢といった、単純な政治性から一歩踏み出した歌詞の要素もナチュラル・ミックスしたと思われる。

突然変異なようでダークなUKものを中心に80年代初頭の様々なパンク/ハードコアの"軋み"を吸収し、実はじっくりと下地を積み上げていって86年にレコーディングを行ない、『Scum』の前半部分が完成した。影響がうかがえるとはいえCRASSのフォロワーと完全に一線を画し、いわばAMEBIXやANTISECTなどと同じくCRASSに端を発するアナーコ・パンクの我流の進化形であり、アナーコ・パンクをアップデートし続けているという意味でもNAPALM DEATHの原点だ。

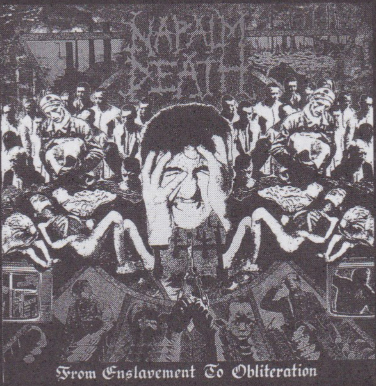
"権威を倒したその後どうすんの"という意識も透けて見えるほど人間そのものに対する冷めた認識が聞こえてくる。十代で持ち得たこういう醒めた熱情はNAPALM DEATHの原動力である。だからどんなにエネルギッシュであってもお祭り騒ぎには成りえない。単なる反権力・反体制で終わらぬ冷厳とも言える悲観的な認識。いやだからこそそんなものを超えるべく突き抜けるべく世界の現実と自己の内面に同時に向き合っていけるのだ。

90年代以降も大好きだが、80年代のNAPALM DEATHが音楽面以外であまりに

も過小評価されていることが耐えられない。音楽的な革新性だけではなく、単なる他者批判では終わらずに内省性も秘めたアナーコ・パンクの歌詞をネクスト・レベルにまで進めているにもかかわらず、である。"君の内面には君の人生や君がやることをコントロールしているファシストがいる。君の頭の中には死ぬまで君の思考をコントロールしているファシストがいる"と歌う、『Scum』に収録された曲「Control」の言葉も象徴的だ。

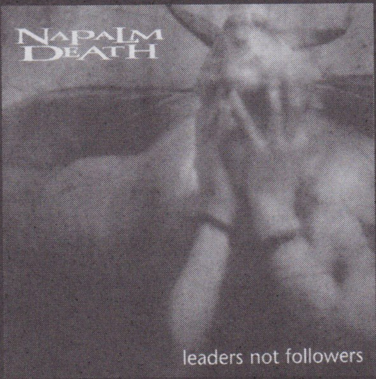
たとえCRASSと交流が深くなかったとしても、80年代後半のUKパンク/ハードコア・シーンにはCRASSの洗礼を受けているバンドが多かったが、特にNAPALM DEATHはその色が強かった。とはいえCRASSやCONFLICTに代表されるように言葉数が多いアナーコ・パンク・バンドとは違い、アナーコな意識の歌詞をDISCHARGEみたいに簡潔な表現に凝縮した点も80年代のNAPALM DEATHの特筆すべき一つなのだ。

『Scum』の前半部をレコーディングした後に当時の唯一のオリジナル・メンバーだったニック・プレンは脱退したが、リー・ドリアンが87年頭に新ヴォーカリストとして加入したことで、NAPALM DEATHの基本的な姿勢はキープされた。リーは



『From Enslavement To Obliteration』


『Mentally Murdered』



『Leaders Not Followers』

CRASSをはじめとしてFLUX OF PINK INDIANSやANTISECT、RUDIMENTARY PENIなどにどっぷりだった人間で、彼がソングライティングに関わりだした『Scum』後半や、ニック在籍時の曲「Private Death」も入っていた88年リリースのセカンド・アルバム『From Enslavement To Obliteration』では、セクシズムやレイシズム、動物の権利をほのめかす歌詞が増えている。でもやはりストレートなメッセージ・ソングとは一線を画していた。

いくらメンバーが変わろうが、アナーコ・パンクの真摯なアティテュードをキープしつつNAPALM DEATHが一貫してナイーヴなバンドにならないのは、"人間は業を背負っている生き物"という認識も常に内包しているからだ。もともと80年代前半から、インダストリアル/パワー・エレクトロニクス・ノイズのTHROBBING GRISTLEやWHITEHOUSE、"アヴァン・ヘヴィ・ノイズ・ロック・バンド"のSWANSといった面々からも影響を受けてきたが、音楽性だけではなく友愛精神とは対極のニヒリスティックな意識も自然とブレンドしていったのである。

そういった志向性の核だった当時唯一のオリジナル・メンバーのニックが『Scum』の前半部をレコーディングした後に脱退したのは、NAPALM DEATHがメタルっぽくなってきたことも一因だった。そう感じるファンはあまりいないと思うが、おそらくニックにしてみればリフで進める曲のスタイル自体がメタルなのだろう。ブラスト・ビートを持ち込んだ当時の新ドラマーのミック・ハリスのアイデアも大きかったと想像できる。確かに『Scum』の前半の時点でメタルの要素が混入し始めていた。

特に80年代の後半まではあくまでもシンプルなハードコア・パンクが核のグラインド・コアだったとはいえ、メンバーが変わったことも影響してニックが去ってからはメタル色が少しずつ強まる。CARCASSがメイン・バンドだったためにNAPALM DEATHはあくまでのギター弾きとしての参加だったとはいえビル・スティアが加入した『Scum』の後半。基本的にメタル小僧で現在のNAPALM DEATHの最古参メンバーのシェーン・エンバリーがベーシストになったセカンドの『From Enslavement To Obliteration』。リーとビルの脱退直前に録音して89年の夏にリリースされたEP『Mentally Murdered』。順に聴いていくとよくわかる。

ただしNAPALM DEATHが自分たちに活かしたメタルの大半はデス・メタル黎明

期のサウンドのバンドだ。特にスロー・リフを取り入れたCELTIC FROSTやブラスト・ビート源の一つであるREPULSIONの影響は絶大だ。REPULSIONをはじめとして当時レコードがリリースされてなかったバンドも多かったから、SIEGEやLÄRMなどの各国のハードコア・パンクものと一緒に、アンダーグラウンドのネットワークでデス・メタルの原型バンドの音源をテープ・トレードやダビングなどで取り寄せていた。とりわけ地下メタルものに関してはビルやシェーンが熱心だったようである。

対象に対して真剣に向き合うNAPALM DEATHは、気に入ったバンドの音楽の表面的なスタイルの影響を受けるだけではなく、そのメンタリティも消化して自分たちのものにしてきた。80年代前半から培ってきたパンク〜ポスト・パンクの陰鬱なエキスが邪悪なエクストリーム・メタルの導入によってよりリアリスティックで残酷な色を見せ、それは当然のことながら歌詞にも表れていく。いわゆるシステムだけでなく人間がはらむネガティヴな面にも向き合わなければ何も進まない。NAPALM DEATHは死に向き合うエクストリーム・ミュージック/エクストリーム・メタルの流儀をブレンドしたことで、考え方を了解した者同士で思想をマワして内輪ウケに留まるアナーコ・



『Leaders Not Followers: Part 2』



『Fear, Emptiness, Despair』



『Diatribes』

パンクの枠を完全に突き破った。邪悪なメタルを血肉にして音楽的に大きくパワー・アップしたと同時に活動フィールドが広がっていったのも偶然ではない。

89年の後半から1990年の頭にかけて起こったメンバー・チェンジで新たに加入したのは、ジェシー・ピンタード(g)、ミッチ・ハリス(g、vo)、マーク"バーニー"グリーンウェイ(vo)。それぞれ以前はグラインド・コア・バンドのTERRORIZERとRIGHTEOUS PIGS、デス・メタル・バンドのBENEDICTIONをやっていて、みなどちらかと言えばメタル方面のバンド出身ということは、セカンドまで1分前後だったNAPALM DEATHの曲が倍以上の長さになる一因にもなった。それはともかく、アナーコ・パンクの意識をオリジナル・ヴォーカルのニックから受け継いでいたリー・ドリアンが脱退したことで、NAPALM DEATHの中からアナーコ色は薄らいでいく。

だが、NAPALM DEATHの中からポリティカルな色が消えることはない。三代目シンガーがデス・メタル・バンド出身で加入当初の髪型もモロにメタル・ヘアーだったから、今後どうなることやらと危惧したのはぼくだけではないだろうが、外にも内にも矛先を向けるような姿勢は常に健在だ。何しろバーニーは政治問題への関心が強く、現リーダーのシェーンが「やりすぎ」とこぼしたことがある。そんなに派手にはやってないがバーニーは時々ちょっとした"活動"をしているようで、2011年〜2012年にニューヨークのウォール街などで目立ったOccupy movement(注:"〜〜を占拠せよ!"という経済格差に対する抗議の民衆運動)にシンパシーを覚え、ネット上で呼びかけもした。

ベーシストのシェーンも歌詞を書くが、ポリティカルというよりはプライヴェイトな内容を普遍的な次元にまで昇華した内容が多い。シェーンはバーニーの政治的な歌詞やアティテュードに対して一定の距離を置いているようだが、89年の後半からNAPALM DEATHを率いていたシェーンのバランス感覚も認めつつ、アナーコ・ポリティカルな要素の維持がNAPALM DEATHをNAPALM DEATHたらしめてきたこともまた事実なのである。

NAPALM DEATHの本質を知るのに手っ取り早いカヴァーCDがある。6曲入りの『Leaders Not Followers』(99年)と19曲入りの『Leaders Not Followers: Part 2』(2004年)だ。SLAGHTER(カナダ)やPENTAGRAM(チリ)、MASSACRE(アメ

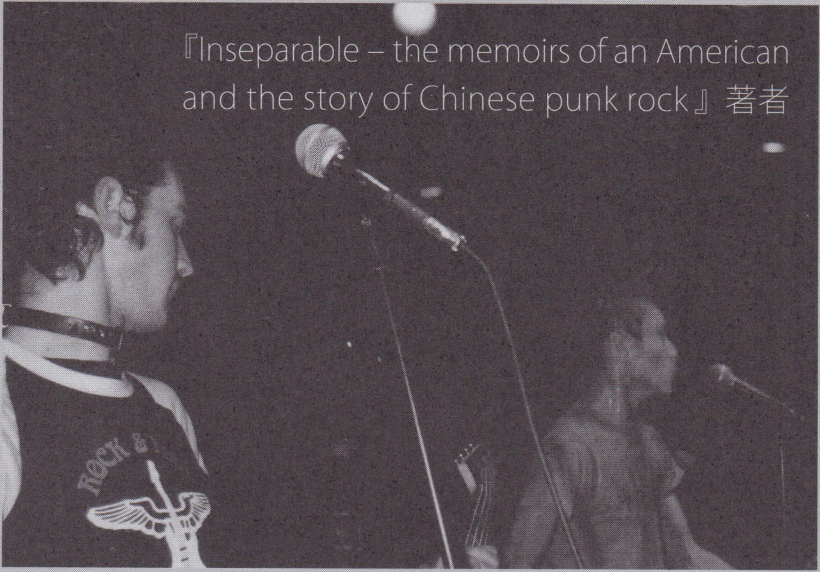
リカ)、REPULSION、DEATH、HELLHAMMER、MASTERなどの、邪悪なエクストリーム・メタルの曲を様々なパンク/ハードコア・バンドと共にやっており、双方のメンタリティの炸裂がNAPALM DEATHの神髄だとわかるだろう。

『Fear, Emptiness, Despair』(94年)や『Diatribes』(96年)あたりのアルバムでは、ブラスト・ビートをほとんど封印してグラインド・コアのスタイルとは違うことを試みたNAPALM DEATH。賛否両論で「ブラスト・ビートを使ってこそNAPALM DEATH」という思いのバーニーはこの時期の方向性に疑問を抱いて他のメンバーと溝ができ、一時クビになる。だがグルーヴ感に関して言えば現在のNAPALM DEATHの源流とも言える作品であり、何よりシェーンが好むCOCTEAU TWINSやMY BLOODY VALENTINEなど耽美的なバンドやシューゲイザー・バンドの色を消化し、そういう繊細なニュアンスもまたNAPALM DEATHの人間らしい魅力なのだ。

シェーンはよくバーニーのことを「ハッピーな人間ではない」と言ってきたし、数年前に結婚してからは違うだろうが自らも常に苦渋の色を滲ませてきた。ふしあわせなのは政治的な理由だけではないわけで、ナイーヴなプロテストでは終わらない人間ならではの感情のエクストリームな加速がNAPALM DEATHだ。2000年代以降の快進撃の原動力はそういった"憎しみのポジティヴな連鎖"なのであり、2012年リリースの最新作『Utilitarian』も絶好調なのである。



『Utilitarian』



DAVID O'DELL

学生時代に中国/北京パンク・シーンの黎明期と出会い、彼の地で自らバンド活動やイヴェントの企画を行ってきた、テキサス州オースティン出身のアメリカ人・DAVID O'DELL。
自身の体験を綴った『Inseparable – the memoirs of an American and the story of Chinese punk rock』という本も発行したばかりの彼(ENVY大好きの高校教師)に、まだまだ近くて遠い国、中国のシーンの実態を探るべくインタヴューを敢行してみました。
取り急ぎ、本頁をめくった先にある中国パンクスの写真を見て、度肝を抜かれて頂ければ幸いです。

■まずはハードコア/パンク・ミュージックとの出会いを教えてください。それって80年代のハードコア・バンドでした？当時の年齢は？

「アニキの影響でRAMONESに夢中になったのが最初かな、1983年の頃だね。もちろ

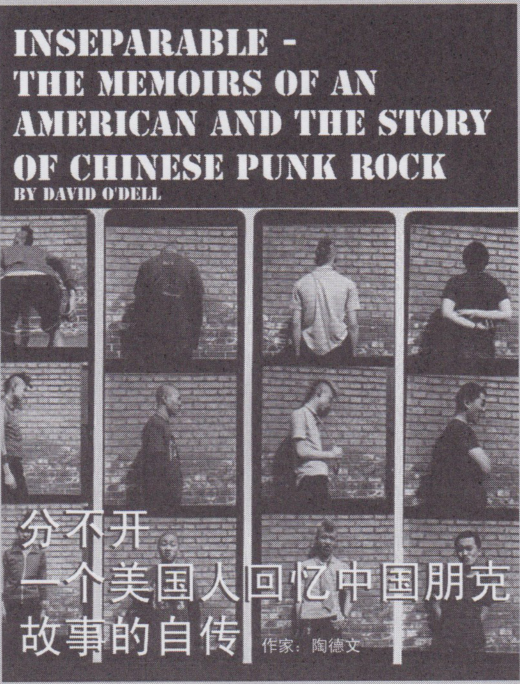
んRAMONESのことなんてこれっぽっちも知らなかったよ、8歳だったからね。でもこれがパンク・ロック初体験だった。アニキはパンク・ロッカーじゃなくてストーナーだったけど、RAMONESは好きだったんだよね。いっつもレコードをかけていたよ」

■大学時代に北京を旅したのはどうしてなんですか？もともと中国に強い興味を持っていたとか？

「最初はただ言語に興味があっただけなんだ。それからアンダーグラウンド・シーンの成長に関わるようになっていったよ。UNDERBABY（地下嬰兒楽隊/中国パンクの黎明期から活動していたバンド）のGao Wei(中国初のパンク・ギタリスト)とルームメイトになったのが始まりだね。Goa Weiと僕は初のパンク・ショーを実現し、全国に散らばるあらゆるパンク・シーンの中からいくつかのバンドを見出し発展させていくようになった。おかげで中国に滞在するのがさらに楽しくなったよ」

■北京/中国の第一印象はどうでしたか。北京とオースティン（テキサス州）はだいぶ違うと思うんですが。

「北京の第一印象は僕の著書、『Inseparable – the memoirs of an American and the story of Chinese punk rock』に詳しく書いているけど、手短に言えば、どこもかしこも全く違うし、何もかもが生々しく荒削りでワクワクの連続だったよ。オースティンは大学のあるのんびりしたところだったし、離れた郊外を全部加えたとしても、おそらく100万人ほどの音楽の街だったから。北京はホコリっぽくて、



汚くて、悪臭がし、巨大で、騒々しくて。つけ加えると北京は荒れ狂ってもいる。僕はたちまち、この驚異的で文化的に豊かな街のワイルドな魅力に引きつけられてしまったんだ。びっくりするほどに心の大きい人々と、もちろん食べ物にもね！」

■どんなふうに中国のパンク・バンドとは出会ったのですか？バンドのことは中国に行く前から知っていたんですか？

「パンクやオルタナティヴ・バンドが中国に存在するとは知らなかったよ。中国のロックンロールやヘヴィメタルは知ってはいたけど、オルタナティヴ・ロックやパンクはさっぱりだったね。

ある夜、中国人の友人とバーでパーティを開いたときに、演奏してもらおうとして知らないバンド2つを招いたんだ。その一つが今では中国のKurt Cobainとみなされている Xie Tian Xiaoのバンドだった。もう一つが中国初のパンク・バンドと言われるUNDERBABY。そのショーで中国の最初のパンクスと知り合うことになったってわけなんだよ。今君が目にしている中国のシーンは、あそこから僕たちが発展させていったんだ」

■当時のパンク・バンドは普段どんな場所で演奏していたんですか？バー？パンク・バンドが活動するのに適した環境はありましたか？

「確かに演奏する場所を探すのは難しかったね。でもそれよりも練習場所を見つけるのはもっと大変だったよ。防空壕で練習したこともあったし、狭苦しいスタジオや、Gao Weiが住んでいたこともある有名なBai Huarってリハーサル・スペースでもやったね。

パンク・ミュージックってものを知る人が1人もいなかった頃、クラブやスタジオのオーナーは演奏の許可を出すのには消極的だった。やらせてくれたとしても、たいていは二度と使わせてくれなくなったよ。

僕たちは街の中でも荒れた貧しい地域にターゲットを絞ることにしたんだ。KTV（カラオケテレビ）売春宿やいかがわしいバー、アート・バーなどにね。無届けの音楽を演奏したってことで、バーで何度か締め出しをくらったこともあったね、ドラッグが理由のときもたまにあった。でもパンクスには政治的な圧力も大きかったけど、演奏もできたし、90年代の中頃は盛んだったよ」

■中国パンクの魅力は何だと思いますか？

「中国パンクの特徴は歌詞にあるんじゃないかな。文化大革命に関与した両親に関し

て、個人主義の増加について、それから中国人として誇りを持っているということについて書いているところかな。こういう内容はほとんどの曲に含まれているよ。実際のサウンドやリズムは他の国のパンク・バンドと同じ。違いは歌詞にあるね」

■北京での最高の思い出と最悪の思い出を教えてください。

「ワオ…今まで誰にも聞かれたことがないな…これは難問だね。最高の瞬間は中国パンク・バンドの仲間になり、家族の一員とみなされたことかな。最悪の思い出は僕が追い回していたアホな女の子たちのこと。僕も若かった、20代だったんだよね！」

■そもそも『Inseparable – the memoirs of an American and the story of Chinese punk rock』を執筆したのはどうしてですか？

「中国パンク・シーンがどのように始まったのか、全てが真実の物語を本に書いてみたよ。シーンの幕開けを知っている人はほとんどいないだろ。2003年以降のパンク・シーンのことを知る人は多いけれど、そこで活動するバンドが結成された経緯を知っている





パンクは社会を支援するもので壊すものじゃない

人はごくわずかだからね。内容は僕が初期のパンク・バンドに関わるようになってからのことで、中国パンク・バンドの物語でもあり、僕自身の個人的な物語でもあるよ…2つの物語が絡み合っている。それで本のタイトルを"Inseparable"(切り離せない、などの意味)にしたんだよ。中国語だと"分不开"だね。日本語でも同じなんじゃないかな」

■(…全然違うよ)好きなバンドは何でしょう？ハードコア/パンク・ロック以外でもいいですよ。

「ほんとに毎日いろいろな良いバンドを聴いているよ。FIFTEEN、SCREECHING WEASEL、BAD BRAINS、MISFITS、CURE、SMITHS、LUSH、THE POGUES、JAWBREAKER、それとENVY(日本のバンドだよ。もの凄くかっこいい!!!!!)…主に好きなバンドはこんなところかな」

■オースティンで教師をしていると思うのですが、現在の教育システムについて問題

を感じたりしますか？

「そう、高校の教師で、物理学と天文学を教えているんだ。科学には常に興味を持っていて、僕の学士号は物理学が占めているよ。でも天文学ではマイナーな中国で学士号も取っている。自然の魅力を見つけ出すのに、物理学と天文学を共有することができるってところが気に入っている。毎日の生活はとても面白いよ。素晴らしい子供たちとクールなことを作り上げようとしているし、ほとんどの場合、お互いから学びあっている。アメリカの教育システムの主だった問題は、子供が卒業して大学に行けるかどうかを決定するのに、標準化されたテストにあまりにも頼りすぎているってところだね。大学が全ての人のためではないし、学校で技術を身につけたほうが良い子供たちもいる。全員が大学の4年間という長い期間を通うプレッシャーを抱えることもないと思う」

■今後の予定は何でしょうか？

「今、オースティンのテキサス大学で工学教育の修士号を取っているところで、来年の夏には取得できると思うよ。その後も、興味を持ち続けている限り教えることは続けていくだろうね。

中国には毎年行き来するようにしてる。毎年恒例になっている"Half the Sky"のチャリティー・フェスティヴァルをやろうとしているんだ。これは素晴らしい中国の子供たちに向けたチャリティーだよ（http://www.halfthesky.com/）。アジアからオースティンにやって来るバンドもずっとサポートしている。それはずっと続けていくつもりでいるんだ。様々な言語で本を出版できたらいいね。他の国の出版社を捜しているところだよ」

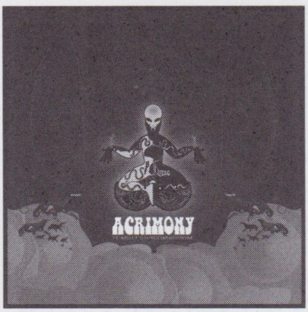
■インタヴューに答えてくれてありがとうございます。日本の読者にメッセージをいただけますか？

「Kenjiから連絡をもらえたことと、僕の話を共有してくれることを誇りに思うよ。素晴らしいパンク・ロック・シーンに興味を持つ日本のオーディエンスが、日本の新しいドアをこじ開けていくことに対し、僕はとてもワクワクしてる。北京に行くことがあったら、2KolegasやMao Live、XPなどのパンク・ロック・クラブを訪ねてみてくれないかな。地元のシーンをサポートしてほしい。チャリティー・ショーもやってみて。パンクは社会を支援するもので、壊すものじゃない。それから、つけ加えておくね、もっとENVYも聴いてくれよ!!!」

LASHING SPEED DEMONS VOL.13

えー、EL ZINEがel zineとして復活を遂げましたそうで、それに伴い本コーナーもめでたく復活と相成りました(続くのか?)。山路編集長から幾つかリクエストのあったお題の中で"ストーナー"というのが目にとまったので、今回はストーナー・ロック/ドゥーム・メタル周辺で、最新作やらDOLL廃刊前後に入手して紹介してなかった00年代半ばのやら90年代のやらルーツ的な古いやつやら、まんべんなく並べてみることにします。よろしくお付き合いください。ともあれ生きてる間に復活して良かったよEL ZINE。大越よしはるは別に載ってなくても誰も困らないと思うけど、EL ZINE(el zine)は日本のパンク活字文化に必要なものだと思いませんか皆さん。　TEXT:大越よしはる

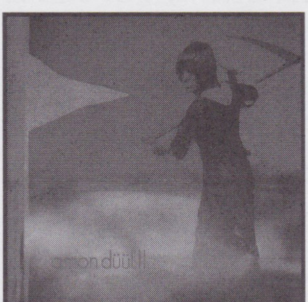
ACRIMONY/TUMULI SHROOMAROOM



91年にウェールズで結成された初期のドゥーム/ストーナー系4人組が97年にリリースした、2ndにしてラスト・アルバム(01年に解散)。結成当初はデス寄りだったというが、この時点ではBLACK SABBATH直系のヘヴィなリフをアシッド感たっぷりに展開した、ダウナーかつグルーヴィーなサイケ・メタルになっている。速めの曲になるとデスメタルやハードコアの根っこが垣間見えて興味深い。ギターのステュアート・オハラはその後、末期IRON MONKEYにも参加。

(LEAF HOUND RECORDS LHR-014)CD 1997年

AMON DUUL II/YETI



EL ZINE VOL.2でアルバム『MADE IN GERMANY』を紹介したAMON DUUL IIだが、本誌向け、そしてストーナーの系譜と言ったら是非紹介したいのはこの2ndアルバムだ。集団即興的なアシッド・サイケから出発したバンドだが、この2枚組大作では超ヘヴィなリフとすっとんきょーな女性ヴォーカルが炸裂する異形のハード・ロック・サウンドになっている。後半は超ダウナーでトライバルな即興ばっかりなんで聴きづらいところもあるが、前半のヘヴィ・ロックは凄まじい。

(BELLE ANTIQUE BELLE 091488-9)2CD 1970年

CRIPPLED BLACK PHOENIX/[MANKIND]THE CRAFTY APE



元ELECTRIC WIZARDで、リー・ドリアンらの超絶プロジェクトTEETH OF LIONS RULE THE DIVINEにも参加していたジャスティン・グリーヴス(Ds)のバンド、というかプロジェクト。初期はMOGWAIのドミニク・アイチソン(B)との双頭バンドという体だったが、その後アイチソン脱退を経て、最新作は70年代半ばのPINK FLOYDあたりを思わせ…"人類：狡猾な猿"と題した、CD2枚組のコンセプト・アルバム風。不穏・暴力的、だがしかし、妙にポジティヴ。

(COOL GREEN RECORDINGS CGR 7360 2)2CD 2012年

EARTH/THE BEES MADE HONEY IN THE LION'S SKULL



あのBorisにも、そしてかのSUNN O)))にも多大な影響を与えたディラン・カールソン(BorisのAtsuoによると、いつもゆらゆらしてて、見てててイラッとするらしい)によるバンドというかプロジェクトというか、結成17年にして初めて国内発売された5thアルバム。ヘヴィとかラウドとかドゥーミーとかじゃなく、「ツイン・ピークス」あたりで日本のお茶の間にも届くようになったアメリカの地味な狂気というか、深い残響をもたらすコアは怖いほど空虚な感じというか。

(DAYMARE RECORDINGS DYMC-055)2CD 2008年

ELECTRIC WIZARD/WITCHCULT TODAY



リズ・バッキンガム(G)加入後、ジャスティン・グリーヴス(Ds：現CRIPPLED BLACK PHOENIX)が脱退しての6thアルバム。英ガレージ系で有名なトゥーラグ・スタジオにて、ヴィンテージのアナログ機材で録音され、70年前後の発掘音源と言っても信じてしまいそうなスモーキーなドゥーム・ロックに、オジー・オズボーンから歌心抜いたみたいなジャス・オボーン(G)の酩酊ヴォーカルが乗る。中盤ほとんど同じような曲が3曲くらい続くのも最早わざとやってるとしか思えない。

(LEAF HOUND RECORDS LHR-032)CD 2007年

GEORGE BRIGMAN/JUNGLE ROT



75年のアメリカン・ハード・ロックなのに、ギターの音色が初期STOOGESのロン・アシュトンそのもの、という不気味盤(異様に虚ろなヴォーカルもかなりキてる)。同時期のロンが西海岸でVAN HALENと対バンしてたことを思うと、相当異常。ギターとベースとヴォーカルは一人で重ねてて、BLUE CHEERを一人でSABBATHにしてしまった(?)伝説の男、ランディ・ホールデンにも通じるモノが。コレは05年の再発LPだけど、今年になって正規再発のCDも出てます。

(ANOPHELES RECORDS ANOPHELES 009)LP 1975年

HARVEY MILK/LIFE…THE BEST GAME IN TOWN



90年代に活動して、ISISやSUNN O)))にも影響したバンド。06年に再結成していて、復活2作目(通算5thアルバム)にして初の国内発売となった本作(国内盤のみ2枚組)では、MELVINSのジョー・プレストンが参加。スラッジコア的な遅・重・剛サウンドを中心に、BEATLESのフレーズを拝借してみたかと思えばLED ZEPPELINっぽいグルーヴを聴かせたりと、妙なフットワークの軽さとヴァラエティ豊かな曲作り・アレンジを聴かせる。捉えどころのなさが逆に興味深い。

(DAYMARE RECORDINGS DYMC-065)2CD 2008年

HIGH ON FIRE/DE VERMIS MYSTERIIS



今や米国メタル/ストーナー界の最重要人物といえるマット・パイク(G,Vo)…前作から2年ぶり、SLEEP再結成(!)を経ての6thアルバム、元ZEKEのジェフ・マッツ(B)を迎えてからは3作目。録音はCONVERGEのカート・バロー(ギタリストとしても参加)で、コンセプチュアルな作風(なんとラヴクラフトに題を得たという)ながら、音作りは前作以前に揺り戻したような野蛮さ全開。SLEEP時代への回帰をも思わせるようなスローと、スラッシーな爆裂ナンバーの落差が痛快。

(ビクター VICP-65046)CD 2012年

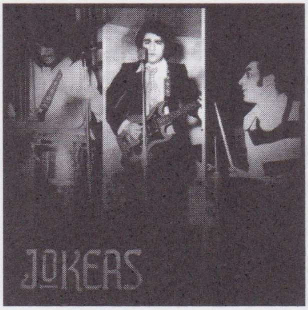
HIGH TIDE/SEA SHANTIES



今回唯一の60年代作品だが、コレが非常に恐ろしい。ヴァイオリン入りの変則4人編成、何しろ歪み切ったギターの重さが尋常ではない。ヴァイオリンもベースも負けずに歪んでいるので、BLACK SABBATHを凌駕するとんでもない超ヘヴィ・ロックになってしまった。まさにドゥームの祖。ヴァイオリンのサイモン・ハウスはHAWKWIND他への参加でも知られるが、トニー・ヒル(G,Vo)はもっと評価されるべき存在だ。ソフトなヴォーカルが虚無感増量で更に気持ち悪い。

(東芝EMI TOCP-7801)CD 1969年

JOKERS/JOKERS



70年代初頭のテヘラン(!)で活動していたブルーズ・ロック・トリオの発掘音源。音楽性自体は同時代の日本でニュー・ロックとかアート・ロックとか言われてたポストGSのバンドに近くて、クォリティ的にはB級以下だと思うんだけど、イスラム革命以前のイランにちゃんと(?)あった西欧カウンター・カルチャーの影響というのをこうしてCDという形で提示されると感慨深いものがある。もっとも、現在のイスラム圏でも地下ではデスメタルとかブラックメタルとかいるらしいが。

(FADING SUNSHINE FS001)CD 2011年(72年録音)

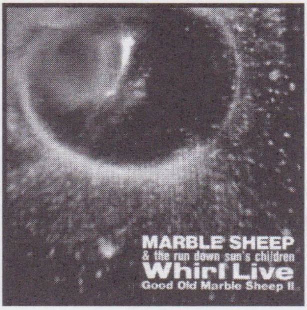
LOTUS EATERS/MIND CONTROL FOR INFANTS



ISISのアーロン・ターナー、KHANATEのジェイムズ・プロトキン、そしてSUNN O)))のスティーヴン・オマリー…という鬼のような組み合わせによるプロジェクト。担当楽器のクレジットもなく、曲名すら書いてない…というミニマルにもほどがある装丁から飛び出すのは、最早ドゥームとすら言えない、凄まじくトリッピーなダーク・アンビエント(メタル成分皆無)。当時コレとTEETH OF LIONS RULE THE DEVINEにはいろいろな意味で相当衝撃を受けた。

(RITUAL RECORDS HWCY-1126)CD 2002年

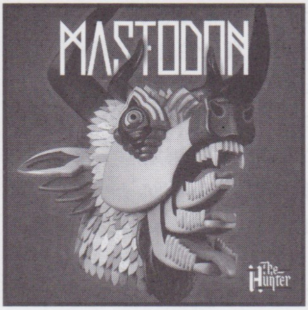
MARBLE SHEEP & THE RUN DOWN SUN'S CHILDREN/WHIRL LIVE



EL ZINE VOL.2で近作を紹介したが、とにかくこのバンドは(90年代後半一時期解散状態だったものの)キャリア長い。時期により多少の変化があるが、HAWKWINDばりのスペーシーな轟音を響かせていた時期と言えば何より80年代末だ。その時代のライヴを詰め込んだ2枚組。この後紹介するSUBVERT BLAZEもそうだが、この頃の日本のヘヴィ・サイケ勢はまさに"早過ぎたストーナー"という感がある。 ツイン・ドラムだけでご飯が3杯おかわり出来そうな勢い。

(CAPTAIN TRIP CTCD-004～5)2CD 1994年(88～89年録音)

MASTODON/THE HUNTER



EL ZINE VOL.4で紹介した前作から約2年半ぶり、今やアトランタが世界に誇る存在となった巨象の5thアルバム。前作同様、NEUROSISからスコット・ケリーがヴォーカル(と作詞)で1曲ゲスト参加しているが、作風はここ数作のコンセプチュアルな感じではなく、コンパクトな曲が13曲(国内盤はボーナス1曲プラス)。例によって無駄にテクニカルでヘヴィながらポピュラリティのあるメロディを獲得したというか(歌詞も以前に較べてなんだかポジティヴな感じ)。

(ワーナーミュージック・ジャパン WPCR-14236)CD 2011年

MOTORPSYCHO/ROADWORK VOL.4:INTEPID SKRONK



デビュー当時"ノルウェイのDINOSAUR Jr."とか安直な呼び方をされたバンドだが、今や北欧ラウド・ロック界に屹立する存在となった。コレはいわゆる"オフィシャル・ブートレグ"的ライヴ音源シリーズの第4弾。メロトロン・サウンドも大フィーチュア(サンプリングだけど)、トリオ編成のライヴ音源とは信じられない、スケール感溢れるプログレッシヴ・ヘヴィ・サイケデリック。ストーナーとかで括るにはインテリ然とし過ぎてるところもあるが、疾走感もまた凄い。

(PSYCHOBUBBLE 071)CD 2011年(08～10年録音)

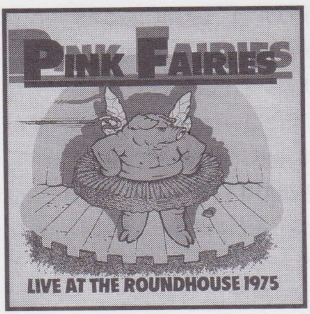
OM/ADVAITIC SONGS



クリス・ハキアス(Ds)脱退やらSLEEP再編やらを経て、4月のHIGH ON FIRE新作に呼応するように、こちらも7月に新作が出た。アル・シスネロス(B,Vo)率いるお経ドゥーム・ロッカー、現編成で2作目となる5thアルバム。女性ヴォーカルやキーボード類が増えたりして、1stの頃に較べると静と動のダイナミズムは随分増したものの、基本的にはこの人たち何も変わってません。アルの印象的なリフに導かれる、ミニマルで神秘的で幽玄なヘヴィ・サイケデリック曼荼羅。

(DAYMARE RECORDINGS DYMC169)CD 2012年

PINK FAIRIES/LIVE AT THE ROUNDHOUSE 1975



このへん混ぜるのは趣味というか偏向と言われても仕方ないが、EL ZINE VOL.10で紹介したラリー・ウォリス(G,Vo)含む再結成ライヴ、ツイン・ドラムとツイン・ギターで、サイケとハード・ロックとパンクを縦横に行き来する豪快R&Rは、HAWKWINDあたりよりもむしろ本誌向きかも。オリジナル曲に交えてTHE VELVET UNDERGROUNDやらリトル・リチャードまで、キメキメ&リハーサルなんてやってないに違いない(?)ズルズル・サウンドで引きずりまくる。

(テイチク TECP-25656)CD 1990年(75年録音)

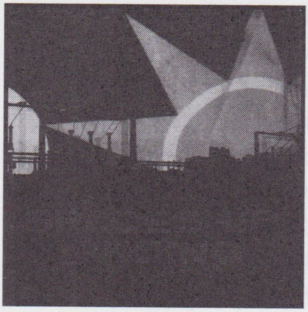
SIR LORD BALTIMORE/KINGDOM COME & SIR LORD BALTIMORE



ストーナーの祖、というには勢いだけあり過ぎなアメリカン・ハード・ロックの名バンド。とにかく勢いだけが本当にあり余ってるパワー・トリオで、CHURCH OF MISERYもカヴァーしたくらいだから本誌的には必携。何故か安定的な再発がなくて、いつでも需要過多のバンド。コレは2枚のLPを1枚のCDに収めた再発盤で、現時点では多分一番入手しやすいと思う。2ndはキーボードが入って多少プログレがかったりもしてるが、1stの野蛮なヘヴィ・ロックは凄まじい…。

(RED FOX RECORDINGS RF 639)CD 1970年&72年

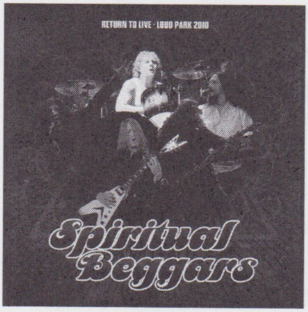
SPACESHIP LANDING/SPACESHIP LANDING



ドイツのバンドというんでいわゆる"クラウト・ロック"のノリを想像したが、このバンド名は御存知KYUSSの長尺ナンバーから取られている。キーボードやサックスまでフィーチュアして迫るトリッピーなヘヴィ・ロックはアッパーにして凶悪(ドラムも大暴れだが、一番凶暴なのはラリパッパなヴォーカルかもしれない)。06年にこのアルバムをリリースしただけで解散したということで、正直まったく知らないバンドだったが、何故か今年再発されてぶっ飛ばされた1枚。

(WORLD IN SOUND WIS-3015)CD 2012年(06年録音)

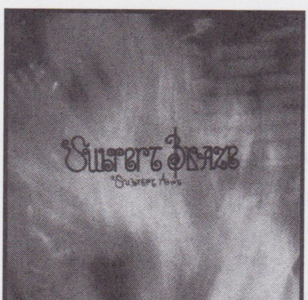
SPIRITUAL BEGGARS/RETURN TO LIVE-LOUD PARK 2010



タイトル通り、10年の"LOUD　PARK"でのステージを収録したライヴ盤。ヴォーカルがJB(GRAND　MAGUS)からアポロ・パパサナシオ(FIREWIND)に交代したが、歌い上げの熱唱型に違いはなく。ジョン・ロードかっつう古式ゆかしいオルガンと合わせて、なんという王道感だ。CARCASSとかARCH ENEMYとかやりつつも、結局ここらへんに回帰せずにはいられないのだな…というロケンローラーの業のようなものを感じますね。何しろ実に生々しくも暑苦しい1枚です。

(TROOPER ENTERTAINMENT XNTE-00033)CD 2011年

SUBVERT BLAZE/SUBVERT ART



当時一部で"大阪の奇跡"と讃えられた超絶パワー・トリオ。この1～2年前にGASTANKがCREAMのカヴァーやったりして、確かにそういう機運はあったとは思うけど、改めて聴くと、90年にコレは…早いな。リリース元ALCHEMYの慧眼も含めて、今こそ評価されるべき音だと思う。3人ともストレートのロン毛にヒゲ…70年代初頭に人知れず活動してたニュー・ロックのバンド、と言われても信じそうなルックスも凄かった。BLACK SABBATH「Wicked World」のカヴァー収録。

(ALCHEMY RECORDS ARCD-016)CD 1990年

ES GIBT KEIN WERT

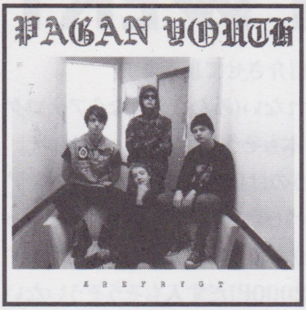
ここ1、2年の間に発表された音源を中心に、10枚ほど紹介させて頂きます。
欧米のアンダーグラウンド・シーンでは、CDが全然売れない(みんな買うならアナログ盤)と、もう何年も前から言われていますが、いい加減日本もそうなるのでしょうか。
利便性を追求するなら、"データ＞CD＞アナログ"というのは自明ですが、"音楽を買う"人間なんて、"不便で場所をとる無駄なモノ"が好きという(変)人種に、今後はもっともっと限定されていくような気がします。そうすると、CDの立ち位置って実に中途半端ですね。今のご時世、紙ペラ一枚が入っているだけのCDに2000円だす人もそうそういないでしょうし…って、こんな話しは以前にも何度か書いたような気がしてきました。テヘ。

R.U.T.A./GORE



来日経験もあるポーランドの民族音楽集団・WARSAW VILLAGE BANDのリーダーであるMaciekによるプロジェクト・バンドの17曲入り1stアルバム。
サラエヴォ出身の映画監督、エミール・クストリッツァ率いるジプシー・ブラス・パンク・バンドのEMIR KUSTURICA & THE NO SMOKING ORCHESTRAも想起しましたが、こちらのほうがやはり"東寄り"の音。
el zine的には、MOSKWAのGumaやPOST REGIMENTのNika、DEZERTERのRobalが参加しているってところがミソかと思いますが(僕もそこに惹かれて購入しました)、実際のところ"往年のポリッシュ・ハードコアの面々が〜"なんてことは、このバンドにとっては些事です。
クラリネットやヴァイオリン、サックスなどを用いて当地の農民歌をベースとした楽曲の数々は、感動的なまでに躍動感が漲り力強く、そして牧歌的。血塗られた歴史の"声なき声"を綴る、これぞ本義のフォーク(民族)・パンク。
40ページにも渡るインナーが付随した、ハードカヴァー本のような分厚いデジパックCD、そしてYoutubeに投稿されているPVまで凝っており、全方位から見て完璧な一枚。ポーランドのパンク/ハードコア云々に留まらず、ポーランドの"音楽そのもの"の底知れぬ魅力が詰まっています。
だが、しかし!インタヴューしたけど回答が全然戻ってこないという哀しき結末が、待ち構えているのでした…。期せずして待て!
(KARROT KOMMANDO KK39)CD

PAGAN YOUTH/ÆREFRYGT



未来なきコペンハーゲンの若人たちによる不条理の不協和音。今号にインタヴュー掲載のREDFLESHとICEAGEのメンバーらによるバンドで、本作は2011年録音の新曲4曲と2010年発表のデモ音源4曲をリマスターして一枚に収録したもの。ポスト・パンクっぽいギターにサタニックなヴォーカル、意味不明な曲展開。訳知り顔な評論家の考察を横目に、"テキトーにやっただけだよ、バーカ!"と中指立ててそうな不遜にして魅惑の円盤。

(DEAD SECTION RECORDS DS09)7"

FRANCIS HAROLD AND THE HOLOGRAMS/THE WHITE BULL WEEPS FROM VALHALLA



アリゾナが誇る変態の最終音源。怪電波を24時間体制で受信してそうなトチ狂ったヴォーカルが、ハウリングしまくったジャンク・パンクの中をヨタヨタと突っ走る。そしてこの、最後を飾るに相応しい最低で最高のセンスのジャケットを目にして、ジャケ買いせずにいられようものか!無駄に豪華な透明片面の12インチには、不可解な狼と子羊のイラストも描かれており、蒸した暑い夏の日に蝉の声と一緒に聴けば偏頭痛が止まらない。

(VIDEO DISEASE RECORDS VD12)12"

INFERNÖH/WAR TJARD



FY FANやSKITKIDSなどのメンバーが在籍しているらしい(曲調も確かにそれっぽい)、スウェディッシュ・ハードコア・バンドの1st LP。渇き切ったノドから振り絞るようなヴォーカルに、ノイジーなだけじゃない、時にキャッチーな一面も見せる展開。思いっきり王道の爆裂スカンジ・ハードコアですが、そこらの凡百バンドとはちょっと一線を画しています。現行スカンジ・マニアックスはゼヒ。 マスタリングはBri Doomによるものです。

(D-TAKT & RÅPUNK RECORDS DTAKT 041)LP

CERVIX/LIFE FUCKER



SACRILEGEや近年ならAFTER THE BOMBSといったバンドから、メタリックな要素を差し引いた上でRawにドス黒くして、更に女性ヴォーカルのリバーブをグッと強調した、そんなニューヨークのクラスト・ハードコア・バンドの最後の7"。文句ナシに格好良いが彼らの歌詞同様、どうも型にはまりすぎて深みに欠けるような気も…。もっと色々ブッ壊しちゃえば面白かったんじゃないでしょうか。ヴォーカルは現在MRR誌で働いているようです。

(VIDEO DISEASE RECORDS VD9)7"

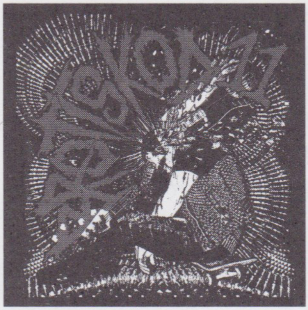
VA/HOTET FRÅN SKOGARNA



スウェーデン中部の都市、エステルスンドのバンドを集めたコンピレーション。全8バンドが各々2曲ずつを提供し、クラスト・ハードコアあり、重圧ドゥームありでヴァラエティに富んでいます。その中でもUKロックを通過した、良い意味でメジャー感のあるパンク・ロックで異彩を放つMORON EXPRESSに、ガレージ・ロックンロールのTHE DEAD、USHCでカッ飛ばすTHRÄSHERSなどなど、未知との遭遇多々。どうしてなかなか面白い。

(SENSUS/ÖSD MANGEL/ESTRAD NORR)CD

BROTTSKOD 11/ST



先述の『HOTET FRÅN SKOGARNA』にも収録されている、エステルスンドの6人組クラスト・ハードコア・バンドの4曲入り初単独7インチが、チェコのレーベルよりドロップ。SKITSYSTEMを連想させる90年代D-Beatが基調で、もう良い/悪いを超越して、"その辺が好きな人だけ聴いて下さい"としか言いようのない作品です。INFERNÖHを聴いて、"おっ、こういうのもまだまだイケるな!"と嬉しく思ったのですが、ここまでベタベタだと私には無理でした。

(PHOBIA RECORDS PR063)7"

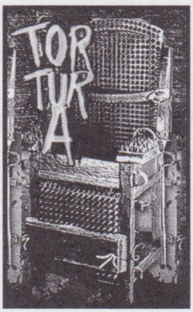
VA/F.O.A.D. - THE FILTHIEST OF APOCALYPTIC DETROIT



インタヴュー曰く、SHITFUCKERの"性奴隷が稼いだお金"で製作されたコンピ。多分、メタリック・アメリカン・ジョークなんでしょうが、レーベル名までビッチーです。PERVERSION、ANGUISH、REAPER、そしてSHITFUCKERの4バンドとも、奇跡的なまでに見た目が悪党ですが、音もその姿を反映したかのイーヴィル&ダーティ・メタル・パンクのそろい踏み。短パンTシャツビール腹orハゲのメンバーが一人でもいたら成り立たない一枚です。

(BITCHY WITCH 001)LP

TORTURA/DEMO 2012



スペイン語で"拷問"を意味する、ロンドン産オール・フィメール・バンドの4曲入りデモ・カセット。ジャケットにもトゲトゲがついた拷問用の椅子の写真を使っており物騒ですが、メンバーはチワワ犬を抱いたフツーのロック好きネエチャンです。衝動的なロウ・ハードコア・パンクでまだまだ暗中模索っぽいですが、今後化けることに期待したい次第。 黒いプロ・コピーらしきテープの表面には、半田ごて(?)による細工ありで、こういう無駄な一手間が嬉しく思えます。

(NO LABEL NO NUMBER)CASSETTE TAPE

VA/DEN MAGISKA CIRKELN:A HARDCORE COMPILATION



vol.11でインタヴューしたSLÖA KNIVARの音源もリリースしていたレーベルによるハードコア・コンピ、ちょっぴり古い08年のリリースです。TOO CIRCLEからDE-CULTURESとのスプリットもリリースしているTHURNEMANやお馴染みのINSTÄNGD、全然知らないFÖRMÖGENHETなんてバンドまで、基本どのバンドもメロディのあるスラッシーなハードコアですが、フックとヒネリが効いてて外れナシ。ノン・クラストなスウェディッシュの好盤です。

(DEN MAGISKA CIRKELN RECORDS DMC002)7"

editor's notes

こんにちは。約1年9ヶ月振りとなります。サイズも小さく、表記も小文字となりましたel zineです。さて、この1年9ヶ月に渡り、私は何をしていたのかと申しますと、十三舎(JUZASHA)という、SF/探偵小説関連の復刻をしたり通販で古本を売ったりする、個人出版社兼古本屋っぽい感じの仕事を始めまして、馴れない業務に日々、四苦八苦・七転八倒しておりました。

そうしてガムシャラにやってきた2012年夏、仕事も少しばかり落ち着いてきたところで、「久々にel zine作るか」となったわけです。正直、色々と考えさせられることもあり、もうパンクの本を作ることはないかなとも思っていたのですが、やってみると意外に面白い。原稿が集まってきたり、インタヴューの回答が届いたりする度に、しばらく忘れていた感覚、「こういうことを私は元々やってきたんだ」というのが蘇ってきたり。そして、SHITFUCKERもパンク、WOOLFもまたパンクという、この「音楽」の持つ多様性。ついつい身近にある価値観に支配されがちですが、世界は広いしもっともっと自由だ。という当たり前のことを、再認識したわけです。

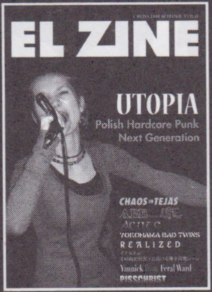
ついでに何で小さくしたかと言いますと、MRR誌をポシェット(今風に言うヒップバッグ)にクルッと丸めて、鞄から半分飛び出す感じで持ち歩いていたんですが、気がついたら消失していまして、多分路上で落としたと思うのですが、その瞬間に「el zineは小さくしよう!」と決意しました。別にヴィジュアルで見せる本じゃないですしね。

さて、次を出すのか、そもそも私の人生が今後どうなるのか分かりませんが、とにもかくにも本号をお楽しみ頂ければ至上の喜びでございます。

あ、EL ZINE/el zineの在庫ある分は十三舎のHP(http://www.juzasha.com)でも売ってるよ。ほんじゃ、STAY FREE!

※インタヴュアー及び執筆者名の記載のない原稿は全て山路健二が記した

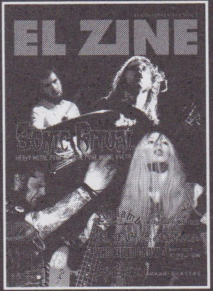
EL ZINE vol.12　2012年9月1日発行　E-MAIL　unno13@gmail.com



VOL.0 UTOPIA / SOLD OUT



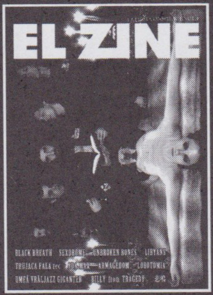
VOL.1 MOONLESS / SOLD OUT



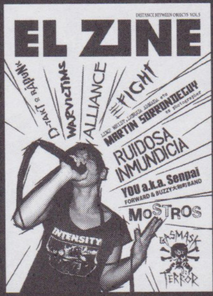
VOL.2 SONIC RITUAL / SOLD OUT



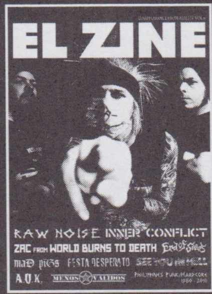
VOL.3 KALASHNIKOV / SOLD OUT



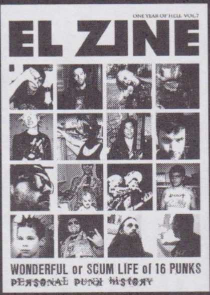
VOL.4 BLACK BREATH



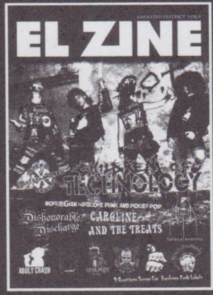
VOL.5 RUIDOSA INMUNDICIA



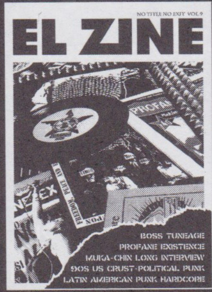
VOL.6 RAW NOISE



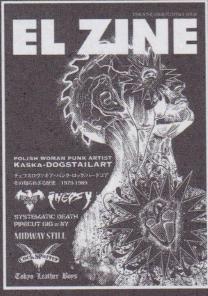
VOL.7 SIXTEEN PUNKS



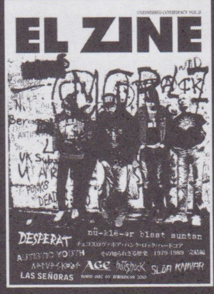
VOL.8 CHILDREN OF TECHNOLOGY



VOL.9 PROFANE EXISTENCE



VOL.10 KASKA-DOGSTAILART

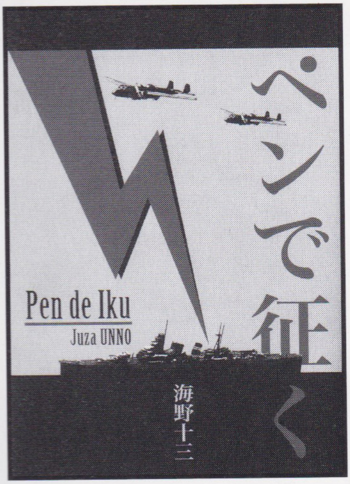


VOL.11 DESPERAT

海野十三「ペンで征く」

日本SFの父・海野十三が見た戦争
読者諸氏！これが本当の戦争だ！

日米開戦直後の昭和十七年一月、海軍報道班員として南方戦線へと派遣された作家・海野十三は、その最前線で何を見、何を感じたのか。戦闘だけではない、戦場の生々しい日常性が溢れ出すドキュメントが七十年の時を経て復刻。



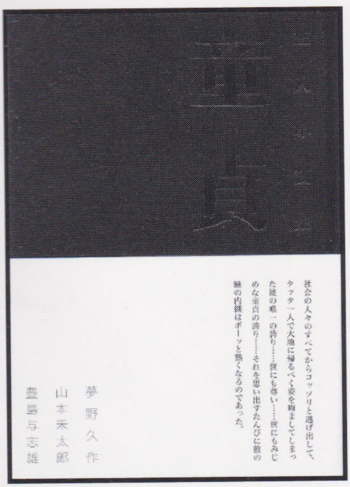
B6 並製　281 ページ　定価 1500 円 (税込)
版元検印＋特製缶バッヂ＋選べる帯

古本と一人出版の十三舎　　怪奇・幻想・エログロ・ナンセンス
http://www.juzasha.com

夢野久作・山本禾太郎・豊島与志雄「三人小説集　童貞」

三人の奇才が描いた童貞の悲哀、悲劇、非情
全童貞及び元童貞に捧げし一大奇書！

夢野久作、山本禾太郎、豊島与志雄という三人の同名短篇小説、「童貞」を一冊にまとめた『三人小説集　童貞』。
時代に逆行するかの布張り上製本・黒箔押しの装幀に函・版元検印と、造本の極美ここに究めり。



B6 上製　88 ページ　定価 1800 円 (税込)
黒箔押し＋版元検印＋函＋選べる帯


Drink and fuck and fuck shit up
ShitFucker
el zine vol.12
600 YEN

海野十三「ペンで征く」

日本SFの父・海野十三が見た戦争

読者諸氏！これが本当の戦争だ！

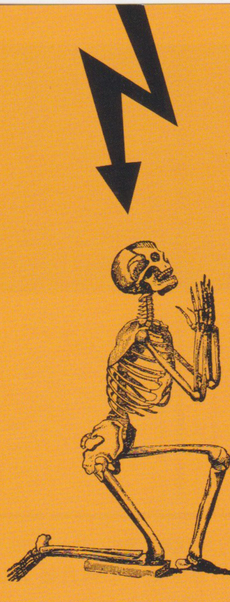
日米開戦直後の昭和十七年一月、海軍報道班員として南方戦線へと派遣された作家・海野十三は、その最前線で何を見、何を感じたのか。戦闘だけではない、戦場の生々しい日常性が溢れ出すドキュメントが七十年の時を経て復刻。

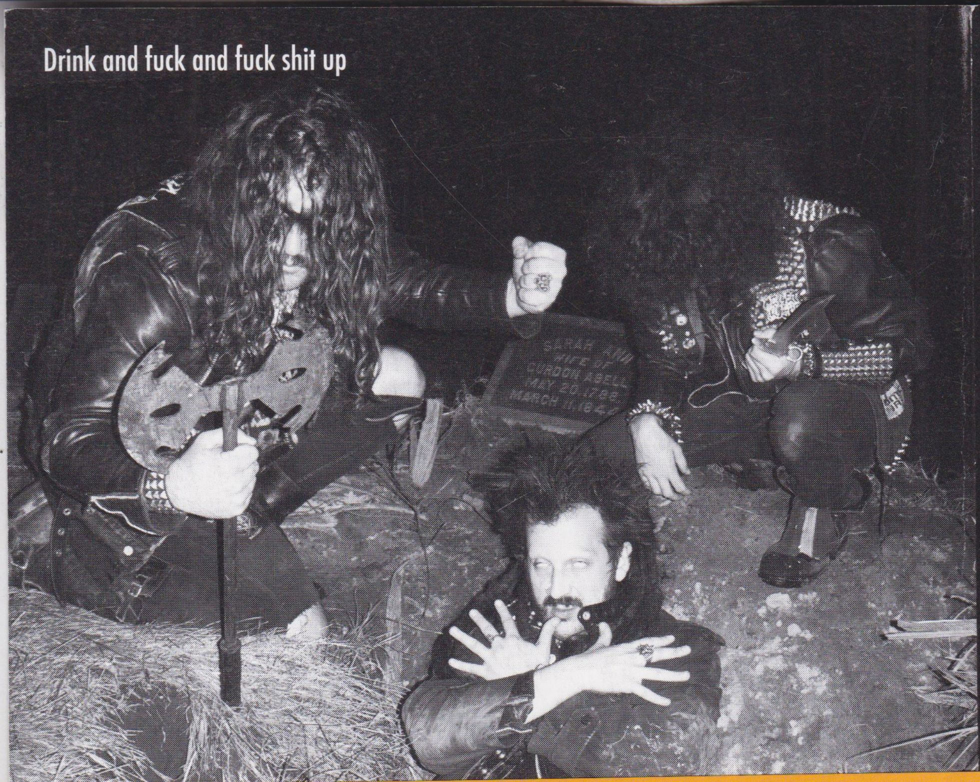


B6 並製　281 ページ　定価 1500 円 (税込)
版元検印＋特製缶バッヂ＋選べる帯

古本と一人出版の十三舎　怪奇・幻想・エログロ・ナンセンス

http://www.juzasha.com





VIDEO DISEASE RECORDS

ES GIBT KEIN WERT

CRASS
~"CRASSICAL COLLECTION"

Woolf

LASHING SPEED DEMONS

Tokyo Record Shop

VIVA HATE

CROSTA

Long Interviews

REDFLESH

破綻国家に生きるパンクス
—2012年夏　ギリシャ記—

DAVID O'DELL

TOFU THRASHER

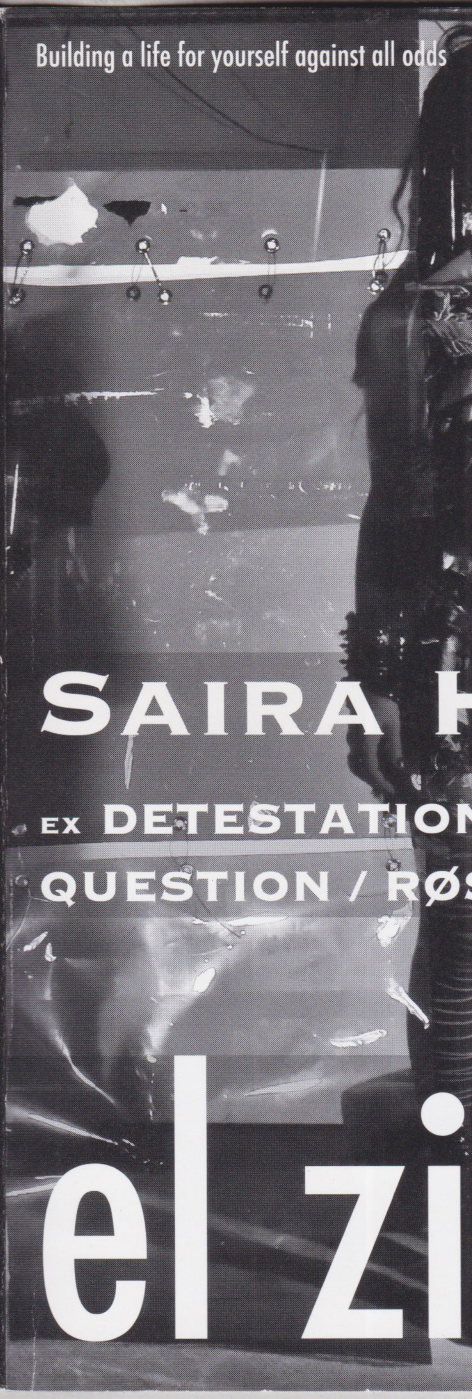
ShitFuckeR

el zine vol.12　600 YEN



el zine vol.12 Building a life for yourself against all odds

Building a life for yourself against all odds



SAIRA H

ex DETESTATION

QUESTION / RØS

el zi





Building a life for yourself against all odds

SAIRA H

ES GIBT KEIN WERT

S

Woolf

Tokyo Record Shop

E Long Interviews

REDFLESH

ID O'DELL

pitFuckeR

el zine vol.12

Building a life for yourself against all odds

ex DETESTATIO

QUESTION / RØ

el zi